

平成十二年一月一日発行（毎月一日発行）  
創刊大正十三年 通卷八七二号

# 川柳塔



日川協加盟

No. 872

同人特集・私の一句

一月号



【イメージ・キーワード】  
“Value for Human”

バリュー・フォー・ヒューマン

ミッシェル・アルクール



オーエスケーの  
紳士服

株式会社 **オーエスケー**

〒540-0024 大阪市中央区南新町1-4-7

(06) 6941-9631



本のことならご相談を…

- 川柳・俳句・短歌集
- 画集・写真集・絵本
- 社史・小説・エッセー
- 創業・喜寿を祝う記念誌
- 故人を偲ぶ追悼誌
- 郷土誌

図書出版

教育情報出版

〒557-0055 大阪市西成区千本南1-12-8

TEL 06-6658-8741(代) FAX 06-6652-2928

## 画竜点睛

橘高 薫風

二十世紀最後の年を迎えました。

長い不況とコンピュータの二〇〇〇年のトラブルの起りかねない不安の中ですが、先ずはおめでとを申し上げて、川柳塔への変らぬご支援をお願い上げます。

今年は辰歳、昇竜の気運で景気の上昇と川柳界の隆盛を期待したく思います。

そこで竜に因んだ話から幕を開けます。中国の南朝の梁の張僧繇という人は、

官吏としても太守などを歴任しましたが、それ以上に画家としての名が高く多くの秀れた技倆に関する逸話を残しています。

ある時、壁面に森林を描いたところ、翌朝おびただしい数の鳥が死んでいました。鳥が森と思って衝突したのです。

また、金陵の安樂寺の壁に四匹の竜を描いたときは眼を入れませんでした。

「これを入れると天へ昇ってしまうか

ら」と言います。人が信じないので一匹の竜に睛(ひとみ)を入れますと、たちまち稲妻が走り、雷鳴とどろいて竜が壁を抜け出し雲を呼んで昇天したのでした。

以来、「画竜点睛」は絵画や文章の一番大切な所に筆を入れて完成させる意に用いられるようになります。

これに類する入神の技を語るエピソードが、わが表紙絵を執筆して下さる直原玉青画伯にも、一度ならず二度までもあったのです。

大井川の上流にダムが出来、水没する歴史ある庄屋の建物を島田に移した時のことです。南禅寺の管長故柴山全慶師の揮毫の軸、「松寿千年緑」に因んで画伯は松竹梅(歳寒三友)を描かれたのですが、梅に秋の蝶が来て戯れるのです。花から花へとそれを折よく完成図を撮影に來た静岡放送のカメラマンがビデオに収めたのですが、それがその年の全国での撮影賞の大賞を獲得したと言っています。

また、宇治の瑞光院の襖絵にもよく似た事実がありました。玉青画伯の鷺の絵の部屋のガラス戸を本物の鷺が嘴でつつきはじめたのですが、入れないと分かる

と、鷺も考えたのでしようね、裏へ回り裏口から部屋に入り、絵の鷺に挑みます。ひよっとして鷺は交尾期であったのかなと思われるのですが、形が立派に描かれていると、それは目に見えるのですから、そのような現象も起るのでしょう。

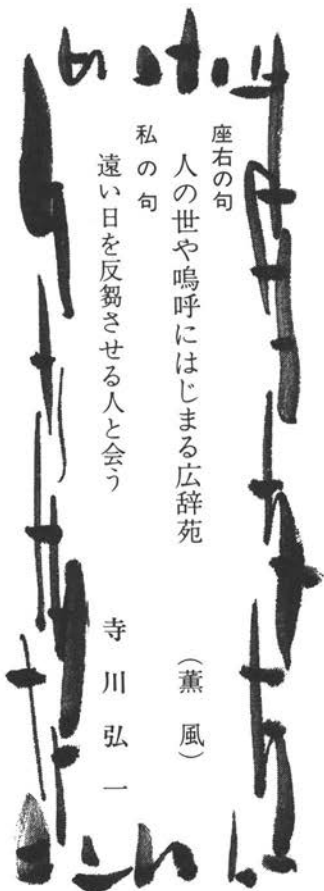
ここ数年來のことですから、今年九十歳の画伯、九十歳を過ぎての入神の技なればこそと言えます。

絵の力はこのように自然までも感動させると同じように、言葉の力、詩の力も例えば源実朝の和歌や宝井其角の俳句が雨を止ませたり、降らせたりした話も残っています。神通力、言霊というのがそれであるのでしよう。

人を感じ入らせるだけでなく、天地自然を動かす川柳が残せる境地もあるはずだと思っのです。

人類は悲しからずや左派と右派  
一ト握りああ人生は和に如かず  
路郎先生の句ですが、年の初めに当り世界の平和と人類の幸福を願います。

自然は動かせずとも人を感じ入らせる句へ、私達は精進を続けたいと思います。今年も川柳を大いに楽しみましよう。



座右の句

人の世や嗚呼にはじまる広辞苑

(薫風)

私の句

遠い日を反芻させる人と会う

寺川弘一

## 川柳塔 一月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 画竜点睛

雅号

川柳塔 (同人吟)

この句 この人

自選集

私の一句 (同人特集)

川柳の群像 直原七面山

誹風柳多留二四篇研究

大空のころ (108)

水煙抄

秀句鑑賞

同人吟  
水煙抄

橘高薫風 (1)

河内天笑 (2)

橘高薫風選 (4)

橘高薫風 (52)

東野大八 (58)

橘高薫風 (76)

河内天笑選 (82)

宮口笛生 (78)

藤田泰子 (109)

## 雅号

河内天笑



三つほどの偶然が重なって川柳と縁のつながったのが昭和四十二年の六月。「若芽川柳会」という会の席題「水」で

背のびして祖父の墓に水をかけ

が披露されましたので「河内」と名乗りましたところあちこちでクスクス。この日何回かこの呼名を致しましたが故清水白柳氏が止めの選評をされるに先立って「今日はいかかわちわちとたくさん言いはってよかったんですけど次からは雅号で呼名して下さい。摩太郎さんにええ雅号つけてもらいなはれ」と教えて下さいました。その夜九時頃帰宅した私は生後三ヶ月の長男のほつぺを指でチョンチョンと触ったところニコニコとしたのです。「面白いからやない、天の神さんが笑わせたんや」そう感じて即座に「天笑」が浮かび会長さんに電話で報告致しました。

川柳塔本社への初出席はこの年の十月八日二賞発表句会の千日前治安寺でした。「下足番もある畳の着てはるなあ」と感心しながら五十畳もある畳の間へ。初めて河内天笑と記名。司会者が菊田いさむ氏だったか西田柳安子さ



愛染帖

茴香の花

「晴」

一路集「餅」

「いっぱい」

初歩教室「未来」

杜的さん どうしてそんなに急いで

福元みのるさんを偲ぶ

十二月本社句会

柳界展望

各地柳壇（佳句地十選／市丸晴翠）

一月各地句会案内

■編集後記

波多野五楽庵選……（110）

宮西弥生選……（114）

高野宵草選……（116）

川上富湖選……（116）

篠原いつみ選……（117）

吐田公一……（118）

都倉求芽……（113）

辻川慶子……（139）

……（120）

……（124）

……（126）

……（172）

みつ子・楓楽……（174）

座右の句

新年や年を取るほど白い雪

私の句

今日ぐらい嘘はつくまい四月馬鹿

（薫風）

出口 セツ子

んだったかはよく覚えていませんが脇取りが先程入口で「いらっしやい」と靴を棚に入れてくれた児島与呂志さんだったのです。びっくりやらときめきやらの私の本社句会初出席でしたが、実は一番感動した事が思いもよらぬところにあつたのです。

それは披露が始まってすぐの「呼名」の面白さだったので。それまでの「自分の世間」とは全く異次元の夢の世界へ来ているような気分になって来たのです。印象に残った呼名のいくつかを紹介しますと、ややゆったり目のこしようにえん（小松園）、相当早口のしえいしやん（生々庵）、とても歯切れよい水客、弓彦、静馬、梅志の各氏、それにアチャコ、コホー、ヤメロー等々はどんな字なんやらかといろいろ思いめぐらせながらのびやかで楽しい雅号の世界に吸い込まれてゆく私でした。

披露される作品もさることながら「雅号」のたのしさの虜になったのです。この日六十七名の出席者のうち女性が十二名。半数以上を女性で占める現在とは隔世の感があります。女性作家の台頭著しい昨今ですが、本名を雅号にされて居られる方がたくさん居られ、

女性作家の台頭著しい昨今ですが、本名を雅号にされて居られる方がたくさん居られ、大勢が参加する会等では混乱を招くことも多く、勇気を出して雅号をお付け下さいますようお願い申し上げます。



橘 高 薫 風 選

豊中市 吉 田 あずき

二〇〇〇年ハイテクに足掬われる

二〇〇〇年いよいよ深い埴輪の目

二〇〇〇年噛めないままに呑みこもう

打開策太郎冠者にも頓智あり

凄む時何で大阪弁になる

死の時間―妻を追いたる江藤淳

和歌山市 牛 尾 緑 良

君が代が過去をいっぱい連れてくる

かしわ手を大きく打って神の視野

封をしてあるのは遊び心です

背くらべ今人生が始まった

働けど蟻の黒さに敵わない

二〇〇〇錠飲んで一年生きのびる

堺市 桑 原 道 夫

バス停の隣のトイレ乾ききり

アタッシューケースに江戸の見せ物入れておく

帽子かぶると猿はいつそう猿らしく

牛乳を流せば疼く流し台

お堀に雨 家鴨も僕も赦されて

理髪店の椅子もいつしか世紀末

羽曳野市 徳 山 みつこ

カミニート タンゴを舞って散る落ち葉 (アルセンチン)

天と地を結んで虹は縦に出来 (イグアスの滝)

キリストが両手に包むリオの街 (コルコバードの丘)

空は青 水の階段無事越える (バナマ運河)

流水へ白頭鷺が絵を作る (アラスカ氷河)

アリガトウだけ十ヶ国語で言える

吹田市 山本 希久子

福寿草新築の香がまだ少し

残照の朱と生きるなり二〇〇〇年

銀河から手紙が届く冬景色

陽の当るアトリエ セザンヌのリング (南フランス 2句)

アルルの街ゴッホの狂気見ていたり

愛の形に卑弥呼の世から耳飾り

神戸市 中村 ゆきを

正月の樹々新年の音がして

ひそやかな葉ずれ先祖の声がする

素うどんがこんなに美味い初詣で

遠い雲私の罪をじつと見る

日溜りに昔話の数も減り

マンドリン午後むらさきの雨となる

米子市 木村 春枝

木枯らしの音にびくともしない首

丸い窓尖った窓にあるくらし

火を抱いて白鷺しかと立つ水面

そっくりの声で親子が返事する

産声の力強さも新世紀

マジックの火は熱くないものらしい

寝屋川市 北岡 波留吉

当り年祝い竜神にもお神酒

嫁の雑煮一際映える当り年

老婆の紅が引きたつ松の内

素晴らしい新春我が家にも曾孫

何も言うなと姑が仕立てる娘の晴れ着

腕白が神妙に撞く除夜の鐘

西宮市 井上 松煙

天皇も女房も君と呼ぶ絆

君が代を習った孫に安堵する

作品が高ぶって待つ文化祭

紫をひそかに君の花ときめ

一匹の蒲焼分ける老夫婦

老いていま色あきらめて空のふり

鳥取市 美田 旋風

白髪より茶髪の方がかわいらし

庭に出て蚊に献血をさせられる

リハビリへ恋の演歌が効いてくる

帰らない出来のいい子を持つ老母

金を出し祝ってもらう誕生日

針箱が親爺の必需品になる

香川県 神保 坊太郎

落ちそうで落ちぬ大工の三尺寝

どの国の旗も吸ってる血の匂い

百雷の一時に落ちし癌告知

凄まじき形相柘榴の自己主張

ヒョッとして猫が踏むかも核ボタン  
吐息したロダンの像が立つ気配

熊本市 永田 俊子

打てばひびくものを失くした木の葉髪

遮断機の前で自嘲の背が寒い

月一つ千々の思いを受けとめる

介護して介護をされるいろは順

再生は出来ぬと青い地球言う

熊本市 高野 宵草

プラトニックラブを包んだ鱈雲

旅づかれお茶漬けでいい二三日

恵まれた五体で押した車椅子

長生きをよろこばれたい身を修め

黄葉に着替えて冬を受け入れる

熊本市 岩切 康子

人見る目持って悲しい事嘆く

冬至とや襖はずしたまま和む

春に逢う庭の球根埋め直し

咬む程度知ってる犬と小半時

御病氣を案ずるよりも逢いに行く

唐津市 井上 勝視

引き算の限界が来る年金日

神だつて団らん家族好きだろう

酒のうえだから尚更許せない

過去洗う写経静かな雨の夜

ホノルルで妻の荷物を持たされる

唐津市 樋口 輝夫

手相診て保険に入れと言う女

ローン着て見栄を張り合うクラス会

今日もまた妻が油を売りに出る

文学賞受けて女房胸を張り（佐賀県文学賞）

曳山＊走る街に流れる道離子（唐津供日）

唐津市 市丸 晴翠

里の柿グルメ鳥の指定席

鼻先の父の拳が泣いている

冬籠り春待つ父が鎌を研ぐ

近付けた父また上の雲になる

塀が消えキャッチボールの子等も消え

唐津市 山門 幸夫

いや青くいや涯しない霜の朝

金木犀窓を開けるやああ我が家

晩秋や順よく庭に来る小鳥

庭雀落穂拾いが済んだよな

ポチはよく家族のランク知っている

唐津市 山門 タミ

田圃から帰つて来たよ雀たち

老人は老人なりに歩調とり

老いの血も湧かして見る祭り山笠

一円の重さしみじみ消費税

端居から陽足が伸びて布団干す

不行儀と思つていないジベタリアン  
唐津市 久保正剣

ゴミ袋買つては捨てるゴミ袋  
県警と府知事が競う破廉恥度  
三味線の音色に遠いボトル棚  
水垢離の母が知つてゐる寒の水

唐津市 仁部四郎

正月や今年は辞書を買ひ替へる

正月や郷土紙らしい空元氣

預貯金の話も屠蘇の肴なり

内閣の話は出ずに屠蘇を替へ

スーパ―が来たので酒屋屠蘇くれず

唐津市 宗水笑

秋祭りだけに帰省の不孝者

吾が名句みんな先人詠んでゐる

運動会転んで父のいい背中

ああ見えて急いでゐるよナマケモノ

日本晴れめつたに聞かぬ永田町

唐津市 山口高明

鳩の出る帽子が欲しいオチビさん

白菜のように人間塩で揉み

月光のしたで恥じらう歎喜仏

肌を捲く大蛇が女陰を覗き込む

交霊の巫女の洪声亡父のもの

ないないと奥の方から佐賀訛り  
北九州市 梅田宣司

よく見れば茄子にさえもある器量  
宿の下駄相合傘も悪くない  
無為無策はや年末の声を聞く  
ほどらいに受けて相手の貌を読む

高知県 北川竹萌

親睦のツア―で喘ぐ紅葉坂

温みある政治と決めた胸の中

有馬温泉浸り紅葉の三千院

広域のツア―に喘ぐ八十の足

比叡山紅葉を余所に延暦寺

高知県 赤川菊野

思ひ出をたどれば草原風の中

灼熱の砂漠ここにも人の影

仏像の深い瞳に魅せられて

辛辣な言葉の裏にある情け

ひとり居は自分をほめたり叱つたり

高知県 小澤幸泉

定年の妻の祝いは別居なり

独り酌む昼酒に酔い淋しかり

親子五人バラバラにして秋暮れる

時々目まいも加え生きつづけ

しばらくは誌上をたどるハイキング



香川県 池内 かおり

夫には大きい方を差し上げる  
日章旗皺をのばしてあげます  
別註の椅子を夫にプレゼント  
行政の谷間で老いが加速する  
フィクションじゃない海賊が出たよ

香川県 工藤 吟笑

大漁旗漁港に初春がやってくる  
車間距離置いて夫婦にある平和  
街路樹に睨まれている排気ガス  
千年の眠り古墳が眼を覚ます  
九十年生きて東の空拝む

香川県 成重 放任

頭角を表わす時期を耐えて待つ  
天命と諦めるのはまだ早い  
少子化に天涯孤独夢にみる  
茶漬でもわが家に勝るものはない  
交わすたび酒に飲まれて出る本音

香川県 川崎 ひかり

近頃は豆腐の角でケガをする  
一の矢がはずれた私の半生記  
指切りの指から冬の風が吹く  
ともかくも話せる親子で恙なし  
シャネル着て草抜きをするおばあちゃん

香川県 山地 マツエ

コピーした書類に指図されている  
祭りの灯消えて過疎地は元のまま  
真に受けた噂で角が生えかける  
催促の出来ぬ小銭を借りられる  
天才ではないが笑顔があつたかい

松山市 宮尾 みのり

般若心経悟れぬ心持て余す  
親離れ子離れ出来ぬ年金で  
枯れて尚ばらは辛口捨て切れぬ  
ロボットのリズムで並ぶにぎりめし  
軌道修正倍もかかったエネルギー

松山市 丹下 美津子

ようこそ土佐ヘコスモス見事咲き乱れ  
水平線に太陽沈む神秘的  
足摺音頭もらって帰る箸袋  
新米が里から届く祭寿司  
食べごろの柿を小鳥が逃さない

今治市 野村 京子

米を研ぐ女たらんと真剣に  
生きざまを飾る夫婦のエピローグ  
花好きでやがて笑顔が花になる  
リズムの奥に浄土の花の舞い  
お茶漬の軽さで夫婦ごっこする

宇部市 平田実男  
亡父母に逢いたい時は目をつぶる

見送りの三振でした片思い

君とならいつとわぬ泥舟砂の城

手を貸してやる愛貸してやらぬ愛

私のエンジンオイルワンカップ

美祢市 安平次 弘道

やるだけはやった芝居の幕があき

四面楚歌ままよぐすり寝るとする

百歳の葬儀悲しい顔でなし

にっこりとしてるが見せぬ肚のうち

未知数に賭けて夫はほっとかれ

広島市 森田文

秋日和こんな日のこと布団干す

笑い過ぎ軽く見られたなと思う

秋の実の初々しくて献茶会

日曜日親のかわりにするしつけ

約束を果し静かにしています

竹原市 古谷節夫

故郷は青雲の日と同じ空

リストラもノルマも無縁鉄を振る

旗色は保護色にして輪に入る

封じ手を読まれてならぬ角番で

いちまいの木の葉が散ってゆく重さ

竹原市 小島蘭幸  
麻生路郎の横顔がある菊の白

路郎展見て来た丘の上に立つ

娘はやがて巣立つ滑走路の長さ

カーナビよ妻は隣にいつもいる

帰って来て欲しい4WDを買う

竹原市 時広一路

青い空雲の山頭火がぶらり

横書きへさあひらがなよう崩す

救急車運転させてくれないか

ノンシユガー探す私は甘辛党

風に火をつけて只今昼寝中

竹原市 森井菁居

原風景あたため瀬戸が夕映える

石工の名忘れて久し磨崖仏

廃屋の素材が好きなベレー帽

雨の家並に棲んでる佗と寂

大橋を渡り切ったら孤に出会う

竹原市 岩本笑子

あつものの菊よ日本髪に似て

すき焼きにしようネギをいただいた

ガードレールが途切れ滝へ下る道

二度三度振って土鈴を買わされる

山道の椿泣いてるかのよう

竹原市 三宅 不朽

電話とは別に封書の秋が来る  
木守柿うわさもたえて地に還り  
介護保険冬のうしろの冬の星  
昼の月なに思ひしや昼の笛  
梅千の種あそばせて聞く噂

竹原市 石原 淑子

アルファ―波頼んでニッコリ姫鏡  
支え合う静かな愛に菊薫る  
コミック誌抜け出たような若い人  
デンドロの花芽見つけた嬉しい日  
初日の出二千年彩に輝けり

広島県 藤解 静風

ゴミ捨てる拾うのも人かなしいね  
ポコポコポコ底厚靴のお通りだい  
キレルムカツク ガラス細工の子を想い  
三代の女系けちんばがつづき  
酔い醒ますようにも見えるロダン像

岡山市 井上 柳五郎

新世紀健やか生きよ初曾孫  
這い這いができぬに曾孫後退り  
小春日和だあれもない遊園地  
帯残しさつさと鳥に木守柿  
眠れぬ夜また戦友が一人抜け

倉敷市 小野 克枝

竜神の絵に旧姓が小さく添い  
嫁がせて嬉し淋しい雑煮箸  
年一度想い出させる顔があり  
何はともあれ新春の顔で行く  
好きな風選んで回れかざぐるま

倉敷市 井上 富子

日本語が好きで耕す広辞苑  
カーテンの裾で遊んだ秋の風  
腕まくりザックバランな男のレンジ  
冥土まで自立を願う万歩計  
お達者が親に貰った歯を磨く

岡山県 大石 あすなろ

瞬発力まだある靴のひもしめる  
ストレスの音で折れてるシャープペン  
青春を偲ぶ釦をてのひらに  
あの時を静止画像にしてみたい  
上げ潮に乗った男が旗を振る

岡山県 矢内 寿恵子

柳聖の次々消えて秋深し  
菊花展武蔵の里も秋の陣  
農政の矛盾に穀の種を選ぶ  
もう五十まだ五十かと子を思い  
人生十色ひと色二色足らぬまま

岡山県 小林 妻子

二千年の賀状へ独りかしこまる  
二千年丁度喜寿です老いたりな  
数珠のいる用事へ祖父もいそがしい  
十人十色駒の揃わぬのもまじり  
美しい声です油断しておれぬ

岡山県 荻 野 鮫虎狼

海鳴りをともに受けて恋燃える  
ゆつくりと箏の音を聞く十二月  
老妻に任せた服は少し派手  
食文化楽しむ妻の旅プラン  
総入齒餅の固さが今判り

岡山県 山 本 玉 恵

一期一会の風を纏いて寺まいり  
不揃いの足音となる世紀末  
明日になればなればとついになまけ癖  
切り抜けた挫折の中の枷のあと  
突っ張ってみても何にも残らない

岡山県 福 原 悦 子

米野菜育て豊かな母でいる  
ファミコンで遊ぶ子供の世界末  
子の希望親の願いと噛み合わず  
どん底でどっこい生きる太い首  
栄冠のうしろに母の涙あり

岡山県 福 原 辰 江

介護保険身につまされることばかり  
残暑続き遠き紅葉の吐息きく  
愛想はいらぬ屋台の男酒  
郷愁を舞うて嬉しい赤トンボ  
一寸だけ愛想言うたばかりに

岡山県 富 坂 志 重

飲んべえが呆けて飲む事忘れてる  
衣食住足りて粗末になる命  
他意のない暴言に酔う祭り酒  
習慣で時代おくれがなおせない  
無人市笑顔のたまる箱の中

松江市 佐 野 木 み え

家中の時計合わせる子の帰省  
菊日和ハーブ茶入れる縁側で  
イヤリング揺れて嬉しい娘のデート  
道の駅でワインと小梅買ってくる  
菊人形眺めて過ごす小半日

松江市 安 食 友 子

ややセンチ枯れ葉の歌を聞いてから  
移り気が騒ぎだしたぞグッドバイ  
コニヤックで昔日慕うワンスモア  
静電気ふりぶりの肌苛める  
せかせかとバトンタッチのように冬

松江市 川 本 畔

振り向けば男の影が薄くなる  
君探す駅でニアミスばかりする  
折れ針の悲しみ誰も気がつかぬ  
神様のお仕置き痛みじわじわと  
やさしさの半分ずつを分け合つて

出雲市 竹 治 ちかし

親がしたように子供も里を捨て  
子が巣立ち夫婦は旅を決意する  
真と偽の間に本当らしい嘘  
亡父に似た咳をしている五十三  
古里の道が少しずつ荒れる

出雲市 板 垣 草 丘

二〇〇〇年へ心裸にして生きる  
生き甲斐のうえに手間賃までもらい  
体操甲 操行乙の世話になり  
アラ汁もたっぷりがいいお客さま  
ふもとからゆっくり暮れるみかん山

出雲市 吉 岡 きみえ

宝船三夫婦のせて船出する  
絶食の朝に食べたいものがある  
三輪車老人力で踏んでいる  
思いきり唄ってわたし春を待つ  
とっても哀しいことで冬ごもり

出雲市 園 山 多賀子

柘榴割れ極まりのない自己主張  
川やなぎ風が絡ませ風が解く  
菊褒めて見舞いの言葉言いそびれ  
受け皿が間に合わなくて鬱こぼす  
咳一つ演技にみんな黙らせる

出雲市 富 田 蘭 水

歳男肚ひきしめて陽を拝む  
菊の香に文化ぶんかと伸ぶ知性  
芯ばかり強くてまわり身がつかぬ  
安いことしばし桃源郷の酒  
大雷雨身の不浄を消し飛ばす

出雲市 小 玉 満 江

山一つ越え一つ越え萩城趾  
深酒はおやめなさいとNHK  
かやぶきの屋根に小さな秋の風  
しあわせをかみしめながら箸運ぶ  
美人アナ瘦せた老けたと言う茶の間

出雲市 岸 桂 子

母白寿千羽の鶴は翔んでいる  
蛸棲む里から届く花の種  
それぞれに抱く価値観と生きている  
カラフルな錠剤を掌に秋の風邪  
花も散る人も散る日の曼珠沙華

出雲市 小白金 房子

歲月が許し心を丸くする

錦秋を窓辺に貰うバスの風

鎌の柄のトンボと憩う畑仕事

老いの手に戻るしあわせ曾孫抱く

ごぜんはし増えて三夫婦新春の膳 十月孫結婚

出雲市 石倉 芙佐子

風船に怒ってみても埒もない

冬近い女の森に巣を作る

白鷺と目線が合うた寒い朝

夕焼に蛇皮線狂おしいほどに

神々の浜より上る龍蛇様

出雲市 久谷 まこと

秋夜長男の夢ははてしなく

じれったいもう一言が出ぬあせり

回り道何処で戻そうロスタイム

生きてゆくための方便有されよ

閑居して荒ぶ波風やり過す

島根県 堀江 正朗

祝われて八十八の重味知る

腹の立つときに涙の出るも歳

文明に取り残される白い杖

ほろ酔うて友と昔を語るよさ

手さぐりの僕に日暮れの早いこと

島根県 堀江 芳子

歳をいただく此の幸せに生かされん

さりげなく掟の如くかばい合う

見えぬ目も物を言うからいとおしや

真夜中の往診ご来光のごと

連山の雲の帽子の美しさ

島根県 松本文子

辿りつくヤシの実幸せだったのか

咳が出るから男の人に近づかぬ

無人駅黙って発車してしまふ

コスモスが泣いてる御身大切に

いないいないばあ三回したら泣けてくる

島根県 伊藤 寿美

神棚に嬉しい便り載せておく

嬉しくてつい自慢話をしてしまふ

柳誌にもカタカナが増えカナ辞典

携帯を切り病院へ行く見舞い

どんぐりがポトリと落ちて秋深む

島根県 榊原 秀子

いい顔でいたい鏡の曇り拭く

香水の空瓶はんなりまだ匂う

十三夜ひとり見るのが惜しい月

寒牡丹咲かす島あり秋最中

因習にこだわる私の針供養

島根県 森 茂美

臨界事故包む風呂敷見当らず

青い目も交ざる豊作村祭り

ライバルに自慢の魚拓拝まされ

核積んだ船悠然と来る港

宇宙から見れば戦の好きな星

鳥取市 上田 宣子

躓きの痛さがのこる爪の先

薄皮でやっと包んでいるところ

野草茶に少し期待をかけすぎる

目の薄い人の爪切る菊日和

わたくしを忘れた姑とティータイム

鳥取市 坂田 和歌子

よく喋る私に噓てんこ盛り

背負う物以外と重くする写経

お正月五十五回もしたかしら

人間の餌にならない金魚たち

覇氣のない咳を上手にしています

鳥取市 富山 檳榔樹

長生きにたんたんと打つ句読点

和顔愛語贈る言葉は老いの詩

世相どうあれ意義ある余生老い磨く

枯れ尾花寂然不動論し立つ

淋しさへ吹く木枯しに老いを知る

鳥取市 春木 圭一郎

今年こそ迷わず登り竜となる

竜入りの賀状にやる気わいてくる

早々に竜の落とし子買って来る

竜宮に遊びあと先考えぬ

男なら竜虎と言えろひととなれ

鳥取市 倉益 一瑤

試練の風に負けぬ女の細い首

花時計女の影が長くなる

家中の汗で飾って嫁に行く

哀しみの皿からやさしさが溢れ

肩の荷をだんだん重くする情け

鳥取市 植田 一京

おしゃべりが似合う時雨の喫茶店

逢いたさがつのる数日雨つづき

舞っているうちに着地も見えてくる

言いわけの口に寒さむ雪が舞う

年の瀬をドッコイショと越えてゆく

鳥取市 杉本 孝男

飴配る婆ちゃん今日は年金日

捨てに來たストレス海に貰う破目

口結び腹に一物ある目つき

キリストも無欲の方へ味方する

ぺんぺん草土地成金の夢のあと

輝いている高齡新人類

鳥取市 徳田 ひろこ

趣味あまたこの世に飽きることがない

ミレニウム私までも揺り起こす

表札を掛けて大きくなった部屋

人情の釦も少しずつ緩む

鳥取市 武田 帆 雀

出鱈目をして家来が多くいる

手作りの舟船長に推されたり

双璧の一人は銭を持っている

利き腕に包帯してるとは見せぬ

三步あと離れ市長と菊見会

鳥取市 岸 本 宏 章

深追いをすればきれいな虹も消え

どんぐりと語って森が好きになり

遠慮して旗日に旗が立っている

私には描けそうもないモンタージュ

おいしいと言えばお歳暮ハムばかり

鳥取市 岸 本 孝 子

乱れてはならぬ最後のけむりまで

遠慮してけむり吐いても味気ない

月影になってあなたに逢いに行く

トキが舞うこんな普通が喜ばれ

包んでもほのかに匂う恋ごころ

日の丸を虹艶やかに秋の空

ペン執ると時々宇宙へ足が向く

桃源郷へ時々誘う酒煙草

菊満開一氣に庭が若返る

近火見舞いのベルに真夜中起こされる

鳥取市 西村 黙 光

貴方という灯火たより生きてきた

弟子ひとり親方今日も目刺し焼く

寝言いう程の男にまだ逢えず

茄子の紺あれば母しか出せぬ色

歳重ね頭をさげること多く

戒名は要らぬ墓石など要らぬ

ちぎれ雲つなぐと亡母の顔になる

難破した子等へ母港の灯は消せぬ

明日という日はないこの世仮住い

罪一つ洗い流している雨だ

鳥取市 岩 原 喬 水

名刺見て深々頭下げ直す

老骨に活気を湧かす女ができ

サヨナラと据った尻が長過ぎる

警官が金と女で縛られる

愛想と電話選挙の間だけ



鳥取市 石上悦子

停年後大飼うと決めお勉強  
理屈では一日一句作りやいい  
順調に体重増えて更年期  
時々は吠えなくなつて月を見る  
授けられ親をやらせてもらつて

鳥取市 福田登美

余生の美 絵の具皿には出し切れぬ  
回り道しながら生きる広い視野  
温かい人の近くで傷が癒え  
首振つた心の襷を覗かれる  
感情の起伏に影もついて揺れ

倉吉市 最上和枝

がらくたの中で古伊万里探し出す  
厨から煙が消えてチンの音  
電気剃刀住所不定の三世代  
鳥の餌になりたく木の実赤くなる  
腰の携帯わたしの秘密知っている

倉吉市 松本よしえ

お願いに來たとずかずか上がりこむ  
ぼつぼつと下りの坂で虹に逢う  
スーパで煮豆をえらぶお爺さん  
されこうべ標本室の守り神  
ルビーだと言うから奇麗ねと褒める

倉吉市 山中康子

人技と思えぬ粋な菊花展  
二〇〇〇年曆に負けぬ佳い年に  
山茶花が立冬の紅燃やしてる  
趣味だとして仕事のように根をつめ  
余生なおいつまで跳べる番鳥

倉吉市 淡路ゆり子

新世紀願いはひとつ家族の和  
五臓六腑丈夫に生きる親ゆずり  
一斉に駆け出す子等を追うしぐれ  
孫にまで下手と言われた目玉焼  
長男に嫁いで守る墓がある

倉吉市 山本玲子

絶対を付けた内緒はすぐに洩れ  
綿密な計画却下されドミノ  
小手先が人に任せぬ庭木の整枝  
浮き草は生れながらに遊泳術  
秘密はもてぬ金木犀の性だから

倉吉市 米田幸子

引き分けにしよう互角のねぎ坊主  
濡れ衣を乾かす竿が見つからぬ  
勉強ができていじめの的になる  
土壇場になると汚ない手も使う  
侍も人目忍んで朝帰り

倉吉市 野口節子

迂闊にも磨き続けた駄馬の足

晩学の姿に神も頷かれ

大声で喚く男は御し易い

ブランコに揺られ追い風待っている

秋を着るああ連峰のフアッションショー

米子市 白根ふみ

石段を登りつめると母の墓

小祥忌亡母がそこらを掃いている

めん取りの大根亡母が浮きあがる

立冬に野菊の墓が北にある

オーケストラ始まる風がじつとする

米子市 政岡日枝子

西は迷路駈け足で行くところでない

スポーツの秋というのに母と遊ぶ

曼珠沙華母はたやすく崩れない

人間らしい咳になったから寝よう

味噌汁が出来ても母は目覚めない

米子市 田中亜弥

手のとどく範囲に水と飯をおく

産声が響き歴史を変えてゆく

整理整頓が苦手になってきた

表札に毎朝礼を言っている

親切な鳥に毎朝おこされる

米子市 林瑞枝

長寿いま米子だるまに祝われる

化石つぎつぎ出て考えるわが先祖

ドイツから電話金髪の孫抱いて

悠々と鯉と同居の目高たち

日章旗立て追い羽根をしたい新春

米子市 茂理高代

安心をしてよと孫の大きな手

倅を探しに行こうあの峰に

人が逝く黒いコートも瞳も濡らし

凜として生きてる事のむずかしさ

大根の味噌汁秋の匂いだよ

米子市 青戸田鶴

しあわせな振りをしている昨日今日

決断は早いが悔いもよく残り

つわぶきの花思ひ出があふれでる

亡姉の姿揺れていそうな秋ざくら

縫い直す亡姉の着物の温かさ

米子市 澤田千春

知らぬ町でなつかしい絵とすれちがう

太陽は森の動きを知っている

しげさ節島の人情歌いあげ

御先祖の住所にでんと居座った

スポーツをなんでもかじる好奇心

米子市 野坂 なみ

明けまして初日を拝み深呼吸

玉鋼の火連綿として奥出雲

よろこびを大きく回す観覧車

やがて大台ひと日一日が宝とも

私の頭上いつも大きな影がある

米子市 門脇 晶子

机の傷は長い間のデモである

郵便箱に愚痴は入れないことにする

はるかなる山はほとけの花畑

友が来て私の部屋はあたたかい

赤い布ふった男も牛となる

米子市 中井 ゆき

真実を吐いて首すじ軽くなる

なつかしい声つぎつぎと天に逝く

火消しつば抱いているから燃えきれぬ

野火走り小さい命にげまどう

おおかみの手と気付かせぬ声を出す

米子市 光井 玲子

新世紀の孫のジャンプを見守ろう

ふる里の馴染みの広場さまがわり

玩具の機関車父の郷愁か

母はもっぱら頭寒足熱ごきげんだ

トップの頭うしろから見てきたな

米子市 木村 富美子

待ち針が待ちくたびれて錆びている

針供養する程針を使わない

一人では大阪駅は歩けない

畦道に立つて居そうな父と母

この道と決めた後悔していない

米子市 本吉 宗光

介護にもお上意識の保険法

あの微笑浮気心を刺激する

七転び八起き不安な吾がダルマ

リストラで経済力のアップとか

自自公でミラクルプレー世紀末

米子市 永井 三津子

山削る森は自然のダムなのに

喧嘩の度に若さ返せと言われても

嫁姑互いの愚痴を聞く仏間

友が逝く昨日と同じ朝なのに

寡婦故に夫婦の善さがよくわかり

米子市 神庭 詩郎

回り道したに立ってた募金箱

自分史の中で重みのある戦

過去の事言うまい農家に来る嫁だ

保健所で育児書通り教えられ

就職が決まり団らんの年迎え

大漁の海を鷗が離れない

米子市 鷺見正子

この世よりあの世が近くなっちゃった

血が陰で支えてくれている背骨

悪党も天使も混ざる住所録

鶴 電話をくれる子が欲しい

鳥取県 羽津川 公乃

腐葉土となつて活力溜めておく

息子もう三児の親だ舵任かす

過去帳に似顔絵あれば楽しから

幻の始祖は宝暦四年没

私利私欲包んで今日の燃えるゴミ

鳥取県 乾 隆 風

しがみつく空蟬わたくしを写生

石段を登つてやつと喜寿になり

われ鍋にとじふた命待つたなし

声のない声が石ぶみから諭す

光明が照らし泥凡夫を晒す

鳥取県 土 橋 睦 子

初春に日の丸揚げて船が出る

咳ひとつむかしの傷が疼きだす

母の声きく坂道をまた登る

きみどりの糸を集めて春を編む

茶を入れて過ぎ去った日をなつかしむ

一行詩にさらす心の襲の奥

鳥取県 岩崎 みさ江

ロスタイムを雪虫たちは知っている

有為転変 今紫陽花は亡骸に

野辺送り最後も人の手を借りる

貧しい頃にもう帰れないゴミの嵩

鳥取県 土 橋 はるお

まぼろしに溺れてばかりいるのかい

銭の成る樹には介護を怠らぬ

安らかな顔になるまで陰干しに

小手先はネズミ小僧にかなわない

うそほんと孫も小さい波立てる

鳥取県 田 村 きみ子

松葉ガニの話が弾む輪に入る

スポーツはまるきり駄目という家系

おう寒い時雨も白い色になり

出る幕はなくても守る孫ふたり

負けて勝つけんかも楽し旅だから

鳥取県 西 原 艶 子

果物の丸さやさしくしてくれる

ふしくれた指に包容力がある

わらべ唄かすむ記憶をとり戻す

別れなど言うのが嫌でそつと抜け

ねんごろになる近道はなさそうだ

鳥取県 林 露 杖

花回廊でんと大山借景に

日本海紺碧に風ぎ漁船撒き

老骨に柚子 柿とりも格闘技

老ゆる血の燃えず滾らず蠢かず

崎眠るテトラポットが月に濡れ

鳥取県 乾 喜与志

いつまでも墓の下から眠る気が

釈尊の教えが判りかけてきた

朝夕にみ仏さまと会っている

孫曾孫みんなお出でよお年玉

腹に染む晩酌という詩もあり

鳥取県 新家 完 司

ほろ苦いこの世の味の秋刀魚食う

テレビジョン寒い世界を写し出す

安普請の床みがいても精がなし

立冬の庭にパンジー植えてやる

なんのため生まれて来たかまだ不明

鳥取県 西 川 和 子

穂やかにゆつくり命遊ばせる

もがいても波に乗れない山育ち

姑の彩に私の色を足し

自己主張自分の殻を抜けられぬ

蹟きを気付かれぬよう立て直す

鳥取県 上 田 俊 路

秋深く直哉の坊の蔦紅葉

燃えつきた順に紅葉が風に舞う

紅葉背に写すと妻もピンボケる

五十年振りに国旗を陽に当てる

国旗国歌を踏絵にはしてならぬ

鳥取県 奥 谷 彩 子

苦勞半分喜び倍の夫といふ

頑張らなくていいよと影もついて来る

野分け吹き人生句読点を打つ

売り言葉買つて心をきしませる

戦争の傷いえぬまま新世紀

鳥取県 橋 本 多 哥 由

さらさらと砂に書く字に秋近い

恋をしてきれいに別れ騒ぐまい

捨てられぬ過去をふくろに秘めている

本心を明かす菩薩になつてみる

月下美人満月の下化粧する

鳥取県 さえき や え

散髪日にはかむ顔がすばらしい (こなた 2句)

祖母の死をやつと涙ではなし出す

花たちをそつと笑わすかたい風

冬の畑を絵にしてくれる木守柿

冬の風ちよつと詩人にしてくれる

鳥取県 村上信子

腕つぶし強そうなのが泣き上戸  
老い二人ふたり分炊く釜を買う  
ぬるい風呂疲れゆつくり溶けて出る  
ライバルに毟をかけたが効きもせず  
虹渡る夢をみた朝ほほゆるむ

鳥取県 塔寛子

終の家でまさかの赤ん坊抱かされる  
嫁の子に天使生れて矛おさめ  
バリアフリー孫の守りにも便利です  
ナール程聞えぬ方が無事なんだ  
東大出の叔父に家系がぶらさがる

鳥取県 石尾かつ乃

晩秋の風に日暮れの詩に出会う  
足跡を探ると記憶よみがえる  
ふるさとに友と語らう海がある  
餌として残しておこう柿一つ  
残そうか焼ごうか日記世紀末

鳥取県 原みさを

祝電という鞭 総身にうけている  
見返り美人肩のあたりに風がある  
句碑の丘から人間くさい風がわく  
もみじして虚飾をまとう句碑の丘  
彩りや罪の匂いのすこしする

鳥取県 谷口次男

子は遠し墓地も何にも無用なり  
クラスにはケンカ太郎が一人いた  
私の人生はあのしぐれから  
大根としぐれが似合うひとり酒  
天高しダイオキシンの楽園地

鳥取県 石谷美恵子

紅一点仲間が活気づいてきた  
目と口で驚いている冷凍魚  
釘一本抜くと崩れる青写真  
ガラクタへ民芸品と言う美名  
病む心小手先などで繕えぬ

鳥取県 津村八重子

目出度さに下戸も気炎を上げている  
年玉をもらって子等のいい笑顔  
カレンダーの松も今年を寿いで  
赤飯に南天そえてお重栄え  
いつになっても心のさびは磨かねば

鳥取県 権代康女

幻の神に祈りをこめている  
新世紀らしい名前を考える  
大山は初雪かぶも洗い干す  
お喋りへ話すもんかと口ごもる  
孫が居て話とんとん変えられる

鳥取県 太田 幸枝

つばくろが愛の巢造り娘も嫁ぐ  
愛情に包まれ不足ばかり言う  
因縁は住所かえてもついて来る  
畑を打つ私にアホーとカラス言う  
線香の煙が空気とませる

鳥取県 山本 正光

日野川の水位変らず地を満たす  
井で暮らす庶民の税はほどほどに  
税務署にナツパ服着てゆく社長  
好きだった亡妻の好んだ花植える  
空財布ときどき開けて見てる癖

鳥取県 近藤 春恵

父の風きびしく母の風ぬくい  
ぼろぼろになって雑巾満足し  
平凡に暮らして花と対話する  
子や孫へ続く足跡残しとく  
極楽へ続く花道探しとく

鳥取県 国森 武子

百碗にこもる男の心技  
平凡で健康以外とりえなく  
朝夕の温度が肌につんと来て  
夏は冬 冬は夏よと言って生き  
火の神を祭ったお札古いまま

鳥取県 黒田 くに子

青春へときどき戻す秋の天  
さわやかな余韻ゆっくり髪をすく  
人指した指がしびれてくる罪だ  
孫にスキンシップかごめの輪がぬくい  
扶養家族という保護色に包まれる

鳥取県 幸家 單車

目に見えぬ暗示の糸が絡み付く  
親切な顔で悪魔が寄つて来る  
サービスも過剰になると不気味です  
信じ切る神の暗示に左右され  
好感の持てるサービス嫁がする

鳥取県 吉田 孔美子

五十年稼いだ肩が軋みだす  
何キロと言えないとこに四姉妹  
良心を並べて見せて遺産分け  
試着より地味がお似合いですと言う  
家買った夫は海外赴任中

神戸市 山口 美穂

疲れた顔とむき合い美容室にいる  
介護保険あちらもちちらも立てにくい  
七十五日待たずに消えている噂  
安いお肉がこんなにおいしいパーベキユー  
除夜の鐘辿り着いたよ二千年

神戸市 池田善守

辰年の元氣を買った日記帳  
女房の話す声音で相手知る  
天高くみこしの綱を孫と引く  
心変りせぬ間に旅を予約する  
私にもうれし涙はあるのかな

尼崎市 春城 武庫坊

二〇〇〇年の夢の下絵を考える  
朝の画廊に秋の空氣が正座する  
二人並んで無言の歩み秋回想  
試着室すぐに出てきた細い腰  
裏木戸を開けると冬が待っている

尼崎市 春城 年代

溪谷の早あゆ宿に灯が入る  
斜視で読む文字にストレス溜まり出す  
話しても解らぬことを眼が愚痴る  
枯尾花容赦なく月欠けはじむ  
忘れがたき路に散り數くプラタナス

尼崎市 長浜 澄子

ほとばしる思いは秘めて記すかしこ  
従順に身を弁える晒し葱  
目を閉じることを覚えたかすみ草  
口に出してみると空しい冬の虹  
淋しいと言っても流れ変わらない

尼崎市 田辺 鹿太

重箱の隅をつつけば鬼が出る  
雑魚たちの進言水に流される  
秋晴れの日は佳きひとに逢う予感  
源流へ過去のわたしに会いに行く  
敗軍の将にも似たるすがれ菊

芦屋市 黒田 能子

綱引きの勝負のつかぬ似た個性  
からっぽになつて一から始めます  
顔洗う朝のいのちを洗うよう  
突然の君のいのちを思う秋  
迷うだけ迷った蕾咲き始め

伊丹市 山崎 君子

シャンソンを唄うおかしなコップ酒  
鉛筆画わたしの顔は泣いたまま  
お年賀に彦星よりと書いてある  
織姫になれたら素敵シクラメン  
松の風少しさわいで辰の年

伊丹市 小熊 江美

言い切つて友を失い悔い残る  
コスモスが揺れてワルツの歩であゆむ  
同年配なぜかライバル意識する  
背と前と子を振りわけて若いママ  
コスモスにかこまれ華やぐ道祖神



西宮市 秋元 てる

それとなく張り合つて居る四人部屋（入院・手術 5句）  
八十の素裸曝す手術灯  
移植中 因幡の白兔など思い

縫合医の手指の温みそこはかと  
「樂園幻想」あの方らしい見舞本

西宮市 門谷 たず子

景気上昇願いをタツにかけて春  
煩惱の揺すれば落ちるわたしの樹  
病ふかむ友の句を読む夜寒かな  
鏡の裏の鬼が時どき舌を出す  
土踏まず洗いまだまだ生きのびる

西宮市 山本 義子

初ものの酒粕出るの待っている  
腕まくり松茸少し料理する  
お芝居はしてないラッコ親子なり  
腹背にライバルいるも良しとする  
不覚にも気弱になった秋一日

西宮市 奥田 みつ子

亡父が削った鉛筆があるあたたかい  
二十四時コップの水でしめくる  
わたし色に染めた箱から出られない  
太陽に走れ少年恐れるな  
初光輝きまして二〇〇〇年

西宮市 西口 いわゑ

人と人つなぐコップが温かい  
桜もみじひらひら秋を手のひらに  
童話読むひととき神の子になって  
一ページあと一ページ夜は更ける  
大好きなひとにこっそり毒りんご

西宮市 林 はつ絵

世紀越す流行色を憶えとく  
最上の年噛みしめる病み上がり  
消えそうな残り火煽ぎ世紀越す  
軽率に寝たきりなどと言わないで  
守護神についていたかく突破口

西宮市 刈田 泰司

心配だこの娘等が母になる  
留守頼む犬にすっかり世辞を言う  
自慢ばなしうつらうつらと聞いている  
よく笑う薬が効いて若返る  
薬効と薬害それも運不運

西宮市 亀岡 哲子

最果ての街でビオラを聞く旅に  
チューチュートレイン若い日の丘越えてゆく  
車椅子滑らかに押し藪の道  
景気良い家族密かに景気良し  
孫二歳パンダの仮装ハロウイン

西宮市 菊池 トミエ

鉛筆も削れない子が人を刺す

絵日記の色鉛筆は秋の色

呑めぬ人大きなコップ持つてくる

盛大に今夜はパパの誕生日

がらくたも捨てるに金がかかるのよ

西宮市 長谷川 淳

元朝のファックス年賀厚かまし

算数がいやで先生まで嫌い

あれもこれもけじめつけずに歳を越す

木屋が呼んでいるので立ち止まる

会議室隅で小さく七光り

西宮市 牧 淵 富喜子

無理せずに生きると言っている墮落

秋の色今この窓は美術館

秋灯下北から順に聞く気温

さざん花を生けて伐られた樹を思ふ

月が變つたら水守りの出番だよ

西宮市 緒 方 美津子

りんとして待つことにする冬木立

緊張がほどけてしまい胃が痛む

はめてやる似ても似つかぬパパの絵を

手袋の拍手もらった気がしない

手伝わぬ老父の喜ぶお餅つき

宝塚市 嵯峨根 保子

透ける空つらぬく声は七五三

換気扇あした遊びに行くおでん

本さげて整体に行く安息日

習うより慣れて行方を見うしなう

気まずい日いいぬの散歩が遠くなる

宝塚市 黒 台 伊佐武

何よりも大好きなのは人間だ

「有難う」互いに交わし日を終える

秋陽差し猫と一緒に欠伸する

艶のある内が華よくとくすぐられ

名人の芸を支えた蔭の艶

川西市 松 本 ただし

ひら仮名であんたと呼んで半世紀

ハヒフヘホからタチツテト歯を見せて

中流で何とかゆける暇とカネ

シュークリームのような男が威張ってる

食堂の見本みたいな介護法

三田市 北 野 哲 男

零余子飯先ず説明をして食わす

宝くじ抽せん日まで有精卵

大晦日懷炉水洩薪能

お賽銭ほどの御神酒を注いでくれ

大股も小股も同じ万歩計

加古川市 吐田公一

散骨へ無理をいふなという家族

景気には関係のない空財布

あの顔は景気よさそう従いてゆこ

キッチンの平和な音に朝が明け

しばらくは大人びていたロスの孫

相生市 中塚礎石

重い負が三途の川で沈むだろ

父の死へ嫡子に涙出てこない

でこぼこの曲りくねった夫婦坂

押し売りへ妻から秘訣おしえられ

積木つむ最後の一つ手が震え

姫路市 古川奮水

応募のがきへ運の切手貼る

絵手紙に彩る秋を捉まえる

手料理の腕前さんまで試される

地球儀へ六十路も稼ぐ旅の糧

過疎の庭主人を偶ぶ柿が熟れ

兵庫県 大谷幸次郎

荒波の海の底から蟹あがる

此のところやたら日の丸顔を出す

出世するレールに乗るは難かしい

抜擢も左遷も知っているレール

レールまで敷いてもらった恩忘れ

大阪市 西出楓楽

夫いた頃はへそくり弾んでいた

神様に聞えるように愚痴を言う

世が世なら三下り半の妻ばかり

さよならを上手に言えたことがない

美人画展すこし美人になって出る

大阪市 井上白峰

昇龍の意気天を衝く初春の夢

近代化お屠蘇に代わるナポレオン

混濁の世に老人の無為徒食

押し除けて座った椅子が高過ぎる

自分史の誇張に妻が正誤表

大阪市 中田あい子

次世紀に年を忘れてかける夢

二〇〇〇年ひいきの寅に栄あれ

農家出の娘が御飯よりパンが好き

リストラが陽気な妻に救われる

ぶが悪くなれば消えますうちの嫁

大阪市 杉澤汀

暁天へ昇る黄金の竜にのる

初詣でここは素直に手を合わそ

松茸の匂いに負けずさんま焼く

翌桜はあすなろのまま朽ちている

文明の利器は危険と抱き合わせ

大阪市 本間 満津子

気に入らんでもカタカナ無しでくらされず

珍客を迎えてすこし身構える

風向きが不意に変わって風が落ち

おいしいよと手作り押売りしてしまふ

小さな棘だけど気になる痛みよう

大阪市 辻川 慶子

スタートはきれいにしたいお元日

手のひらのくすり気やすめばかり言う

結びめをゆるめて今日の苦を捨てる

いつか来た野菊の道をまた訪ね

待つ事に幸せがありコーヒ店

大阪市 渡部 さと美

善人の立腹しても善人だ

犠牲者をまた呻かせるもうけ主義

フリーマーケット寺の掘り出し市に似る

日本中の期待をになう昇り龍

山寺を通るハイキングのトイレ

大阪市 川原 章久

七色のネオンに飲まれ槽消ゆ

伝染るから切るわと風邪の電話口

小さいな不平不満を我ながら

当りくじ出た店探す年の暮れ

上げ底の天突く靴で歩くギャル

大阪市 津守 柳伸

二〇〇〇年踏み出す龍の滝しぶき

平凡を喜ぶ除夜の百八つ

孝行のつもり日帰りできる墓所

ぬくもりが伝わる五体壺並ぶ

感謝する日々せわしない洗濯機

大阪市 榊本 落児

火祭りがどーっと胸に飛込むよ

あなたにも原風景があるでしょう

歩きます青い山脈歌いつつ

虹かかる私一人がながめてる

格子戸を開けるとそこにギャラリーが

大阪市 神夏 磯典子

景気どうあれ年金のお正月

これ以上荷は残すまい惜しむまい

そういえば時計の音を忘れてた

ほら吹きのとと淋しさを見てしまふ

芯までもとろりとさせる母の味

大阪市 河井 庸佑

名湯を巡るツアーでリフレッシュ

正論が苦戦する訳やと知る

簡単に貸してくれたに裏がある

短くて実のある祝辞受けている

踏まれても枯れぬ雑草から学ぶ

大阪市 北 勝美

あかね雲裾から暮れる塔二つ  
小紫しきぶこぼれる鐘の音  
葉を落しこぶしの花芽冬に耐え  
実らぬが砂金ばらまく金木犀  
病む耳にジージー蟬の鳴く夜長

大阪市 小林 周 信

ママのママ世話やきすぎる七五三  
眠らずに待っててくれた頃がある  
迷う度海を見に行く島育ち  
きのう天国 今日地獄のギャンブラー  
ふざけてるけれどピエロの眼は哀し

大阪市 川 端 一 歩

大阪の小説集めて冬コタツ  
冬眠のボクには春の陽がまぶし  
論戦に勝って結論押しつけぬ  
喜びは陰で支えた人の数  
引越してウフフの手紙見つけたり

大阪市 安 達 はじめ

ライバルも同じ神社で初詣で  
老人の胃にはやさしい七日粥  
若き日のようにはならぬ手と頭  
嘘だとは解っていても聞く余裕  
移り気な夫を裁く妻の鞭

大阪市 川久保 睦子

割れそうで割れぬ茶碗で年が明け  
年明けるまた悲喜劇の幕が開く  
古傷が疼きだします年の暮れ  
ささやかな幸せのため買うダルマ  
良き新年迎えるために鏡拭く

大阪市 玉 置 英 子

好きだった柿供えます出掛けます  
D51の余生しずかに北海道  
帰る子を待って蕪の刻み漬  
命日の鈴は三七二十一  
好きなのは今宮連れと西宮

大阪市 清 水 絹 子

長寿国の自慢もゆれる介護料  
自慢話聞くに仕上げの毛糸玉  
いつも屋のひと折夫に夕支度  
晩酌のあてに御飯のお漬物  
赤字赤字と言いつつリッチな妻の服

大阪市 田 中 節 子

買いもせぬ三億の夢目が覚めた  
年を越す化石のような冬の蠅  
俎の鯉になっても君一途  
君知りて無駄でなかった途中下車  
女心コスモスのごとく虚弱質

大阪府 寺井東雲

歯を見せる八十歳まで保証付き

喋らない男は腕に自信ある

退職金離婚話が近づいた

彼女にはたくらみあった玉手箱

考えるロダンは何時も迷ってる

大阪府 板東倫子

サラリーマンにも欲しいフリーエージェント

中国の孤児も老いたる人はかり

タイムスリップ天神さんの古本市

目もかすみ足も痛むが口達者

若者の対話はまるでコンピューター

大阪府 清水利武

自転車が笑っています老いの足

大漁の鰯がせり場ではねている

一日の労をねぎらう吟醸酒

年賀状又々戦友が二人消え

初日の出迎えているは龍の風

大阪府 稲本凡子

窓みんな開け正月の風入れる

ボタン押すだけの一人居苦にならぬ

喜寿祝 食器洗いのプレゼント

老い一人手摺だらけの家になる

そのうちにエレベーターをつける夢

大阪府 岡本久峰

女医さんの招きいつもの土瓶蒸し

肺ガンを知るや知らずや医師見舞う

貧乏を屁とも思わぬ茶碗酒

江戸ナンバー道修町走る浮き沈み

病む友へ送るソバ餅ソバボーロ

大阪府 鶴田遠野

初孫は寝るな寝るなと子守歌

空き腹を菊一輪で膨らませ

倅せか捨てた彼女に酷な問い

派手な服老いの香りを少し消し

平等が罪をつくった遺産分け

大阪府 川内 呷笑

絆より愛の重みが勝つ無念（旭川で娘結婚 2句）

愛一つ誓いて我が娘北国へ

渡り切り汗が怖さを物語る（谷瀬吊り橋）

合併も出来ぬ企業は救われぬ

今日生きる明日の目覚めを信じつつ

大阪府 津村志華子

玄関に出好きの靴が待っている

老母さんを花野に誘う秋の風

重ね着で寒い心を包んでる

芸術の秋だと励む蜘蛛の糸

赴任地の夫の便り待つポスト

大阪市 町田達子

雨の午後を出掛けるベネチアングラス展

芸術の秋だと雲も威張ってる

壺阪山訪う大観音像に会う

計の報せ今夜の星がよく光る(杜的さま死去)

来る年へ不況打開も運勢も

大阪市 鈴木トヨ子

柳川水郷白秋偲ぶ句碑に会う

今日の首尾さらばさらばと茜空

世紀末二千円札福持つて来い

亡き子の声に聞える墓の虫

ガイドさんのトチリで車内盛り上がる

大阪市 松尾柳右子

二千年熟年パワ―へ仲間入り

休日だストレス吐こうカラオケに

店員にまとわりつかれ買わず去に

何着も試着して買う一張羅

うしろからつまみ食いする長い足

豊中市 田中正坊

二〇〇〇年「十年日記」十年目

日本にまだ基地があり二〇〇〇年

二〇〇〇年戦争はもうやめてんか

竜のおとしごで天には昇れない

立冬にひとり旅立つ京の人(松川杜的氏逝く)

豊中市 安藤寿美子

二千年前海だったんだ大阪は

雲に知らん顔され龍はせつなくて

ハガキ一枚ブルーな恋にしてみよう

手をのべて見てもとどかぬ鰯雲

恋人になれる女じゃありません

豊中市 井上直次

生きのびるために離さぬ白い旗

余生なおてくてく歩き続けよう

幸せな噂に人は寄つて来ぬ

あれこれと少しは誤作動ある夫婦

愛用の電算機まで老いてきた

豊中市 滝北博史

最悪の発見だらうか原子力

秋海棠おさななじみよ今いずこ

「新米です」配達の声はずむ朝

祈りさえあれば彫れそう仏さま

秋明菊うちの庭にもやつと咲く

豊中市 湯浅馬洗

教え子のドクターに委す手術室

麻酔切れ百済観音手を執られ

ペンライトナースの瞳にふと気付き

手術後十日きょう11年11月11日

スクランブル妻との会話よく弾む

豊中市 岸田知香子

戎橋うしろの声に身構える

大物が名刺ばらまく同期会

秋日和体力測定若返る

秋晴れに明石大橋ベダル沓え

バックシャン若さの至り悔い残る

池田市 藤井計光

弁慶草 名には似つかず可憐です

愛情があれば非情も情けなり

ポインセチア暗闇の世を明るくす

深呼吸して胃カメラを迎え入れ

滝の白すさむ心を洗わせる

池田市 栗田久子

尾を振って人の心を探る犬

樂しげに影が後からついてくる

若水の清冽を知る竹の杓

佗助のもう咲くのかも薄紅に

寄せ植えに少し紅さす藪柑子

池田市 岡本吉太郎

忘れたいばかりに仕事熱中し

マイナスをプラスに変える母健在

迷ってる自体生きてる証拠です

ピーポピーポと今夜また魔の交叉点

飾られた弔辞長々座がしらけ

箕面市 岩津ようじ

さつと来てさつと一杯息子去ぬ

冤罪に謝りもせぬ裁判所

デパートのショーウィンドーの柿すだれ

飾りです使うと駄目という入れ歯

油虫妻とポチとで狭み撃ち

箕面市 椎江清芳

幸せは自分で掴む汗流す

お願いに段階がある初穂料

通らない話を通る裏の金

ロボットに出来ぬ職人腕の沓え

小卒も社長は社長の顔をする

箕面市 出口セツ子

人は皆善だと思ふ波の音

余命表私優先して生きる

模試一位子のわがままも今日は聞き

私だけ愛して欲しいクリスマス

除夜の鐘大地踏みしめ聴く家族

茨木市 藤井正雄

村祭りハウスの中で聞く太鼓

晩酌が野球の終わるまで続く

恋人を待つよう叔母を待つ梅田

父の名を告げると君がさんになる

ハイハイと語尾で逆らう子と夫



茨木市 井上森生

老健の母とデートは焼きプリン

金木犀の誇らかな香は気になるが

二〇〇〇年コンピュターの復活日

二〇〇〇年 今日も変らぬ陽が昇る

まほろばの世界に還るミレニアム

茨木市 堀良江

経営者ですぬ電卓叩く指

一言の返事を持つて重い足

待合室二ヶ月前の星占い

スケジュール一つ済みまた一つ済み

メイク上手の美人ばかりで味気なし

高槻市 傍島克治

母の気も知らず浪人するつもり

善人がいて話なかなかまとまらず

理由なき時は一身上の都合とし

仕来りを説きつつ飾る鏡餅

年毎に喪が増え賀状減る余生

高槻市 井上照子

新世紀若さが無性欲しくなる

茶髪の子笑顔でわたし座らせる

娘が作るおせち甘えてごっとさん

賑やかな友と飲み食いお正月

新婚がふざけ合ってる幸せだ

吹田市 石原靖巳

仏より花が自慢の寺ばかり

謎追って内田康夫と夜を更かす

七五三孫がおしやまな顔をする

出不精の母を誘って花手桶

辰年に夢が叶うかドラゴンズ

吹田市 古川喜美子

秋風ほど浮世の義理を盆にのせ

逃げ場ない病室西日容赦なし

この程度の頭で保ててる平和

母さんのおむすびが待つ里がえり

追い越してからは後ろをふり向かぬ

吹田市 瀬戸まさよ

生き抜いてきた高齢者いま孤独

君が代に思いは深しそれぞれに

筋通し喜ばれてる思い込み

今年はや終わりですぬと秋の雲

まだですか道路補修を待つ車

吹田市 野下之男

うるさくてまた有難い妻の声

日溜まりの眠い猫にもお正月

あの人は夢の中でも遠い人

若者とアンニョンハセヨ仏国寺（韓国慶州にて）

顔だけで判らぬ国の日本語

（ ）

吹田市

大谷篤子

東大阪市

安永

春

ご期待に添い兼ねますと優しい字  
心配でもう一結びしておこう

わたくしとわたし折り合いつける術

長女次女我が家の自慢こぼれ咲く

私を丸洗いしたくなる秋日和

東大阪市

森下愛論

大東市

児玉

蛙

さればされば強い酒とはまた嬉し

飲む会がもう一つあると急ピッチ

トンネルが怖い旅立ち見合わせる

ほん少し言い過ぎてからお世辞なり

おんな連れ昼の花街そぞろ行く

東大阪市

谷口義

交野市

山川日出子

おくすりを飲んだ位で直らない

家族とは抜き差しならぬものである

ようやくと自慢話にたどりつき

謙遜の裏に自慢がひそんでる

肝心な時は開かない非常口

東大阪市

北村賢子

守口市

結城君子

くやしさが脳裏をかけめぐる一夜

わたくしの生きた証の孫が増え

心配をうち消しながら飲むお酒

コスモスを風がくすぐるから笑う

北国のくらしの知恵を屋根に見る

新年に日の丸心機一転す

なるほどと唸らせている松の枝

松竹梅 駅に床しく生けてあり

風邪ぐらいが点滴される羽目になり

転んでもただで済ませぬスタートに

秋風と内緒話がうずき出す

アドリブを合間に入れて聞き上手

バラの襲真つ赤なうそが見えかくれ

巻き継いで明治の時計今も生き

幸せを掴んでほしいもみじの手

辰の年交野の山で初日の出

竜に乗り宇宙の旅が孫の夢

半世紀友情交わす年賀状

青畳空拭きの意味嫁知らず

電気無い浮世離れの山の寺

一日が長いと思う不勉強

親族に悪人おらぬ秋日和

兄逝って神農の虎古いまま

わたくしが映ると冬の蠅思う

胸張ってポインセチアが呼びとめる

枚方市 栗林光夫

泣きわめく嬰に野性が見えている

ハイテクが生んだ人類退化論

人間と思うな猫は猫らしく

観音の顔で観音さま拝む

半音を上げると本音聞え出す

枚方市 前 たもつ

天国の母さん新年おめでとう

充実感今日の日記に丸をする

厚底をどんなもんだと追い抜かす

饒舌も仏の前で無口なり

逢いに行く電車に長く待たされる

枚方市 寺川弘一

お茶お花もう付加価値と思わない

ガラスのビルが僕の家よりなぜ強い

太く見えてもルーズソックスかまわない

練習量 補欠の僕のほうが上

最後まで教科書読んだことがない

枚方市 海老池 洋

決起会揃う三三七拍子

五重の塔ちよこんと妻を入れて撮り

通し庭 奥から返る京ことば

町中を人質にして猛吹雪

足という足を奪って雪うふふ

枚方市 森本節子

西日背に十頭身の影を踏む

秋蝶がすくない花を探し舞う

天高く穂谷の里のコスモス園

上菓子はおっちゃんをしてねだる犬

『エリザベート』読んで東欧詳しなる

枚方市 二宮山久

幸せを計りにかける夫婦趣味

一年をつくづく感じて夫婦酒

嫁がせた娘へ転勤気を案じ

停年をあと四年とみる誕生日

秋深し今年しみじみ不況風

寝屋川市 酒井勇太朗

点滴の病母になにもしてやれぬ

自自公の毀誉褒貶に眼が回る

腹話術多趣味の僕の仲間入り

旅行社がびっくり安値持つてくる

喜寿過ぎてインターネットに嵌まり込む

寝屋川市 富山ルイ子

本心をかくす笑顔につい油断

すらすらと甘い言葉を吐いている

歩かれぬ老いに不便な家の中

いつも独り友はテレビと土いじり

人生の初心謙虚に道を聞く

十代に孫がなります二〇〇〇年  
平松 かすみ

寝屋川市 岸 野 あやめ

日の丸が思案している小抽斗

カレンダーゆっくり脱いで下さいネ

六十路まだうちも世間も現役で

お山まで平等ですと勇ましい(大峰山)

寝屋川市 森 茜

待っている影刻刻と地に落ちる

二時五十分みんなの体操わたくしも

煮大根を煮かえし万太郎かなしむ

美しく流れる川に添って行く

古竿に沈思しているあきあかね

寝屋川市 高 田 博 泉

味噌汁がうまいと思う山の朝

仲なおりしてもやっぱり減らぬ口

社長とは渾名としても良いひびき

大女優落ち目も貫禄失わず

買い溜めはしたがどうなる二千年

寝屋川市 堀 江 光 子

友達に青年がいて羨やまれ

喜びを分け合うほどに仲間増え

養生に昼寝もあると青畳

文机に辞書と並んで薬箱

その昔母の自慢の髪も減り

松活けてひとりぐらしへ初日の出

おろそかに出来ぬひと年また巡る

骨粗鬆頭の骨は硬すぎて

誕生日だんだん重い腰になる

たくらみは名刺一枚貰うとく

寝屋川市 籠 島 恵 子

カレンダー秋をのがさぬ丸印

ひまわりに教えてやろう立冬を

ため息を聞くと予定が狂いそう

疲れたでしようと言つて下さるは他人

ホップステップ終えても母の苦勞性

寝屋川市 江 口 度

休憩の字が載つてない蟻の辞書

車椅子見ると駅員とんでくる

温室のたくらみ花は気づかない

赤い羽根胸に十月のパスポート

善人の胸に手ぶらの自己嫌惡

寝屋川市 柴 田 英 壬 子

何も彼もうち明けられぬひとの口

老いてゆく自己の管理で日々多忙

仏さままた留守番をたのみます

松茸にことしとうとうご縁なく

どの馬もゴールを目指す尾がきれい

寝屋川市 坂上高栄

平成の野武士が歌う労働歌  
敬虔な祈りはモンペの時だった  
胸襟を開けば笑って済んだ事  
稲がまあ一五体投地の姿して  
席蹴ったその意気込みに期待する

寝屋川市 太田とし子

世を渡る蛙泳ぎの律義者  
秋たけなわ私たけなわ赤ワイン  
白黒をつけるに足りる子供の目  
コーヒーのカップ一つがうつろな日  
予定地を確かめに来る赤トンボ

寝屋川市 妻谷重三

妻の趣味半分ぐらいボクの作  
指折って孫が目論む年の暮れ  
成田まで英語得意の妻が居た  
お夜食の足音去ってマンガ本  
昼間見る隣の主人いい男

松原市 玉置重人

名器ではないが大事なめし茶碗  
お隣の分まで作るちらしずし  
順逆の風が切ない葬の列  
いつ見てもペアで歩いている夫婦  
人間になるまで羽化をくりかえす

松原市 小池しげお

裏庭に青空がある車椅子  
詫び状を書きあげるのに三四日  
灰皿にいっぱい捨てていた時間  
メインテーブルナイフの音がわからない  
良い酒を湯呑みに酌いでくるお通夜

藤井寺市 中島志洋

初夢は宝珠を抱いた昇り竜  
無理ばかり願う傘寿の初詣で  
絵馬の前寄り添う二人孫が撮る  
新婚の二人仲よく風邪で寝る  
外は雪愛を育てる囲炉裏端

藤井寺市 高田美代子

リサイクル「ボク」も何とかなりますか  
柿は柿いろ金魚のいない金魚鉢  
くたびれた顔で笑って老夫婦  
沢庵を刻んであげる人と住む  
上品に走る女と組んでます

藤井寺市 太田扶美代

人生を捨てた男の人生論  
貧しいからこそたっぷりとやさしさ  
もう少し探してほしい私の行方  
長生きの秘訣泣きたい時は泣く  
カッとなる心も大切だと思う

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

これ以上待てぬ思いの鳳仙花  
タクシーは君と僕とを連れて去る  
胸の中シチューことこと煮えたぎる  
深情けカサブランカと遊びたし  
石段を下る枯葉も伴うて

藤井寺市 楠 昭子

やつとローン終えて大きく息をする  
盲点をはっきり突いた隅の席  
有頂天後ろ姿に隙が見え  
うとまれてもやっぱり孫の自慢です  
千切り絵の雪の点点温かい

羽曳野市 福田 満州

文化の日やつと木犀散りはじめ  
延命の点滴拒否の遺書託し  
卒寿越えほほえむ母のデスマスク  
仲良うにちはは共に木犀忌  
OB会子がネクタイを買うてくれ

羽曳野市 酒井 一 壺

友だちへ電話をしたがみんな留守  
親友で続いていますわけがある  
悪友に学んだ無駄が生きてくる  
せせらぎへひろやの鮎に酒の味  
自慢して自分の値打ち下げて行く

羽曳野市 西村 りつえ

六十億に笑顔がほしい二千年  
ロボットにやがてハートを移植する  
時によりちゃらんぼらんも武器になり  
私にも類焼しそう猫の恋  
蹟いて頑固な角もポロリ折れ

羽曳野市 三好 専平

じゅんさいはんこれで中座も終わりです  
目の見える人ほど前を見ていない  
トリスには罪ないけれど胃をとられ  
もったいないという口癖が直らない  
秋の空とどこどこで浮気する

河内長野市 井上 喜 醉

振り向いて道を教える杖の先  
から元氣昔が好きな顔がより  
握手してやれやれ済んだ後始末  
晩酌は古稀を越えてもきつちりと  
外食へ着替への早い妻と孫

河内長野市 植村 喜代

忙しい忙しい一人の子を育て  
忘れられた風鈴の音秋は行く  
他人事だと簡単に出る答え  
泥まみれにならず育った現代っ子  
百歳へ向かって歩く二千年

河内長野市 加島 由一

八尾市 高橋 夕花

ため息の数だけ神よ幸せを

兄弟で遠くから見た紙芝居

日の丸の代わりが思い浮かばない

同窓会第二鉦がまだ来ない

歌舞伎座の切符が返事待っている

富田林市 藤田 泰子

ドラマ今佳境に入る初日記

ライバルと愛染帖の復活祭

夢芝居 白井権八 小紫

カサブランカ二夫に染まらぬ白さなり

紅葉に染められ冬の入口に

富田林市 片岡 智恵子

夢が重くて傾いてきた宝船

喜びの長い手紙を書いている

子の思い書きとめてある母の辞書

友のひと言やんわり胸に立ち直る

上りより下りのきつい坂ばかり

富田林市 松本 今日子

謎々と知らず本気で考える

癖一つないから誰もふりむかぬ

秋風におしゃれ心をくすぐられ

日本シリーズ孫の解説付きで見る

負けそうな方へ必死の応援歌

熱が下がり小鳥の声をきく夜明け

深爪にすこし寒い秋の夜

整形もエステもしたい洒落た街

ウインドーのコートに追われ冬支度

路傍の石 今日には羅漢の顔をする

八尾市 長谷川 春蘭

五子八孫曾孫三人恙なし

背中をかいてと言える絆を持っている

一昔前の背広をほめられる

縦に振る首が減ってる不況風

川柳人生米寿の歳も暮れて行く

八尾市 宮西 弥生

ハンカチのピエロに落ちていく夜長

ひとりばっち みんなばっちも主義主張

駅弁でくらしの穴を埋める旅

絵手紙のひと言まずいとこ温い

ときめきを抱いてマニキュア派手になる

八尾市 宮崎 シマ子

七福神どれも豊かな顔かたち

米寿傘寿喜寿の姉妹に新世紀

屠蘇酒に溶けてしまった龍の髭

四角四面の男を誘うタコ焼や

赤いもみじ黄色いもみじ雪を待つ

八尾市 内海幸生

無垢な日に還りたくなる童唄  
晴天が好きだが今日は雨が好き  
悪いことした目になっているポチよ  
一生は線香花火だったかも  
神様の目にはたったの二千年

八尾市 高杉千歩

素志を高めて二千年に入りける  
二回り目の竜描いている初春の筆  
金婚もすぎ二千年祝う膳  
録音の母の痴呆や二十五忌  
自立強制一寸先は闇だから

八尾市 吉村一風

草笛で夢あたためる帰省の子  
飲む約束の息子にくらう肩すかし  
うまいこと嫁にほめられ使われる  
投げた言葉へ妻やんわりとストライク  
言うだけは言わせてくれる輪で和む

八尾市 村上剛治

秋晴れも祝ってくれた娘の門出  
栗の実に秋がいっぱい詰まってる  
ライバルがごろの隅で旗を振る  
いい話懷にして来た顔だ  
晴れる日を信じてりハビリに励む

八尾市 村上ミツ子

立冬へ寒さもやつと目を覚まし  
コンビニが出来てから街不眠症  
体重計さばなど読んでくれません  
スムーズに浄土へ浄土へと流れ  
半分は妻のレンズで見えています

八尾市 生嶋ますみ

女には女のけじめ髪をとく  
たれも住まぬ部屋に生きてる置時計  
ボール投げ菊の花など無視されて  
掃除機を持って夫はいきいきと  
お早うと言う子いわぬ子すれ違う

八尾市 神原まさと

酒五勺長寿薬とはい話  
頼り甲斐有る犬ですと老婦人  
南画展友の元氣を見に出かけ  
川柳を杖に七十やつと越す  
鉢植えの枯木地に植え蘇る

堺市 宮本かりん

素直だと言われて自我が通せない  
風紋もわたしも一夜で変わる時  
仲裁の役目忘れた声となり  
大根抜きボディラインを地に残し  
付いて出て閉め忘れたり自動慣れ



堺市 神原 文

突然死 秋空に立つ虹のごと  
駒鳥のヒンカラカラと女学生  
黒白が補色となつてきた夫婦  
プラトニックラブほど重い罪はない  
母娘孫 同じ形で靴を脱ぎ

堺市 河内 月子

雑煮餅息子がひとり増えました  
新春の庭水仙たちの大合唱  
高野山さんと紅葉を見て帰り  
酔うてきてぼろぼろ弱いとこが出る  
苦勞したことは話さぬ丸い石

堺市 山本 半錢

辰年を翔け昇りたい茜雲  
塔の跡天平の風淀んでる  
大伽藍偲ぶ縁起を読み返し  
庚申堂身代り猿のいとし数  
小さい旅小さい雛を買うて来た

堺市 黒田 真砂

一坪の庭にも四季の花が咲き  
通院の待つ間句集の拾い読み  
友の病も共に祈つてシクラメン  
不勉強身に沁む創作展会場  
秋風に輝く画集手に重く

堺市 志田 千代

先方が動きだすまで動かない  
同居してくれそな婿がみつかった  
奥様は多忙お先に箸をとる  
声出して笑われたなら許される  
紫に染まりきれない氏素姓

堺市 柿花 紀美女

心まで夏やせしたくない読書  
天高く今日は夫婦でにぎり飯  
あとさきになつて夫婦の野菊道  
狂わない時計に余生刻まれる  
朝夕の冷氣に老いの冬構え

高石市 浅野 房子

一人で見ひとり寝るには惜しい月  
検査入院だった筈だが帰らない  
食べ放題一番腹の立つ見出し  
星がないネオンきらめく星ばかり  
ベレー帽真つ直ぐ被るきまじめさ

和泉市 岡井 やすお

肅肅と問答無用忍び寄る  
明治者も英語知らねば付いてけず  
新世紀へ夢を託して耐えましよう  
美味過ぎて買っていけない酒をかう  
屠蘇を酌む八十八の初笑い

和泉市 西岡洛醉

針千本孫約束の手が奇麗

大阪で生れ育つて職も生き

二輪車に知恵出し合つた夫婦道

砂時計努力の山を積んで行く

愛妻の寝息を耳に安堵感

泉佐野市 山本蛙城

パーティーにお出で私も有名人

立冬に生きて鳴く虫鳴かぬ虫

君が代の強制反対言つたとて

お嬢さんと呼んでキザとは知りながら

ジングルベルやけらしく鳴る世紀末

貝塚市 池田寿美子

時刻表繰つて描いた旅の夢

めぐり逢い里の新築三姉妹

忙しいが生き生きしてる娘に出会ふ

山茶花がやつと綻び別れの日

手作りの春巻うれし里がえり

岸和田市 井齋一齋

裏入学額面順に受付ける

うぬばれの鼻を花粉がねじ曲げる

低金利金庫代りの壺が売れ

お土産は脈ある順に配られる

お坊ちゃん渦巻く都市にはみ出され

岸和田市 高須賀金太

謎すべて溶かして青し秋の空

雑踏でふる里を恋うイヤリング

男やろうか女やろうかイヤリング

放射線漏れと突然言われても

企みがありそうモナリザの微笑

岸和田市 岩佐ダン吉

核ゼロでページをめくりたい世紀

ちっぽけな言葉心に火をもらう

高い天たいそうなホラ吹いてみる

なるようになる母さん寝てしまふ

千代紙を折る母さんの童歌

岸和田市 藪野けい子

文明の機器が不慣れで逃げている

鳴き砂に足跡残す親子連れ

思い出を子供に話す親のエゴ

泣き顔で母を味方に引き入れる

弟を味方につけてねだる姉

岸和田市 原苑子

辰年に竜の絵を書き年賀状

ひとりでに育つたように誕生日

気取られず裏木戸くぐる猫と夫

日向ぼこ深層心理店開き

好物で満腹したら命乞い

岸和田市 原 さよ子

横文字で送られてくる娘のメール

お守りのように離さぬいい便り

指輪などせぬヘルパーの温い指

うきうきがイライラになる待ち合わせ

紙袋三つに増えて旅終る

岸和田市 長谷川 呂 万

イミテーションでもいい彼の指輪です

手軽さが身につき外の味に慣れ

鏡餅不況長引き小ぶりです

不景気の始末頼みに恵美須さん

気はすかし妻のリユックと間をとって

岸和田市 井 伊 東 吉

小家族賞味期限に追われてる

異常気象衣替え時期狂わせる

本音吐き更迭されても栄誉礼

放射能トンネル事故も手抜きから

合併が政財界で流行ってる

岸和田市 田 中 文 時

往復の時間に飽きるバスツアー

縞馬もライオン狩りの野望持つ

目のうろこ落ちた余生は老いふたり

物の無い時代はあった思い遣り

利用価値無くなるとハイそれまでよ

大阪府 榎 山 隆 盛

福笑い一年笑い揃う顔

松過ぎて吹くなりストラ運ぶ風

もいろいろのベールは謎のままそつと

べつ甲のメガネ踏んづけたのは孫

光るものつけない亡母のたすき掛け

大阪府 米 澤 俣 子

せめてものの心に残る一句欲し

呆けて来た脳のスぺアは無いですか

物あまた暮しに工夫消えていく

陽気そうなお方にあった深い皺

すすんでる嫁とは話題違いすぎ

和歌山市 福 本 英 子

来る年へ絵馬間引かれて風抜ける

金木犀散らせたままの庭簾

一晚であつさり解ける娘の機嫌

年がら年中何処か掘ってる街の貌

非常食ばつばつ期限切れてくる

和歌山市 福 井 桂 香

紀州路の山は黄金の実が招く(白浜・勝浦の旅 3句)

露天風呂白い人魚になる私

潮騒に目覚め行く末ふと思う

介護の手すこし温めみかん剥く

生きましよう生きる疑問符ちりばめて

和歌山市 細川稚代

佳き日なり御門主様の法話聞く  
透き通る秋に会いたい人がいる  
夢二の絵秋の便りによく似合う  
ほんもののまつたけですよお亡母さん  
又もとのひとりに戻る宴果てる

和歌山市 川上大輪

宴酣私の席にいる狸  
蒔いたのは権兵衛さんじゃないらしい  
折角だから指輪の値段聞いてやる  
作文は下手だがこの子字が上手  
不平不満幸せなんだよきつと

和歌山市 川上富湖

謹啓と書いて言葉が転がらぬ  
ぬるま湯に浮いているのはゲンコツか  
アンコール鳴り止まぬ間に消えたいね  
回転ドア出られなかった理想論  
冬木立あれば前衛舞蹈家か

和歌山市 榎原公子

秋の天裸婦もりんごも立ち上がる  
日々熟すみかんに触れてみたくなる  
今さらにピカソそれでも面白い  
聞きすぎたようだ耳鳴りしてならぬ  
遠近に揺れる故郷の柿すだれ

和歌山市 垂井千寿子

同窓会の中心ビリの立志伝  
マスコミに埴輪土から目を覚ます  
老夫婦信用という重い鍵  
メダカの学校清い流れに移転する  
名人の駒は火となり水となり

和歌山市 木本朱夏

秋の計にコーヒーの香の消えており  
俊平の髻つかむ秋の鬼  
俊平の死を見届けに吉井川  
ご恩返しが果たせないまま木守柿  
ちいさめの茶碗にかえて冬に入る

和歌山市 楠見章子

誤発射が降るかも知れぬ二〇〇〇年  
木犀の風と消えなくなるわたし  
新聞で日を確かめている寝坊  
夫のソックス挫いた足によく馴染む  
追伸に挫いた足を吊るしとく

和歌山市 山田高夫

ひとりして聞く潮騒の寂しかり  
万策が尽きた男の傷だらけ  
歳月の流れに余命目減りする  
限界と知って引き際考える  
居酒屋のサービスコップ溢れさす

和歌山市 桜井千秀

寒風へ気取つて見せる朱いバラ  
季節外れの稲妻闇を突つ走る

ギョウザとトマト食はず嫌いで押し通す  
欲張った根配り地下で絡みあふ

最敬礼しよう咄嗟の妙案に

和歌山市 山口三千子

視力落ちレンズが厚くなつていく

小春日和と二十一世紀へ種を蒔く

北窓三友 年金者には縁がない

合わせ鏡互いの短所補正する

ハイテクに慣らされ脇が甘くなる

和歌山市 岩本美智子

新世紀古稀を門出に新春の酒

新世紀フラダンスでもしたくなり

羽子板を海の向こうの子に送る

青い鳥いつもいっしょにいてくれる

森に入って木が見えぬ人と住む

和歌山市 青枝鉄治

泥沼を歩んだ人の人間味

札束に転んだと知るダルマの目

謎とけぬままに終った政治劇

平凡な暮らしへさんま焼く匂い

さわやかな汗を覚えたボランティア

和歌山市 池永正嗣

虚も実も鏡にだけは隠せない  
日かげよりぬくい日なたが恋しなる

白雲にかくされている青い空  
花屋の子花の影から返事する

家路にもつば焼を売る店が出来

和歌山市 田中みね

目標へ崇める山がそそり立つ

先頭を走る勇者に見た孤独

味方だと言いつつ切れますか影法師

白は白いかなる噂立とうとも

仲間からの祝福攻めに会う受賞

和歌山市 玉置当代

落葉踏みリストラの靴なお重く

掌を眺めて母はひとり言

まだ卒寿母は手毬を刺している

九十歳の母に今でも励まされ

生きてきた証 手の甲足の甲

和歌山市 山根めぐみ

山が見えホッと素直な目に戻る

魂がチヨロチヨロ洩れる生欠伸

目を瞑るといつでも会える亡父と亡母

仏の目と合うてほほ笑む紅椿

文句一つ言えない妻の無表情

和歌山県 堀 畑 靖 子

長生きをしたら持つかな軍資金

相棒は蟻で私はキリギリス

原発を増やさぬように節電す

絵本ひらいて孫と共有する時間

磨かねば私に賭ける人がいる

和歌山県 古久保 和 子

スーパーマーケットへ妻に連行されて行く

申し訳程度夫の物も買う

思うほど足が上がつていない段

水分が不足言葉もささくれる

背の荷物軽くなるほど天高し

海南市 三 宅 保 州

一歩ずつごとに一句と対話する (弓削川柳公園)

瀬戸明石そしてしまなみ揃い踏み (四国架橋)

坊ちゃんがそこに居そうな温泉館 (道後温泉)

きじ鍋に地酒せせらぎ聞きながら (鈍川温泉)

従業員褒めて女将に喜ばれ

海南市 谷 口 義 男

正論を吐けば若いと言う世間

野良猫が馬鹿にして居る老いの坂

古希半ば情熱燃やし動くペン

反省もしきり書いて置く日記

カラフルな薬を飲んで生きる古い

和歌山県 中 後 清 史

神の慈悲素直に受けることにする

演出の拍手と知らぬ有頂天

無風地帯そんな所はありません

安楽死協会とやらあるような

設計書賞味期限が切れてくる

和歌山県 鈴 木 政 子

太平洋夕日が機体朱に染める (カナダ紀行)

均等法 男女パーサーラフな服 (エアカナダ機内)

夜明雲海が砂漠に見えて地平線

「グッバイ」と客「お疲れさま」とパーサー

ライトアップ二色の飛沫ナイアガラ

奈良市 米 田 恭 昌

初夢は孫と相乗る昇り龍

介護認定爺ちゃん見せた名演技

リストラの闇打ちにあう不幸せ

無器用な手に鳩出番見失う

来迎印結ぶ阿弥陀の磨崖仏 (笠間街道にて)

奈良市 天 正 千 梢

いくつもの道に迷うて喜寿の春

山彦がかえつて来ます熊野道

医は算術隣の土地を又も買い

雨に耐え風にも耐えて摩崖仏

原点があいまい焦点ばやけてき

生駒市 北山悟郎

合掌が心のゆがみ正してる

古里を偲ぶ夕焼け秋深く

克服に耐え抜いた汗輝いて

三枚目あがきもがけど三枚目

畜生にも劣る人間右往左往し

大和高田市 岸本豊平次

日の丸を立て君が代で新世紀

万歩計朝々鳥居と寺の門

ばあさんは手を合わせれば孫のこと

この孫もやはり両親見ないのか

老いの庭野菜に四季の花を止め

大和郡山市 坊農柳弘

一年の煩惱払う除夜の鐘

達筆の賀状やっぱり日本人

自己研磨今年こそはと三浪目

去年より少し小振りのしめ飾り

屠蘇を酌むその手で婿は白ワイン

香芝市 大内朝子

ふる里に似た風景に涌く涙

しばらくをブランコ毛虫とゆれる秋

義理人情薄くなったね合理主義

ぴったりのガラスの靴にまだあえぬ

わたくしの一歩うしろは過去の風

京都市 都倉求芽

大気汚濁 昇天の龍の及び腰

大所高所 龍よ天上より怒れ

元日やうちの卑弥呼のいい機嫌

温顔を埋めたる菊や秋挽歌（嗚呼 松川杜的さん）

いくら待っても大事な賀状がひとつ来ぬ

京都市 小西未佐子

いにしえの命に触れし明日香風

講演に笑いの葉わらじ医者

大根を抜いていただく葉の青さ

五十年前のいけずを詫びられる（クラス会 2句）

若き日の憧れの師に腕を貸す

京都市 山海友照

新春や紫式部も恋をする

新春の風はわたしを抱きたがる

新春に子が来て孫が来て孤独

どっしりとやさしい愛が落ちてくる

寒いとは言えず写経の墨を擦る

京都府 稲葉冬葉

亡父母に逢えた気がする天寧寺

こしひかり盛って野菊の仏花

善玉悪玉どの人間も私です

時差ボケに姑のみそ汁待っていた

血のかような温かい手を誤解され

富山市 舟渡杏花

愛知県 早川盛夫

先頭の見えぬ行列従いてみる  
余生とや「姥ときめき」を読み返す  
面白半分たった一口乗った運  
真実が二つに見えるどうしよう  
生き甲斐は鄙にはまれな孫ひとり

富山市 酒井輝

起きて先ず何をするかと怖い問い  
立て板の水は流れるまま凍る  
のびる毛もあるのに閑な床屋さん  
とつときの酒でも同じ眼が据わる  
穏やかに負ける余裕が頼られる

富山市 島ひかる

辰年へ渡すバトンを拭いておく  
祝い箸ふえてまあるく居る所存  
新世紀肩の力を少し抜く  
想い出へつづく百人一首読む  
感情の起伏はげしい北の海

富山県 増田紗弓

初冠雪ひとりに耐える赤い橋  
日本海の借景好きなティールーム  
ふりむくと落第点でいるわたし  
制服を着るともうひとりの私  
後退をしない一步を踏みしめる

生け花に大工道具の一揃い  
ベランダの茄子に値段はつけられぬ  
一日に三合で足るコシヒカリ  
面白い人だねメロン食べ残す  
先頭を走って逃げるのも勇氣

可児市 板山まみ子

不便さとおいしい水の正比例  
車窓から富士が見えたらひと眠り  
大島もらい手のない形見分け  
かしましく遺影の下で形見分け  
仏より今の自分をもて余し

静岡市 安本晃授

一本の矢につがえてる子の決意  
読経する母の掌にもつ弥陀の像  
酒止めて親のない子に援助の掌  
石女へおぼろ月夜の街の冴え  
暮らし向き気に添う母のオデン味

富士宮市 渥美弧秀

朝酌が日課となつて老い弾む  
年金の歩幅つまずく交際費  
夕焼けを風の子塾へまっしぐら  
雪コンコみちのく民話夢うつつ  
民話劇心の拍手鳴り止まず



無人駅駅前宿の切符売り

静岡県 藺田 栞 杏

秋うらら余生うららと収穫祭

分校に通う小径の草紅葉

吾が町の銀座淋しく秋の雲

秋風に企業献金揺れに揺れ

横浜市 菱田 満 秋

今日中に終ると明日の用がない

喧嘩せぬ約束で行くフルムーン

紅葉が旅情をそそる小京都

人質として価値のある日本人

仏様にも初物は見せておく

横浜市 清水 潮 華

先客につられて高い肉を買う

一人より二人あうんの感嘆詞

ミスもまた暮しの気付葉になり

悔いのない余生に時刻表を変え

紅葉のさくら春にもひけとらず

横浜市 菊地 政 勝

特別な思念で迎える二千年

千年に一度の節目に会う歓喜

知らぬ間にドッコイショからアイタタタ

督促状世辞のひとつもありやしない

俟約も他人から見ればケチとなり

柿の実に冬色点る神無月

残り火をスパークさせて秋の声

真実を話して敵を作ってる

こんな時あんなこともと玉手箱

名月をおててつないで野を帰る

横浜市 小野 句多留

御来光毛布かぶって待つレンズ

鬱の夜に放してくれぬ酒という

夕日落つ水平線にある隙間

前列に座り演者を一人占め

朝顔が種を残して店じまい

川崎市 和泉 あかり

杖一本傘立てにある秋日和

高層のビルは造影剤を吞む

ころがったとこでころがる笑い声

水たまり落葉が見得をきっている

市場籠男が持つと予算超え

東京都 後藤 早智

秋の色沈めワインのグラス揺れ

名園がいろはもみじの色を待ち

冬ざくらひとひら揺れる水戸屋敷

広重の絵が動き出す江戸の朝

ニュートンのリンゴの木あり植物園

八王子市 播本 充子

伸び盛り分厚い辞書を持ち歩く

訳ありが他一名にされている

賞状を手には夕飯を考える

分けあって食べるミカンの酸い甘い

御無沙汰を心から詫びる喪の葉書

町田市 竹内 紫 鏗

旧著呈し合つて八十路の初対面

物理実習 老いて血圧測定器

ありがとうの歯切れで若い声保つ

精鋭の合唱 君が代にしびれ

遠角をレーザにするプロの読み

大宮市 八田 敏

輪台に夢載せている菊作り

雑草のないベランダの花淋し

木枯しが吹く日鮮やか富士の峰

背が縮み腹が出てまだ派手を着る

体調を崩しても世話止められず

仙台市 川村 映輝

何が出てくるか解らぬ二〇〇〇年

辰年を八度迎えて夢がある

菊香る世話したころをなつかしむ

黒猫もメールを運ぶようになり

居眠りが本を読んでもスタイルで

弘前市 佐治 千加子

雪夢幻津軽三味線酒三味

津軽野の春まなうらに雪ごもり

旋律自在 逝つてしまった人の影

鳥呼びの口笛か野のまぼろしか

夕焼けがムンクの叫び聞けという

弘前市 福士 慕情

大阪へ発つ日の岩木凜然と

地下街を行ったり来たり蟻五匹

ツネさんの脚は疲れを見せません

塔まつり呼名土産の津軽衆

星影のワルツ再会約束し

弘前市 相馬 銀波

再職は農夫ゴム長から慣れる

義歯揃い今年こそはの箸になる

椅子盗りが始まる村の選挙戦

盃を相手に肩の力抜く

書き終えた日記の筆を洗う除夜

弘前市 今 愁女

厚底の靴で闊歩の長い足

暑い夏何処に消えたかみぞれ降る

雪虫が舞ってどか雪予告する

年輪の重さがあまり喋らない

終局はお面を捨てて好き放題

弘前市 櫻庭順風

初対面でも久闊を叙す如く

思ひ出を国の柳友抱いて来る

五楽庵乾杯せねば始らぬ

白寿からダンスのコーチ受ける喜寿

御流れは私淑の距離を近くする

弘前市 高瀬霜石

廃線のそのまた先にある日本

お下げ髪いつまで結ってやれるやら

空缶ゴロゴロ人は憎まぬ竹箒

チェーン店なんだか足らぬものがある

土曜日の午後のわたしはトムソーヤ

弘前市 高橋岳水

夕闇が一気に迫る北の冬

北国の墨絵でつづる冬の貌

コーヒーのコクが深まり冬に入る

雪降るを忌避するところ待つところ

勇退という失職をしてしまう

弘前市 小寺花峯

片棒を担いでくれる風を待つ

子供等がいてホッとする遊園地

探り合う腹は笑顔を崩せない

もう少し急いでくれよカタツムリ

賞味期限過ぎてねばりのない納豆

弘前市 蒔苗果林

八十歳で二十一世紀うれしいな

男らしい男ほとんど戦死した

二十一世紀いくさ起こらぬ世は夢か

でこぼこの道でも福祉ありがたい

この世からあの世の峠春だろうか

弘前市 中山雅城

ブルースの女王が消えた雨の夜

マージャンで奥さん褒めるにぎり飯

ナブキンを置いて二人の旅続く

クリップに止められている請求書

トピックス沢山持った文化人

弘前市 一戸ツネ

恵まれて大樹の陰に組む胡坐

しあわせの夢をみてますダンボール

密葬で終るドラマに秋の雨

まやかしのおでんが笑うほがらかに

ぶきつちよな人生寒い冬がくる

弘前市 須郷井蛙

初日の出 一家での矢を放つ

葉書すらすら文章力がうらやまれ

朝夕のキスで送迎飼育法

適量は書いていません酒パック

カラスにも生存権がある地球

弘前市 岡本花匠  
分ちあい生きるしあわせ噛みしめる

ひた隠す傷にも慈悲の除夜の鐘

福寿草われの出番と屠蘇祝う

妻と子の希望に笑顔忘れない

クローン牛売られ疑念が身構える

弘前市 小枝ふさゑ

ななかまどバージンロードの緋の如く

子と同じ可愛い赤いりんご達

蜜りんご天の恵みをたつぷりと

古稀近く老人力を貯える

イエスマン僕の前ではノーと言う

黒石市 相馬一花

百薬の長を飲めない薬漬け

十月に咲くアサガオがいじらしい

写真顔三面鏡で特訓す

おとなしい男により危険です

守れない服務規定を貼る会社

黒石市 千葉風樹

金太郎飴の中から母の傘

禪という突っ支い棒が風化する

弟がにやにや笑う野辺送り

地球儀を滑り落ちてく蟻の列

手の平二枚自分へ拍手してやれる

十和田市 阿部進  
もう一度巡り合いたいあの人と  
生きる希望愛を知らない子に与え  
無心にて振ったバットがホームラン  
第三者入り示談がもつれ出し  
手をつなぎきらめく虹の橋渡る

十和田市 小笠原敏人

新世紀人類全て期待して

雪国に生れ育つても怖い雪

雪に泣き南の人に妬まれる

暴走車脱兎の如く雪を撥ね

冬迎え暑過ぎたれど夏恋し

八戸市 島田昭治

貴乃花勝って今夜はよく眠り

墓参り待っていたよに塔婆ゆれ

弔詞読む仏想えば絶句する

我がえとも大したことなく静かに消え

迷信も知らず知らずに信じてる

砂川市 大橋政良

一匹と言われるところまで墮ちる

平和に酔って戦車の音が聞こえない

孤独から逃げるコーヒー飲みによく

帰る家ボクの育ってきた匂い

紙コップビールの泡のような愚痴

# この句 この人

橘 高 薫 風

正月の樹々新年の音がして 中村ゆきを  
「なにこのおはしますかはしらねども」

と西行法師は伊勢参宮にて詠んだが、新年の改まったころはこの何事に近い気分である。伊勢の老杉ならずとも松柏の風は新鮮な言葉で語り掛け、希望や誓いを聞いてくれる。

作者は北浜の商社を退職後、日本商工会議所の簿記一級検定審査委員として指導に忙しい日を送っておられる。現役時代よく夜の北新地でお会いしたものだ。

## 除夜の鐘大地踏みしめ聴く家族

出口セツ子

炬燵でぬくぬくとテレビからの除夜の鐘を聞く越年でなく、凜とした寒気の中で大地を踏まえての感懷は、身に染みて一年の終りにふさわしい。それも家族ぐるみである。仕合わせて健康な一家のたたずまいが分かる。

ご主人は弁理士、本社句会へ出席のセツ子さんの厳めしいアツシー君を勤められている。働けど蟻の黒さに敵わない 牛尾 緑良  
不況の日本、昨年も労働者や小商人は懸命

に働いたが収入は上がらない。蟻の働きぶりには及ばないだろうが、今年は何としても景気の浮上を期待したい。中句の描写の力強さ。透析を続けるハンディキャップを負うての作者は自然や人生を見詰める目も厳しい。

## 天と地を結んで虹は縦に出来イグアスの滝

徳山みつこ

南北米大陸の旅の収穫だが、この句をはじめどの句も、その土地柄、歴史を踏まえて、鮮明な映像描写と心理把握が出来ている。イグアスの滝のスケールの大きさは、荒削りの虹で、滝そのものが七色の橋と納得出来るし、コルコバードの丘やその他虹の未知の土地の印象をしっかりと伝えてくれる。

## 新しい同人だが作句は登り坂、健闘を願う。

## 過去帳に似顔絵あれば楽しく

羽津川公乃

これを書いている今日は私の父の祥月命日で、高岳院潤齋徳風居士などある過去帳より、私と違って頭髮を簾のように一本一本並べたカリカチュアの方が親しめる。

今年私が選を担当した全国的な大会にも、秀句に推されることが目立った作者である。岩美の石谷美恵子さんのグループの一人、すつきりと歯切れよい容姿の通りの句姿だ。

## 御病氣を案ずるよりも違ひに行く

岩切 康子

「春に逢う庭の球根埋め直し」という句もある。作者は人にも花にもやさしいのである。病人は肉親ではなく、目上の恩師であるようなたずまいの句と言える。

川柳塔の催しには熊本から永田俊子さんの介添えのように来阪される。笑顔の人である。

## 吐息したロダンの像が立つ気配

神保坊太郎

ロダンの「考える人」が溜息ついて立ちそうだという。さて何処へ行くのだろうかと思像するのも面白い。きつと腹が減ったのだろうか。

作者は八十三歳、先代から古来の文芸に造詣深く、ご自身も俳句から転向された。

## さればされば強い酒とはまた嬉し

森下 愛論

考える人が豹変したのではなからう。若い時代には見られなかったのに、路郎の門下らしく最近酒の句が多い。

雅号の愛論はアイロンの意、大病院に出入りのクリーニング店を営む苦勞人である。

# 自選集

阿 萬 萬 的

藤 井 明 朗

雜学を鼻にペラペラよく喋る  
自己主張過ぎて自分の席がない  
四面楚歌の中で空転しています  
鵜呑みにしたばかりにあった落とし穴  
歳かしら あきれる程の物忘れ

小林 由 多 香

開発へ町の歴史がゆすぶられ  
不覚にも包んだボロが顔を出し  
給料を支払いやつと月を越す  
ごろごろと居るから粗大ゴミにされ  
悪性の癌と想像してはいた

西 田 柳 宏 子

如才ない利口でしょっちゅう蹴つまずく  
ふざけるなちよつと触れたらセクハラか  
首賭けるなどと気易う言うでない  
電線も震えて唸る今朝の冷え  
妻に尻叩かれるまで迷うてる

藤 村 女

帰省とは故郷に父母のおわすうち  
名鐘の余韻静かに古都暮れる  
寺々の鐘の余韻も京の宿  
木枯らしが吹いて街角落葉舞う  
情念も修羅もひとつの流れ雲

宮 口 笛 生

立ち食いのそば熱過ぎる雪の駅  
すし屋にはすしパン屋にはパン溢れ  
年金にボーナス欲しい十二月  
二〇〇〇年期待に満ちる初日の出  
まだ欲も希望もあつて初詣で

遠山可住

忘年会になると特異な才が出る  
相性は吉気が変らないうちに

素人のこわさいまごろ種を播く  
誕生日が来て順調にボケてます  
夫婦円満きつと男がいかれてる

恒松町紅

辰の春一つの坂を越えた酒

もう無理は利かぬと風に諭される  
瓶置いて一人で空けたような顔  
手を振って別れた駅の無表情  
回り道 決断力のない男

野田素身郎

少し度がすぎた故郷の祭り酒  
テレビは魔物時に家庭の和を乱し  
わが家に似たテレビドラマに目をそむけ  
野球シーズン終って永い永い冬  
杖ついて注意していてまた転び

波多野五楽庵

飲めば寡黙飲まねば寡黙なる男  
私の罪を背負うた石榴落ち  
こないいい人を見送る海の風  
天上天下枯葉の渦の中にいる  
みちのくを涙で染める無明かな

月原宵明

いつまでも切れたテープを持つ未練  
日の丸は三つになった兎に描ける  
ダムの底眠ったままの村がある  
丹前は顔の真ん中だけ洗う  
両親が付けた名嫌っているはたち

正本水客

仲のよい夫婦と世間でもみられてい  
玄関に回れと土の手ふきながら  
黄昏れている人生と思わない  
こだわりのない人だと心に思う  
目を閉じてみたまえ世間が見えてくる

金井文秋

物忘れをビッグニュースのように言う  
日に十萬も脳細胞が減るそうなの  
意見を言えというから言えば役持たせ  
欲のない目で見る人は騙せない  
蟹コースは苦手だ欠に丸を入れ

黒川紫香

この秋の彩も見ないで年老いぬ  
どの娘にも昔話を一つ持ち（長崎の娘達と再会）  
賑やかに戻る曾孫にほっとする  
譲られて貰う車内の席温し  
有難し車で行くこと誘われる

洪滞の多い余生へ鰯雲

炎を渡る二人を裂いた挽歌聞く  
頭脳明晰されど気になる離婚歴  
祝辞聞きふと傾いた花の首  
晴天へすこし良妻演じよう

小西雄々

辻白溪子

未練あるらしいと友が知っている  
喧嘩した事思い出しなつかしい  
じれているのに結論をせかされる  
信仰の頭へ賽銭狙うて投げ  
筆おいて便所へ立っている写経

野村太茂津

初日の出 噫生かされて生きていた  
神さまも嬉しいらしい掌の響き  
真実は一つペダルを強く踏む  
護国神社に拍手は澄みよく響く  
新しい年へ肩肘張らず生き

高杉鬼遊

俊平も冬二もない年が昏れ  
子どもの沈むでもなく浮いている  
眩しいが五人家族の父の席  
お運びをする孫がいるお正月  
ええやんか来る時は来る世紀末

板尾岳人

八木千代

新春の海に出たがる濡れ落葉  
新春や懺悔の出来る山の峰  
父も母も逢いに来たがるお元日  
新春や妻よゆっくり歩こうか  
新春の坂田三吉王手飛車（長男王将三吉役）

斉藤 荔

両腕にかなうだけ抱く冬野菜  
チケットを落としたりして冬のバス  
一冬を凌ぐ半端な気ではない  
動脈をやわらかくして冬支度  
眈を初日に向けて歩くべし

竹馬がこの頃少し軽くなり  
草笛の音が人間らしくなる  
大根の白を素直に信じよう  
鈴虫が逝き焼芋の笛になる  
愛情をたつぷり込めたりんごです

川島諷云児

最高の掘り出し物は妻である  
老いるとは悲しいけれど老いてゆく  
毎日が超特急で過去になる  
夢のゆめそのまた夢の宝くじ  
退屈の虫がよからぬ夢を抱く



芳地狸村

(NHK「ただいま」の  
ロケ風景 5句)

ただいまのロケにわいてる城下町  
だんじりのはつぴたのしいエキストラ  
おまつりが二度来たようなロケーション

ロケ囲む女の口がやかましい  
にわか雨ホースで降らす深夜ロケ

榎本吐来

神経症また医師変えて今日を生く  
パートタイマー加減乗除にひた生きる  
恰好がつかなくなつて行く理髪

老妻の本音を知つた盗み聞き  
痴呆症にまだ距離がある鬱に耐え

堀端三男

掴まれる尻尾ないからよく眠る  
あの日から胸に刻んでいる名前

晴雨不論と添え書きがある温かさ  
生きる喜びどのページにもある日誌

檜山はゆつくり登る山らしい

林荒介

きつぱりと龍は己の天を持つ  
あらたまの十七文字にある宇宙

街道で買わされた様々な擬音  
比喩暗喩わたしの家も船である

風の糸明日の音を連れて来る

土橋螢

はつはるを迎える髭を剃っている  
会うだけでいいから喫茶店へ行く

日本画の赤が変色せずにいる  
君が代を唱えない子の冬休み

二千年春に満期となる寿命

舟木与根一

三世代順序不同に風呂が込み  
米を搗く水車が孫のはのみこめぬ

ポランティアに月給取りが指図する  
銭でない銭に魔がさす銀行屋

転んだこと妻に伏せとくサロンパス

小砂白汀

速く飲めよ飲めよと孫が急きたてる  
空振りも見せますこれもショーだから

天と地の激しきキツス稲光り  
車から会釈をくれる人もおり

雷も天気予報に気をつかい

西村早苗

何も拝めずお神酒だけ飲んで来る  
文化祭以来藍染めに凝り

ばあちゃんも手袋に紐つけてあげ  
日の丸を立てて日本へ抱負持つ

星のパレードが始まるポカンと見えています

田 辺 灸 六

辛酸を嘗めて臥竜の門叩く  
蜘蛛の巣に悩みを託す風の文  
日日達者病に隙は見せられぬ  
よもやとは思ふ不安の流れ星  
今日を謝し明日を祈る夕焼雲

二 宗 吟 平

節々に音をさせてるデーサービス  
山車喧嘩女の山車も敗けとらぬ  
欠伸する口で爺さん詩の稽古  
名物にするには葡萄小さすぎ  
寝転んで山車の喧嘩を見るテレビ

弘 津 柳 慶

大空の青が目にしむ失業者  
美しく化粧をされて棺の中  
御詠歌が揃い遍路の鈴がなり  
横文字に弱い大正生れです  
旧道の昔ながらの格子街

石 川 侃 流 洞

二千円札相場が狂うお年玉  
人畜無害そんな男に用はない  
波乱万丈の人生悼む棺の石  
相槌を打てば収まる妻の愚痴  
種明しして手品師の腕が冴え

越 智 一 水

路郎忌でなくても路郎の軸を掛け  
体調がよくて仏へ香を忘れ  
植木市回り回ってシクラメン  
コスモスの駅と別れてひとり旅  
ひょうたんのようになきよう角をとり

木 村 あ き ら

老兵は消えず卒寿を追っている  
お雑煮へ賀状ドッサリやってくる  
赤ちゃんが全身で笑う豪快さ  
カアちゃん的笑顔何だかい予感  
ワンワン呟今年の景気盛り上げる(鳴門)

田 口 虹 汀

枝振りのいい柿が有る柿右衛門  
将棋差す術も知らずに名調子  
お頂戴曾孫の指はピンク色  
同じ柱に今年も無事で松飾る  
百歳の筆とは見えぬ軸の龍

河 内 天 笑

誤作動へひやひやもんの2000年  
これからを背負う子供が減りつづけ  
わいせつな手を振っていたノック知事  
F・Aを根こそぎにするジャイアンツ  
叩いたらまたコンクリが落ちるがな

同人特集

私の一句

雪うさぎ昭和の雪はもつと白  
 にんげんは非力豪雨へ佇ちつくす  
 風はオカリナやさしく老いの背筋撫で  
 生きるための小さな虫に刺されたり  
 佗助にないしょ白梅植えたこと  
 西方浄土 仏にすがる歳になり  
 平和っていいな港の万国旗  
 草はまた萌えて別れたままの人  
 人生に恋してよそ見など出来ぬ  
 一升ビン僕の面影かも知れぬ  
 泣き笑いペンシル抱いて五十年  
 ご縁日 金幣の風有り難し  
 待ったなし地球は回り陽は沈む  
 喜怒哀楽噛み締め上る八十路坂  
 付きを呼ぶカラーは白ときめている

|     |      |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |
|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 茨木市 | 寝屋川市 | 大阪市 | 岡山市 | 豊中市 | 枚方市 | 今治市 | 八尾市 | 米子市 | 鳥取市 | 豊中市 | 尼崎市 | 尼崎市 | 竹原市 | 豊中市 |
| 堀   | 北    | 井   | 二   | 田   | 海   | 越   | 長   | 驚   | 岩   | 滝   | 春   | 春   | 森   | 橘   |
|     | 岡    | 上   | 宗   | 中   | 老   | 智   | 谷   | 見   | 原   | 北   | 城   | 城   | 井   | 高   |
| 良   | 波    | 白   | 吟   | 正   |     | 一   | 春   | 正   | 喬   | 博   | 年   | 武   | 菁   | 薫   |
| 江   | 留    | 峰   | 平   | 坊   | 洋   | 水   | 蘭   | 子   | 水   | 史   | 代   | 庫   | 居   | 風   |

親しさを保ちながらも車間距離  
べっぴんで何かたりない曲線美  
上向いて歩けば空が味方する  
二人して在宅介護ごっこする  
お顔なら知ってますがと名を聞かれ  
老い独り思い出し探し豆ごはん  
ゲート読むぐらいのゆとり作らねば  
日に一度太陽おがみ出るゆとり  
汗をした顔に夕陽が美しい  
眠りから覚めた埴輪にある笑顔  
ふり向けば俵せだった拋物線  
石橋を渡ってからの綱渡り  
大阪のほこりを吸うて通り抜け  
陽が落ちる今日得たものは何だろう  
雪やんで知るお日さまの暖かさ  
父と子の絆を結ぶ武者絵風  
明日の夢信じて歩く裏通り  
松の入った頭の輪切り写される  
戦争を知らない馬は美しい

|     |     |     |     |      |     |     |     |     |     |     |     |      |     |     |     |      |     |     |
|-----|-----|-----|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|-----|-----|-----|------|-----|-----|
| 大阪市 | 京都府 | 出雲市 | 富山市 | 和歌山市 | 大阪市 | 米子市 | 出雲市 | 香川県 | 香川県 | 枚方市 | 松原市 | 寝屋川市 | 島根県 | 和泉市 | 出雲市 | 藤井寺市 | 豊中市 | 尼崎市 |
| 安達  | 稲葉  | 園山  | 酒井  | 桜井   | 津守  | 小西  | 富田  | 木村  | 工藤  | 寺川  | 小池  | 高田   | 岸田  | 岡井  | 小白  | 中島   | 井上  | 黒川  |
| はじめ | 冬葉  | 多賀子 |     | 千秀   | 柳伸  | 雄々  | 蘭水  | あきら | 吟笑  | 弘一  | しげお | 博泉   | 桂子  | やすお | 房子  | 志洋   | 直次  | 紫香  |

咳払いして遠慮する褒め言葉  
 三万円からは妻の許可が要り  
 白扇を置いてめでたい膝を折る  
 勲章は無くとも胸を張ってみる  
 立秋やここをせんとと蟬が鳴く  
 だまつてる兎聞く耳持っている  
 サフィニアの咲いてる街へ出てみよう  
 のり巻きが上手になって娘が嫁ぎ  
 勝利者へ新たな敵が待つ輪廻  
 背伸びする天の高さは知らずして  
 法善寺小雨しよぼしよぼ上燭や  
 余生まだこれから歩く道がある  
 よっこらしよどっこいしようと妻も古稀  
 手抜きする程の仕事もない老後  
 別居より泣きも笑いもある同居  
 引き潮になると肋が疼きだす  
 朝酒も許されようぞ旅の膳  
 他の命いただき生きるわが命  
 シルクロード三蔵法師ゆめ運ぶ

|    |     |     |      |     |     |     |    |      |     |     |     |     |     |     |     |      |     |     |
|----|-----|-----|------|-----|-----|-----|----|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|-----|-----|
| 堺市 | 愛知県 | 高槻市 | 和歌山市 | 唐津市 | 唐津市 | 弘前市 | 堺市 | 和歌山市 | 岡山県 | 弘前市 | 高槻市 | 奈良市 | 大阪市 | 松原市 | 美称市 | 和歌山市 | 岡山市 | 交野市 |
| 楊井 | 早川  | 井上  | 池永   | 山門  | 山門  | 斉藤  | 柿花 | 青枝   | 小林  | 一戸  | 川島  | 宮口  | 金井  | 北野  | 安平次 | 田中   | 井上  | 山川  |
| 二南 | 盛夫  | 照子  | 正匍   | 幸夫  | タミ  | 紀美女 | 鉄治 | 妻子   | ツネ  | 諷云児 | 笛生  | 文秋  | 久子  | 弘道  | みね  | 柳五郎  | 日出子 |     |

まかせておけと文句のない料理  
 世紀末つかまるものの無い怖さ  
 悪友を信じた背中痒くなる  
 お父さんに怒る元気の欲しい春  
 水割りの底で煩惱まだ消えず  
 絵手紙ははみ出す元氣くれました  
 いつまでも元気でいたい現住所  
 器より大きな欲を盛りたいがる  
 散る迄に土に爪跡残したい  
 悪戦苦闘煙草やめて酒やめて  
 足して二で割れば程よい夫婦かも  
 あんたきつと長生きやでと脅される  
 誕生日我が手をじつと見る無口  
 水涸れた川をみているバスのゆれ  
 掌で受けければ雨の色が消え  
 昇り龍我れ還暦の絵馬新た  
 生まれつき良心虚弱体質だ  
 無関心よそおう父がすべて知る  
 筋金をいれて厳しい道進む

|     |     |     |       |     |     |      |     |      |     |     |     |     |      |     |     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-------|-----|-----|------|-----|------|-----|-----|-----|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|
| 鳥取県 | 大阪府 | 鳥取県 | 大和郡山市 | 竹原市 | 大阪府 | 寝屋川市 | 箕面市 | 岡山県  | 奈良市 | 鳥取市 | 海南市 | 鳥取県 | 寝屋川市 | 箕面市 | 大阪府 | 岡山県 | 西宮市 | 島根県 |
| 橋本  | 中田  | 新家  | 坊農    | 時広  | 正本  | 坂上   | 岩津  | 大石   | 天正  | 西村  | 三宅  | 西川  | 平松   | 椎江  | 北勝  | 荻野  | 菊池  | 西村  |
| 多哥由 | あい子 | 完司  | 柳弘    | 一路  | 水客  | 高栄   | ようじ | あすなろ | 千梢  | 黙光  | 保州  | 和子  | かすみ  | 清芳  | 勝美  | 鮫虎狼 | トミエ | 早苗  |

たこ焼屋 公的資金に恵まれず

市町村合併蛇は反対だ

供日が来お会式が来て年の暮れ

お元日もう一日が暮れて来る

山頂の雪に出逢った別世界

手を貸さずじつと見守る愛もある

紫陽花も変った僕も変らねば

光陰は刻々僕は酒刻々

ゆっくりと花回廊にのめりこむ

酒の所為あんたの所為じゃないかね

がつぷりと組んで持病と四つ角力

よく聞けば幸せ過ぎて出てる愚痴

羅漢さんに尋ねたいことたとあり

妻の持つ鎖の重さ思い知り

君が代を聞けば昭和天皇の背な

飛車と角捨ててたくらみあるらしい

燃える種いく度落とした火消壺

勇気ある言葉で失う友一人

玉砂利の丸さへ至る年がある

唐津市

唐津市

唐津市

河内長野市

大阪市

十和田市

静岡県

鳥取市

鳥取県

岸和田市

倉敷市

海南市

大阪市

香川県

大和高田市

大阪市

香川県

枚方市

横浜市

久保正剣

仁部四郎

田口虹汀

植村喜代

松尾柳右子

阿部進

蘭田漠沓

武田帆雀

権代康女

田中文時

田辺炎六

谷口義男

町田達子

成重放任

岸本豊平次

寺井東雲

川崎ひかり

二宮山久

菱田満秋

いい顔に出逢う九十すぎている  
 今生の軋みが残るラムネ玉  
 約束を詰めて手帳が重くなる  
 笑い声あふれる城に三世代  
 太鼓より太鼓を叩く人が好き  
 綿着縫う母の温みも含ませて  
 辞書を引く流されまいとして流れ  
 運命線がまだまだ希望を持てと言う  
 老眼に香りが見える蔭の臺  
 落し文するりと月の真ん中に  
 はっぴきた孫がまつりの立役者  
 年輪に驚くときは伐られて居  
 自慢の爪にマニキュアの色選ぶ  
 愛染の風にさくらが狂い舞う  
 代表なんて柄ではないと嬉しそう  
 私に空いっぱいの星がある  
 核のない世界夢見る鳩の群  
 税務署でしっかり者のふりをした  
 点滴は今の自分と向き合わせ

|     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |      |     |      |     |     |     |      |      |     |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|-----|------|-----|-----|-----|------|------|-----|
| 大阪市 | 弘前市 | 鳥取市 | 鳥取市 | 今治市 | 大阪市 | 岡山県 | 香川県 | 米子市 | 弘前市 | 岸和田市 | 熊本県 | 岸和田市 | 熊本市 | 奈良市 | 大阪市 | 加古川市 | 寝屋川市 | 豊中市 |
| 榊   | 岡   | 岸   | 岸   | 月   | 津   | 矢   | 山   | 白   | 波   | 芳    | 高   | 藪    | 永   | 米   | 玉   | 吐    | 岸    | 湯   |
| 本   | 本   | 本   | 本   | 原   | 村   | 内   | 地   | 根   | 多   | 野    | 地   | 野    | 野   | 野   | 田   | 置    | 田    | 浅   |
| 落   | 花   | 宏   | 孝   | 宵   | 志   | 寿   | マ   | ふ   | 五   | 狸    | 宵   | け    | 俊   | 恭   | 英   | 公    | あ    | 馬   |
| 児   | 匠   | 章   | 子   | 明   | 華   | 恵   | ツ   | み   | 楽   | 村    | 草   | 子    | 子   | 昌   | 子   | 一    | め    | 洗   |



貝になりたいと言った八月の砂  
 プロポーズ君を終身刑に処す  
 くちびるを重ね人工呼吸だな  
 ぶつかった壁に他力の風を待つ  
 自分でもいやな自分の殻の音  
 老人パワー地道な風で輪を広げ  
 虫を聞く胸に流れる月日あり  
 生き下手を苦笑いするひとり酒  
 腰かけた石を拝んで立つ遍路  
 忙しいにコーヒータム含みます  
 たとう紙に江戸紫の形見分け  
 絶景はしまなみ橋の来ない島  
 宇宙飛ぶ夢七十へ追加する  
 哲学の道にデュエットしたい人  
 老人力笑って捨てる古い服  
 空豆の塩茹で地ビール美味すぎる  
 初雪のどこにも迷うものはなし  
 天の神地の神修羅を照らす朝  
 嘴で世紀の殻を割って出る

|      |      |      |     |     |       |      |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |
|------|------|------|-----|-----|-------|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 富田林市 | 和歌山市 | 和歌山市 | 横浜市 | 京都市 | 河内長野市 | 寝屋川市 | 吹田市 | 八尾市 | 西宮市 | 高石市 | 大阪市 | 兵庫県 | 貝塚市 | 八尾市 | 下関市 | 大阪市 | 静岡市 | 茨木市 |
| 片岡   | 川上   | 川上   | 清水  | 都倉  | 井上    | 堀江   | 石原  | 宮崎  | 山本  | 浅野  | 渡部  | 遠山  | 池田  | 生嶋  | 石川  | 辻川  | 安本  | 井上  |
| 智恵子  | 富湖   | 大輪   | 潮華  | 求芽  | 喜醉    | 光子   | 靖巳  | シマ子 | 義子  | 房子  | さと美 | 可住  | 寿美子 | ますみ | 侃流洞 | 慶子  | 晃授  | 森生  |

風やさし握りこぶしを開かせる  
マネキンの首が飛んでる店じまい  
おもいきり机たたいて怒り  
着飾れば言葉遣いも変る妻  
らくらくと消してみせます女の火  
知恵借りに来たと一本提げている  
墓まいりこれから顔見世ですねんわ  
激動の百年だったなあ地球  
よたよたと軍艦みたいな靴がゆく  
蝶と蛾の違いが判る水中花  
何気なく話したくなる秋の風  
木偶でよし雑魚でまたよし葱坊主  
ながらえて僕がだんだん僕になる  
独り居の友が笑いをもらいに来  
必死に今を咲く私振りむかぬ  
髭生やし運の向くのを待っている  
美しく生きて行く知恵借りに行く  
すうどんと決めても覗くウインドー  
あなたの彩に染める余白はとってある

|      |      |     |      |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |
|------|------|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 堀端   | 原    | 津   | 谷    | 光   | 川   | 蒔   | 野   | 岩   | 相   | 板   | 古   | 安   | 河   | 西   | 傍   | 清   | 樋   | 門   |
| 三男   | さよ子  | 八重子 | 玲義   | 映輝  | 果林  | 京子  | 康子  | 一花  | 倫子  | 節夫  | 寿美子 | 庸佑  | 艶子  | 克治  | 利武  | 輝夫  | たず子 |     |
| 和歌山市 | 岸和田市 | 鳥取県 | 東大阪市 | 米子市 | 仙台市 | 弘前市 | 今治市 | 熊本県 | 黒石市 | 大阪市 | 竹原市 | 豊中市 | 大阪市 | 鳥取県 | 高槻市 | 大阪市 | 唐津市 | 西宮市 |

紫に爪塗り賜うことなかれ  
主婦業に期限無いので手抜きする  
喜びは米寿の胸をふくらます  
お手伝い米寿煮干しの頭取り  
ひまわりのような高校生の群  
浮雲を眺めてあきず考えず  
枯葉脱ぎそして閑かに山眠る  
花柄の服が目につく喪明けごろ  
手花火を囲むほとけの顔ばかり  
立ち枯れのススキは過去を向いたまま  
雛さまのざわめきがする箱の中  
僕よりも大きくなるな影法師  
千羽鶴もう翔べそうな彩でなし  
よく笑う人の隣の席をとる  
不自由は不幸ではない寒牡丹  
白い杖手引きする手は空けてある  
はかなくて力強くていのちだな  
白で咲く理由があったアマリリス  
天の花地の星姉妹清々し

|    |     |    |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |      |
|----|-----|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|
| 堺市 | 西宮市 | 堺市 | 八尾市 | 八尾市 | 大阪市 | 宇都市 | 大阪市 | 富山市 | 東京都 | 大阪市 | 大阪市 | 鳥取県 | 八尾市 | 西宮市 | 島根県 | 島根県 | 大阪市 | 羽曳野市 |
| 山  | 牧   | 宮  | 村   | 村   | 西   | 平   | 小   | 島   | 後   | 川   | 清   | 林   | 内   | 西   | 堀   | 堀   | 稲   | 福    |
| 本  | 洲   | 本  | 上   | 上   | 出   | 田   | 林   |     | 藤   | 端   | 水   |     | 海   | 口   | 江   | 江   | 本   | 田    |
| 半  | 富   | かり | ミ   | 剛   | 楓   | 実   | 周   | ひ   | 早   | 一   | 絹   | 露   | 幸   | い   | 芳   | 正   | 凡   | 満    |
| 銭  | 喜   | りん | 子   | 治   | 楽   | 男   | 信   | か   | 智   | 歩   | 子   | 杖   | 生   | ゑ   | 子   | 朗   | 子   | 州    |

満ち足りて敵も味方も愛してる  
人間が好きで今日も群れに居る  
還暦の鯛めでたきや哀しきや  
ときどきは自分のために手を叩く  
最後の晚餐鉄火巻頼みます  
波にもまれそれでも彩は変らない  
芥箱にまだ咲いている七変化  
仏壇から庭の老松よく見える  
一念を通せば高い塔になる  
めん鳥が先頭を行く新世紀  
月一度心洗いに孫が来る  
花の名を尋ねた日からお友達  
イヤリング私にルビを打つように  
糖尿病になっただるまを知っている  
気を抜くとすぐに沈んでゆく住所  
三日月に迷いはヒヨイと掛けておく  
老いのこと話すと孫のやさしい瞳  
自画像を描くには少し若すぎる  
本日の機嫌とこころにより曇り

|      |      |      |      |      |      |      |      |
|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 和歌山市 | 和歌山市 | 八尾市  | 川崎市  | 和歌山市 | 弘前市  | 和歌山市 | 和歌山市 |
| 米子市  | 京都府  | 岸和田市 | 八尾市  | 和歌山市 | 玉置   | 小枝   | 福本   |
| 山坂   | 小西   | 岩佐   | 高杉   | 和泉   | 玉置   | 小枝   | 福本   |
| 播本   | 山坂   | 野坂   | 山坂   | 山坂   | 山坂   | 山坂   | 山坂   |
| 酒井   | 井本   | 井本   | 井本   | 井本   | 井本   | 井本   | 井本   |
| 吉田   | 吉田   | 吉田   | 吉田   | 吉田   | 吉田   | 吉田   | 吉田   |
| 吹田市  | 吹田市  | 吹田市  | 吹田市  | 吹田市  | 吹田市  | 吹田市  | 吹田市  |
| 米子市  | 米子市  | 米子市  | 米子市  | 米子市  | 米子市  | 米子市  | 米子市  |
| 八尾市  | 八尾市  | 八尾市  | 八尾市  | 八尾市  | 八尾市  | 八尾市  | 八尾市  |
| 西宮市  | 西宮市  | 西宮市  | 西宮市  | 西宮市  | 西宮市  | 西宮市  | 西宮市  |
| 奥田   | 奥田   | 奥田   | 奥田   | 奥田   | 奥田   | 奥田   | 奥田   |
| 高橋   | 高橋   | 高橋   | 高橋   | 高橋   | 高橋   | 高橋   | 高橋   |
| 牛尾   | 牛尾   | 牛尾   | 牛尾   | 牛尾   | 牛尾   | 牛尾   | 牛尾   |
| 和歌山市 | 和歌山市 | 和歌山市 | 和歌山市 | 和歌山市 | 和歌山市 | 和歌山市 | 和歌山市 |
| 朱夏   | 朱夏   | 朱夏   | 朱夏   | 朱夏   | 朱夏   | 朱夏   | 朱夏   |
| 良花   | 良花   | 良花   | 良花   | 良花   | 良花   | 良花   | 良花   |
| みつ子  | みつ子  | みつ子  | みつ子  | みつ子  | みつ子  | みつ子  | みつ子  |
| 千代   | 千代   | 千代   | 千代   | 千代   | 千代   | 千代   | 千代   |
| 亜弥   | 亜弥   | 亜弥   | 亜弥   | 亜弥   | 亜弥   | 亜弥   | 亜弥   |
| 希久子  | 希久子  | 希久子  | 希久子  | 希久子  | 希久子  | 希久子  | 希久子  |
| あずき  | あずき  | あずき  | あずき  | あずき  | あずき  | あずき  | あずき  |
| 勇太郎  | 勇太郎  | 勇太郎  | 勇太郎  | 勇太郎  | 勇太郎  | 勇太郎  | 勇太郎  |
| 充子   | 充子   | 充子   | 充子   | 充子   | 充子   | 充子   | 充子   |
| 高夫   | 高夫   | 高夫   | 高夫   | 高夫   | 高夫   | 高夫   | 高夫   |
| なみ   | なみ   | なみ   | なみ   | なみ   | なみ   | なみ   | なみ   |
| 未佐子  | 未佐子  | 未佐子  | 未佐子  | 未佐子  | 未佐子  | 未佐子  | 未佐子  |
| ダン吉  | ダン吉  | ダン吉  | ダン吉  | ダン吉  | ダン吉  | ダン吉  | ダン吉  |
| 千歩   | 千歩   | 千歩   | 千歩   | 千歩   | 千歩   | 千歩   | 千歩   |
| あかり  | あかり  | あかり  | あかり  | あかり  | あかり  | あかり  | あかり  |
| 当代   | 当代   | 当代   | 当代   | 当代   | 当代   | 当代   | 当代   |
| ふさ   | ふさ   | ふさ   | ふさ   | ふさ   | ふさ   | ふさ   | ふさ   |
| 英子   | 英子   | 英子   | 英子   | 英子   | 英子   | 英子   | 英子   |

相田みつを読んで人生観変わる  
 いい嫁を当てたと思う喜寿の春  
 花の名を浮べて花の香に嘯ぶ  
 煩惱があとからあとへ伝さま  
 最後には怨んだ神に辿りつく  
 帯きゅつと締めて写経の墨を擦る  
 綾取りの川から川へ母の橋  
 病む身にも心新たに二千年  
 雨に打たれた舗道から夜が明けてくる  
 目の位置を変えてしあわせ噛みしめる  
 なだめ役叱る役目も居て丸い  
 おめでたい話に時間忘れてる  
 貝殻の風鈴が呼ぶ那覇の風  
 倒木が居坐っている僕の部屋  
 小さいが充分人を刺す野薔薇  
 おだんごも芒も母も見えますか  
 悪友の肩もときどき頼もしい  
 真心のこもることばの礼でよい  
 平凡にならないように朱を入れる

|      |     |     |     |
|------|-----|-----|-----|
| 八尾市  | 八尾市 | 宮西  | 弥生  |
| 大阪市  | 鈴木  | 木   | トヨ子 |
| 岡山市  | 川端  | 柳子  |     |
| 尼崎市  | 長浜  | 澄子  |     |
| 宝塚市  | 嵯峨根 | 保子  |     |
| 京都市  | 山海  | 友熙  |     |
| 羽曳野市 | 吉川  | 寿美  |     |
| 堺市   | 黒田  | 真砂  |     |
| 寝屋川市 | 柴田  | 英壬子 |     |
| 鳥取県  | 奥谷  | 彩子  |     |
| 大阪市  | 川内  | 叭笑  |     |
| 松江市  | 恒松  | 町紅  |     |
| 八尾市  | 神原  | まさと |     |
| 米子市  | 林   | 荒介  |     |
| 岸和田市 | 高須賀 | 金太  |     |
| 米子市  | 茂理  | 高代  |     |
| 弘前市  | 相馬  | 銀波  |     |
| 枚方市  | 前   | たもつ |     |
| 大阪市  | 川久保 | 睦子  |     |

ふる里へ少し背伸びをして帰り  
 逆立ちをすれば許せる罪がある  
 水打った玉砂利凜と客を待ち  
 いそがねば自分史飾る砂時計  
 艶やかな上がり框で親子孫  
 紫で飾ってほしい花時計  
 どか雪で追伸は届かぬらしい  
 土砂降りのときも心に虹を持ち  
 寒色も暖色もあり私の絵がつづく  
 わたくしを守る小さな水甕で  
 人生へ知らないこともあつていい  
 雨よ降れふれふれ明日晴れるよう  
 ライバルの足の長さに負けました  
 登園拒否ベッドの中に雨が降る  
 この人も主役になれず冷奴  
 わたくしの声が横断幕になる  
 さわやかに日の丸揚げる日本晴れ  
 ジャンケンポンポンで一步が踏み出せる  
 言い分けをしないと決めて男去る

|     |     |     |     |    |      |     |     |      |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|----|------|-----|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 池田市 | 芦屋市 | 鳥取県 | 鳥取市 | 堺市 | 和歌山市 | 出雲市 | 鳥取市 | 羽曳野市 | 米子市 | 大阪市 | 大阪市 | 弘前市 | 桜井市 | 出雲市 | 倉敷市 | 大阪市 | 弘前市 | 高知市 |
| 岡本  | 黒田  | 上田  | 上田  | 志田 | 榎原   | 吉岡  | 小林  | 酒井   | 政岡  | 神夏磯 | 本間  | 佐治  | 河合  | 板垣  | 小野  | 鶴田  | 小寺  | 川竹  |
| 吉太郎 | 能子  | 俊路  | 宣子  | 千代 | 公子   | きみえ | 由多香 | 一壺   | 日枝子 | 典子  | 満津子 | 千加子 | 茂雄  | 草丘  | 克枝  | 遠野  | 花峯  | 松風  |

叙勲うれし教育一途こつこつと  
 東京タワーのてっぺんで見る我が手相  
 自意識過剰あしたの夢へ色添える  
 子育てを終えて余生の介護論  
 仏法僧三者三様道一つ  
 かるくかるく翔んでゆこうよ風媒花  
 億光年の星またたいて命知る  
 路地裏を上手に抜ける千鳥足  
 傾いたままで世紀末が走る  
 人の世に馬鹿と言われるむつかしさ  
 ナースだけ若い待合室の風  
 ひたすらに虹の真下に向いてゆく  
 寝る楽を知って親父の齢となり  
 キャンパスは空無限の雲の名画展  
 仲直りちようどみかんが二つある  
 お日さまと生きる約束して続く  
 おこって泣いてそして笑って眠らんか  
 背伸びしたツケどっさりと世紀末  
 雪の音を聴くもまたよし冬籠り

|     |    |      |      |      |     |     |     |     |     |      |     |      |     |     |      |      |     |     |
|-----|----|------|------|------|-----|-----|-----|-----|-----|------|-----|------|-----|-----|------|------|-----|-----|
| 弘前市 | 堺市 | 藤井寺市 | 藤井寺市 | 藤井寺市 | 神戸市 | 出雲市 | 米子市 | 熊本県 | 八尾市 | 羽曳野市 | 西宮市 | 岸和田市 | 出雲市 | 出雲市 | 和歌山市 | 泉佐野市 | 米子市 | 弘前市 |
| 今   | 河内 | 高田   | 楠    | 太田   | 木村  | 竹治  | 中井  | 高野  | 高杉  | 徳山   | 長谷川 | 長谷川  | 石倉  | 久谷  | 山口   | 阿萬   | 澤田  | 櫻庭  |
| 愁女  | 月子 | 美代子  | 昭子   | 扶美代  | 貴代子 | ちかし | ゆき  | 宵草  | 鬼遊  | みつこ  | 淳   | 呂万   | 芙佐子 | まこと | 三千子  | 萬的   | 千春  | 順風  |

戦争に敗けた話は泡にせぬ  
 たっぷりと白粉塗った国である  
 衣替え早速街に見せに行く  
 駅一つ閉じて津軽に雪が降る  
 友在りて温い包みがやって来る  
 花になり実になり踊り抜く系譜  
 仲間いっぱい集めて笑いあえる城  
 春風に水のアート館がひらく  
 雑草の光り輝く自己主張  
 海に出た落葉ゆらりと旅支度  
 しまなみ海道今治は招呼の間  
 芝居小屋建てようわたくしの空き地  
 私を洗えば涙だけのこる  
 コンピューター様に社長も叱られる  
 敵ですか味方ですかと聞く愚か  
 水くぐりほむら潜っている肋  
 凄んでるようには見えぬ丸い顔  
 ふるさとを踏めば七つの子に戻る  
 踏切りの向こうに春の顔並ぶ

|     |     |      |      |     |     |     |      |      |    |     |     |     |     |     |     |     |     |     |
|-----|-----|------|------|-----|-----|-----|------|------|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 八尾市 | 大阪府 | 羽曳野市 | 和歌山市 | 大阪市 | 弘前市 | 岡山市 | 和歌山市 | 寝屋川市 | 堺市 | 吹田市 | 鳥取県 | 鳥取県 | 鳥取県 | 鳥取県 | 青森県 | 横浜市 | 鳥取県 | 鳥取県 |
| 吉村  | 榑山  | 西村   | 福井   | 小糸  | 高瀬  | 富坂  | 古久保  | 富山   | 板尾 | 瀬戸  | 吉田  | 中原  | 中原  | 中原  | 西谷  | 山下  | 谷口  | 土橋  |
| 一風  | 隆盛  | りつえ  | 桂香   | 昭子  | 霜石  | 志重  | 和子   | ルイ子  | 岳人 | まさよ | 孔美子 | みさ子 | 颯人  | 汲香  | 大吾  | 省子  | 次男  | はるお |



二〇〇〇年挑む傘寿の意気高し  
留守だった窓に赤ちゃん連れた顔  
頂上で一息ついただけの事  
酸欠の街です重い重い息  
木も子にもどんな芽が出る花が咲く  
ほん少し愛をください鈴鳴らす  
父と子を染める夕日の肩ぐるま  
鉄棒でクルリ子供の小宇宙  
ルールなどないが上座に父が居る  
曾孫抱きいずれ抱かれる夢を見る  
れんげ草弥陀のふところ恋しがり  
鮮血のしたには白い白い骨  
亡母の服しつかり虫が喰っていた  
傘寿なり肩の力は抜きました  
妖精のわたし舞い込むガレの壺  
自我捨てたわたしの殻の行方とは  
目標があるから一人で生きられる  
古希のり越える 先ず手はじめの赤い靴  
釉薬みたいにパックしてる妻

|    |     |     |     |     |     |     |     |      |     |     |      |     |      |     |      |     |      |     |
|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|-----|-----|------|-----|------|-----|------|-----|------|-----|
| 堺市 | 富山市 | 高知県 | 西宮市 | 西宮市 | 西宮市 | 鳥取市 | 鳥取市 | 藤井寺市 | 大阪市 | 尼崎市 | 東大阪市 | 香芝市 | 東大阪市 | 大阪市 | 富田林市 | 岡山県 | 東大阪市 | 大阪市 |
| 河内 | 舟渡  | 赤川  | 林岡  | 亀岡  | 秋元  | 宮木  | 坂田  | 鴨谷   | 上江  | 田辺  | 北村   | 大内  | 森下   | 川原  | 池本   | 山本  | 安永   | 西田  |
| 天笑 | 杏花  | 菊野  | はつ絵 | 哲子  | てる  | 一夫  | 和歌子 | 瑠美子  | 勝子  | 鹿太  | 賢子   | 朝子  | 愛論   | 章久  | 森子   | 玉恵  | 春    | 柳宏子 |

(各書の内容見本進呈)



# 川柳表現辞典

田口麦彦著・46判上製箱入  
税込価三五七〇円送料340円

四年間の歳月を費して、現代川柳三〇万句より六九二七句を選び、一五四二語の項目、解説内の八三九語をあげて、語の意味、難解な言葉、新語等を説明。実作例句で川柳表現の方法と技術を示した。

# 川柳技法入門

田口麦彦著・川柳の作り方  
定価(税込)一八三五円送料310円

川柳上達の技術を九二五句の引例で分りやすく説明。添削・推敲は一句の完成まで、風刺・ユーモア・リズム・比喩・イメージ形成等

# 時事川柳入門

田口麦彦著・基本と方法と技法  
定価(税込)一八三五円送料310円

現在を17音で切りとる諧謔精神と作り方の方法・技術を説明。新聞雑誌投稿句、サラリーマン川柳の即興性など引例九三三句で解明。

# 現代川柳入門

田口麦彦著・実作教室、慶弔句  
定価(税込)一九八〇円送料310円

川柳の基本から作句の心構え、自由に人間と社会を詠む方法を現代の言葉で現代的に例句をあげて説明。全力で書きおろした入門書。

# 川柳の書き方

松橋巨山著・川柳書マニユアル  
定価(税込)三八七三円送料340円

はじめて筆を持つ人から、中級の技術まで修得。自由に色紙・短冊・扇面・団扇・掛け軸が書ける。一七〇の手本と図表、下敷き六枚付

## 直原七面山

東野 大八

「七面山さんは、故丸山弓削平、故黒田笑泉氏らと農村の文化運動を進められる中で、川柳を学ばれたようです。そして昭和二十四年弓削川柳社の創立にこぎつけられたのですが、私が入会した頃には、すでに川柳雑誌社の不朽洞会員としてすばらしい活躍をしておられました。

警察署勤務という固いお仕事にかかわらず、「肉体川柳」を標榜、女の性を中心に作品を発表しておられました。川柳雑誌の誌上でも何回か話題になるなど、特異な存在だったのです。また「川柳製造機」の異名を持つなどの多作家で、相撲吟では一分間に二句も三句も吐き出すなどア然とさせられたものでした。氏は信念の人でもありました。齒に衣を着せることを知らない能弁家でもありました。

麻生路郎先生の絶対崇拜者で、弓削川柳社が川柳雑誌社支部問題で揺れ動いたことがありますが、あの時の恐ろしいまでの形相と能弁は、今でも鮮明に残っています。椅子を蹴って袂をわかし、川柳弓削支部の旗を別に掲げられたことは言うまでもありません。反面選者の哲学「川柳選別機論」は、ユーモアを交えて楽しく語られました。今この話を反芻してみても、うなずかされるお考えでありました。

詩は短いほど感動を与えるという七面山さんは、昭和四十三年発行の合同句集の中で、「素裸にされて邪恋の夢が覚め」の一句から私の川柳生活は始まった。そして「片手あずけて甘き囁き」の七七の世界に進み、今また「旅費は女将が持った旅」の七五の句に挑戦

を試みている。この七五の句が完全に征服でき、柳友諸氏になんの抵抗もなく受け入れて頂く時代が来た時、私は日本川柳界初めての七五調の句のみによる句集を編み、世に問いたいと思っている——夢を膨らましておられました。最も尊敬しておられた麻生路郎先生のご逝去、七五調への無理な挑戦は、お心と裏腹に夢からも川柳からも次第に距離を広げられていかれたようです。(川柳塔平成八年八月刊『濱野奇童悼文抄録』)

七面山は明治45年4月6日和歌山県生れで本名直原信春。「川柳雑誌」誌の常連寄稿家で筆者とも誌上では顔なじみ。昭和36年7月号の「川柳雑誌」特集「わが天職の句」にこんな七面山稿が載っている。

刑務所の庭にも桜咲きは咲き  
機死体の右手に残る子の土産  
公判廷キッスの数に念を押し  
パトロールの靴春泥を踏んでゆき  
どなられて初犯の男泥を吐き  
死刑囚花火の音に過去を追  
刑事今日釣竿持つて仕事に出  
三千円盗むに家内中殺し  
犯人の足が故郷を踏みたがり

直接犯罪者や容疑者に接するわけではないが、私の机の上の書類は強盗・殺人・強姦・

放火・スリ・売淫・無理心中の生々しい犯行と目を覆うばかりの現場の有様をそのまま記録したもののばかりで、県内の出来ことは勿論、全国各地で発生したすべての犯罪の手配が、時々刻々と私の目の前に晒され流されていく。だから明るく楽しい職場などということとはとても言えない。

よそ目には、そんな職場だから、さぞかし川柳の素材が山ほど転っていて、面白い句がポコポコできるだろうと思われるが、実のところそんな思い通りにはならないのだ。

いわば丁度、外科のお医者さんが、腕の折れた患者を診るようなもので、やれ強盗だ、やれ殺人事件だといってみても、それはもう日常茶飯事のこと、よほど特異なケースのものでない限り、なんの感動も関心も起きないのである。

だからこれを機に『罪の世界を深く掘り下げ、犯罪者の心理を深く見極め』というふうな色々と考え中である。

前記の濱野奇童氏の稿に、はじめにこんなことが書かれている。

「七面山氏は、周囲を羨しがらせるおしどり夫婦でありました。ところが最愛の奥様が若くして寝たきりの状態を強いられてから大変な苦労をなさったようです。お子さんは

在京、七面山さん御自身も体調を崩されるなどして、お二人とも老人ホームに身を預けられました。私も数回お訪ねしましたが、あれほど情熱を燃やしておられた柳論を交わすこともなく、静かな余生に満足しておられるように見受けられたが、平成八年六月一日急逝された。享年85歳だった」

筆者はこの面白い柳書を持つ七面山なる人物の川雑誌上の柳文をいつも面白く拝見していたが、なぜこのような変わった柳書を持ち、その肩書も地方の警察署長あたりと推定してノホホンと過していた次第だけに、その死去はショックだった。

『川柳雑誌』昭和33年12月刊の『胃袋拝見』の特集号で、壮年期の彼の次のようなエッセイが残されている。

「鯛の刺身といたいところですが、いつも変らぬお新香の切り身、この他にはサバの煮付けとコンニャクの味噌煮あえ、これではどうヒイキ目に見ても肉体川柳で艶名を天下に馳せた直原七面山先生の御夕食にしてはオソマツすぎる気がします」

皿にはパンが二個あって一つはジャムで、一つはコッペパンの半切れ、ジャムの方は妻湖月君が、勤務先の保育園から、幼女に配ってあったものを買いつけてきたものである。

半切れの方は、小学四年生の女の子が、学校の給食パンが美味しくないの、先生にわからぬように素早くそれをハンカチに包んで持って帰ったものである。

茶わんには米麦混合の御飯が山盛り、別的小皿に食後の果物のつもりであろいういちじくが三つほどつけてある。これらを十分ほどで胃袋に詰め込んで、いよいよ出勤である。国民皆様の公僕としての勤めがいよいよはじまるのである。

こんなおソマツな朝食で果してお役目が果たせるのか心許ないが、まずは敗戦十年後の戦後事情の生活、こんな貧しいカロリーでは……と自分の給料の勘定を頭に入れて、これが分相応と心得、タッタカタッタカと歩いて出かける」

人柄のよく出たエッセイが快い。詩は短きをもつてよしとする。という西欧詩人のモチーフを見習って『七五の句』の創設に情熱を燃やした七面山なる妙な名前の川柳人を同じ歳ごろの筆者は今も心懐かしく思えてならないのである。終りに彼の作句二句

灯を消せば君もグリアも闇の底 七面山  
浅学非才がたつぷり一時間の詞辞 //

▼次号は「工藤 安亭」

# 誹風柳多留二四篇研究

13

伊吹和男・大野秀二  
小栗清吾・橋本秀信  
粕谷長生・山田昭夫

清 博美・佐藤 要人

89 かげ膳をすへてる所コへ武田寄せ

伊吹 山本勘助による「啄木の戦法」で夜襲をかけるため、武田軍はしきりに炊煙を立ち上らせた。その炊煙に信玄の詭計を看破した上杉軍もただちに出陣の準備を始めた。彼らの軍法では一人で三人の食事を支度すること

この一人で三人の食事を支度することを陰膳に見立て、その支度を終えたところへ武田軍が近づいた、というのではあるまいか。

追焚を見てけんしんハ小うなつき 一三三

小栗 「川中島」に賛。但し「陰膳」(旅行などで不在の人が飢えないように祈って、留守宅でその人のために供える食事『日国』)にこだわって、上杉軍が夜襲を看破し、妻女山を脱けて八幡原に忍び寄ったのを知らずに、

武田の別働隊が妻女山の留守の陣を襲った時の光景ではないかと思う。

橋本 小栗説賛。武田の動きを察知して妻女山の陣を動いた上杉勢。そのもぬけの空の陣のことを「陰膳」にたとえた。礎の「支度を終えたところへ武田軍」ではつじつまが合わない。上杉軍は「鞭声肅々夜河ヲ渡」っているのである。

清 同。

佐藤 小栗・橋本説納得。

90 うしろの子前へ廻すがり上手

伊吹 正確には「背中の子」であるが、前に対しての後で「後の子」としたのであろう。

要するに、子供を背負って、寝かしつける

のが上手な子守である。少しあやしたただけですぐに眠らせ、前に廻して抱き上げ布団に寝かせる、子守上手なのである。

ねんねこの腰は左右へ少シふり

三 8

清・佐藤 賛。

91 けちな窓四角に壁をぬり残シ

伊吹 まさにしみたれた窓で、障子もなければ棧もなく、ただ壁を四角く塗り残して穴をあけてあるだけ。矢狭間や臆病窓のようなものも含むのであろうか。

清・佐藤 賛。

92 きつい邪尸そどくのとより引たてる

伊吹 素説は書物の意味を考えずにただ文字を声を出して読むこと。

主題句は、門下生が素説をしている隣で、やかましく雑談している者を、素説の師匠が邪魔になるので引き立てるところか。

そどくとぶんごととなり同士べらぼうめ

三〇 32

大野 「引きたてる」は「弾きたてる」で、三味線をいうのではないか。

勉強しているとなりで音曲をやられては邪

魔だらう。

又せがきうせたと芸子ひきたてる

六二六

清 大野説賛。

佐藤 同。隣家は三味線師匠。

93 木がらしの時分持仏ハ花さかり

伊吹 日蓮上人が武州池上で入寂の際、満山諸木に花が咲いたという。その故事により、毎年十月八日から十二日までの御会式には、

造花の桜を仏壇などに飾る。そこで、木枯しの吹く季節ではあるが、日蓮宗の信者の持仏は桜の造花で花盛りである、というのである。

小春月吉野、桜妙にさき

一二丙二

小栗 賛。池上本門寺には、十月頃に花の咲く「御会式桜」がある。

橋本 礎賛。会式桜は『東都歳事記』に絵があり、「谷中領玄寺にありて、十月に花咲く

（中略）池上本門寺にも是に等しき桜ありて」とあるが、

手折木ハ朽て会式の桜狩

百合の華 14

のように枯木であるので、この桜の枝を飾ることは無理。そこで「十月八日、法華宗寺院、

御影供法会、（中略）法会の間、一宗の寺院仏壇をかゝやかし、造花を挿し、莊嚴目を驚

かしむ」（『東都歳事記』）を指すと思ふ。

清・佐藤 同。

94 万ざいの跡で氣のないかまはらい

伊吹 万歳がやって来て一家中を大笑の渦に巻き込んで沸かしに沸かして帰った。その後に龍祓が来た。家の者も龍祓も、龍祓の行事に對して、氣が乗らないと言うか、氣の抜けたような状態である。

めしたきのうやまつて聞クかま払 三九

清 賛。

佐藤 東京古川柳研究会で、

はじまると姫のにげ込む釜はらひ

明三桜4の句に、釜はらひも、万歳と同じく、ばれをいうとあり。嫁の逃げこむ理由もここにありとの解であった。強烈なバレの後では、釜ひのバレは氣が抜けたようなもの

だとの句が本句である、と小生は思っている。石川一郎氏の『江戸文学俗信辞典』に、この

句に註して、「三宝荒神、右の足が金剛界、左の足が胎藏界、中の足がぶらり界などとバレをいう」とある。出典は不明だが、この説を信用したい。

95 姫が出て発句をみんな哥にする

伊吹 嫁が参加するまでは、何かと滞りの多かった歌ガルタ。いざその場に嫁が出て行くやいなや、まさに快刀乱麻を断つ勢いで、五七五と七七をくつつけて、次から次へと歌にして行く。

ちぎれた哥を花嫁ハくつ付る 一四四

清・佐藤 賛。

96 よの客がきつハリ切れて乳チが出る

伊吹 遊女の意志が、遊女の色である特定の男の希望か、その他の客が嫌気がさしたのか、遊女が特定の男としか枕を共にしなくなったら、その遊女が妊娠してしまったというのである。

ためしすくなき川竹の乳をしほり 六六二〇

清・佐藤 賛。

97 目をばちくでさそひ出す憎いこと

伊吹 悪友による遊里への誘い。まばたきをするだけで以心伝心、息子が悪いのではなく、息子の友達が悪い。母親にとっては、誘い出すその友達が憎いこととなる。

秘事ハまつ毛を動かしてそびき出し 龍三五

清・佐藤 賛。

# 秀句鑑賞

同人吟 宮口笛生

—12月号から—

主幹の選に入った秀句揃いの一九五五句の

中よりの秀句鑑賞。それはそれはむずかしい。どれも秀句の中より、私なりに私の好みに合った好きな句を、列記鑑賞をさせていただきました。作者の句意に合わなかった時はお許しを願いたい。

可愛い子囀に連れて聖書売り

武田 帆雀

「宏正」とか、「めざめ」と言う聖書めいた月刊の小誌を、幼子連れ夫婦人連が、各家庭に勧めに回っている団体がある。一つの宗教の信者であると思うが、同情を得るためわざと小さな子供を連れている。子供を囀に使っているとは言い過ぎかも知れぬが、そう見られてもいたし方ない。

野球帽父子の距離が近くなる

高瀬 霜石

野球好きの父子の絆が、キャッチボールでしっかり築きあげられている。楽しく明るい光景が、父子の「距離が近くなる」に、ありありと写し出されている。

波風の起きない程度馬鹿になる

大橋 政良

一言を返すと、一波乱間違ひなし。波風を立てた処で何の役にも立たぬ。此処はひとつ馬鹿になっているのが利口というもの。辛抱辛抱。

釣竿が帰り刺身になるお酒

須郷 井蛙

今日の収穫は上々。早速刺身にしての夕食。お酒もうまいと言つもの。仲間入りさせていたきたいですね。釣竿が帰るとはうまい表現だと思ふ。

綱引きに親が子供にかえる顔

八田 敏

秋の運動会。父兄による楽しい綱引き。一生懸命の風景が目につかぶ。子供にかえる顔が面白い。

わたくしの真似をしている影法師

玉置 当代

その通り、真似をしているから影法師である。当前のことだが着眼点の良さを買う。

病人によく効く嘘を置いて行く

太田 扶美代

お見舞の様子をうまくかもし出していると思う。病人によく効く嘘とはうまくまとめている。嘘で病人を安心させる言葉を置いて別れる。ほんとうに此の句の通りである。一日も早い快癒を祈るのみである。

相席をするなら美しいひと

高田 美代子

それは美人にこしたことはない。欲だろつか、男冥利に尽きるといふもの。楽しいですね。そわそわしている様子まで見えるようである。思うだけでも楽しくしてくれ。

愕然とひとりになった夢を見る

玉置 重人

最愛の夫、又は妻を亡くし、その何とも言えない寂しさに、沈んで居られる人も多々あると思うが、重人さん夢で良かったですね。愕然がまさしく寂しさを突きさしている。

自分史のところどころに立ち泳ぎ

海老池 洋

永い人生の自分史を振り返るとき、何の障害もなく行く人は無いだろう。行き止まったこともしばしば。ところどころに立ち泳ぎとは、いい言葉を持って来たものと感心させられる。立ち泳ぎがよく効いている。

そと孫のかたこと言っている受話器

島 ひかる

娘との電話に、ばあちゃんと言う可愛いかたことが聞こえてくる。大きくなったね。正月には帰っておいでと、うれしいおばあちゃんの笑顔が伝わってくる。

雨女だけが用意の傘をさし

菱 田 満 秋

天気男に雨女、折角の楽しい旅も雨に降られ、傘持参の雨女に負けてがっかり。こんな苦じやなかったのに。

鉛筆はすたれシャーペン ボールペン

木 村 貴代子

私ところの小学生の孫の筆入れにも、鉛筆のかわりにシャーペン、ボールペンが入っている。学校で先生に、鉛筆使いなさいと言われるらしいが、シャーペンを使っているらしい。これも時代の流れと言ふもの。

恐ろしい空気を吸っている文化

太 田 とし子

今世間でやかましく言われているゲイオキシ。ふえ続ける車の排気ガス。安心して空気が吸えない。発展を続ける文明文化の忘れ形見と言おうか、放置され放しではたまったものでない。思えばほんとうに恐ろしいことである。地球にやさしくを忘れないように。

運転手ひとりのバスが来て止まる

森 茂 美

赤字をかかえての田舎バス。一時間か二時間一回、利用客が少ないが、村の足として廃止は出来ない。誰も乗っていないバスの様子を、運転手ひとりとうまく捕えている。

仏さま新米炊けましたどうぞ

吉 岡 きみえ

今年も豊作でした。炊いた新米を第一に仏壇へお供えして、御先祖様にお礼を言っている。優しい心が良く出ている。

村外れ兵を送った橋も朽ち

最 上 和 枝

戦時中小さな村からも応召兵が行った。村外れの橋まで送った思い出がある。今では新道も出来て、あの時の橋も朽ちたまま。何もかも古い昔話になりつつある。戦争の苦しさを知った人も、だんだん少なくなっていく。今の平和を願うのみである。

可も不可もなくてゆっくり除夜の鐘

井 上 勝 視

除夜の鐘を聞きながら、今年一年を振り返るとき、冷え切ったどん底の景気の中で、可も不可もなく、まあまあ年だったと自負している。来る年の幸せを願うのみである。来年こそは良い年でありますように。

何かある何でもないと言うときは

三 宅 保 州

妻の六感の働きがヒーンと来ている。あまり心配をかけないように。悩みごとなら打ちあけて共に解決して見たら。

タダ酒を呑んで吐いている怪気炎

谷 口 義 男

タダ酒となると、とことん呑んで偉そうな気炎を吐いている人がいる。酒のみのいやしさと言おうか。よく見かけることである。私も酒好きで、タダ酒もいただが慎んでいる。酒のみのいやしさがよく出ている。

ボランティア少しお年を召している

細 川 稚 代

若い娘を想像していたのに。お年寄りでがっかり。でもそんな贅沢は言わないで、年はとつても一生懸命です。有難うと言いましよう。

いっぺんに死ぬと霊柩車が足りぬ

川 上 大 輪

霊柩車どころか、火葬場も足りぬ。阪神淡路大震災をはじめ、今年になってトルコ、台湾の大地震。いっぺんに多くの犠牲者が出ている。地震国日本、またなんどき起きるかも知れぬ。ナンセンスでは片付けられない深刻さが含まれている。



昭和十二年の『川柳雑誌』新春特集号は、本欄の先号に掲載した路郎先生の句、

友達に別れた時がお元日

元日も二階 二日三日も二階に居

などの不朽句稿から始まる。

恒例の「日本柳壇百人撰」の諸家の自選には佳句が少ない。一九三六年の金字塔という副タイトルは立派だが、やはり自選の甘さはベテラン作家にも当てはまるもののようだ。

一萬円フンと言って草に寝る

麻生 路郎  
昼の風呂いつそあひるで居りましょか

麻生 苧乃  
増税の風におのく生命の灯  
井上 信子  
子の後姿見倦かず湯吞持つ  
川上三太郎  
第五号外大阪は雪となり  
岸本 水府  
饒舌のあとさびしき家に着く

小川 舟人  
借りる判貸す判代書見較べる  
大野 琴莊  
ひとりを愛す麝香撫子も白  
清水 米花  
新緑は木魚の音がするばかり  
須崎 豆秋

老眼鏡をはずしても子の馴染まない

高島玉兎朗

うつくしい魚が二匹そんな恋

山本 丹路  
岸本水府の句は二・二六事件の日の号外で、

翌年のこの年、七月に盧溝橋事変が勃発した。

エッセイは福田山雨楼の「川柳十徳」が、

まとまった読物で副主幹らしいスタートを切る。次にその全文を紹介する。

菊池寛氏がかつて大阪で某新聞社主催の文芸講演会で「文学に親しめばこんな得がある」と言う意味の演題で語られた事がある。もう十年も前のことであるが、僕もこれを聞いて珍らしい文学観として未だに記憶している。

尤も同氏の話は「文学―主として小説―には文学の使命と意義があるので、これに親しめば得をすると言ったような功利的な考えから文学をやるべきものではないが、実際に得をする点が多い事も考えていて貰いたい」と暗に阪神商工都市市民の文学的関心を喚起することに努められた話だったと思う。菊池氏の説かれた文学の功利観中には色々の点をあげ

られたが、僕が今記憶している限りでは世態人情に長け、生きた人間の学問が出来ると言うことと、自分自身を省察、分解する力と叡智とが増えるという点であったように思う。

川柳の場合でもこれと同様の事が考えられるのであって、川柳を作り、川柳を味わい、川柳を研究することも、功利的な意味から始めるべきではないが、真の川柳を知っていることによって、得をする事は決して少くないのである。

次にその得をする点を十項目許り掲げて見たが、まだこの外にも沢山ある。そんなに得になる川柳なら一つやって見ようと言う様な奇特な方が一人でも沢山現われることを、心ある川柳家は待ち構えているのである。そして先ず新年から川柳を始めて貰うならば、これは所謂百年の計となって必ずや大成せられるに相違ない。

# (一) ユーモアがわかる

英国あたりではユーモアのわからぬ男は紳士ではないと造言われているそうだが、ユーモアを解することは馬鹿話の間からは仲々得られない。腹の中からこみ上げて来るようなユーモアの味、それは川柳のみが持つ特権だとは言わぬが、川柳も亦預つて力がある。

秋風の中で乞食に拌まれる 豆秋

## (二) 人間愛を深める

人類愛と言つてもいい。光つた川柳は必ず人間味が滲み出ている。貧しきもの、無智なもの、弱きもの、病めるものを見ても、そこに美と真実とを見出すのが川柳である。人間が人間を愛する至情の表白こそは川柳の生命である。よき友達の生れることも請合である。

俺に似よ俺に似るなと子を思い 路郎

## (三) 自然に親しめる

自然を詠う短詩には俳句が代表的なものであるが、川柳もまたこの烟に風馬牛でいるものではない。川柳独自の観察と角度から、自然の風情を探っている。

君見給え蒨葎草がのびている 路郎

## (四) 観察が鋭敏になる

「川柳は睨む」と言われるだけあって川柳をやっているうちには、生れつき俊敏でないものでも相当な眼の持主となることが出来る。心の働く素地が作られる。物を見る眼をゆるがせにしなくなる。

大晦日上唇が乾ききり

鮎美

## (五) 機智に富む

目から鼻へ抜けるような小賢しさは時に嫌味を覚えさせることもあるが、人間機智に富むことは望ましい。川柳の上乗なるものは、よくこの機智を働かして三嘆これ久しうせし

める。川柳をしていれば自分も機智に恵まれてくるのは不思議であると言えは不思議だ。

逆とんぼ打って社長を出迎える 杏三

## (六) 心にゆとりが出る

今日のような経済機構と社会思潮の渦中にあつては、大抵の人はせつがちで神経質で、理屈っぽく、愚痴っぽく青白くなるばかりである。だまされれると思つて明日からでも川柳を始めて見るならば、妙に心の余裕が出来て昨日と違つた世界を見出し、一服の煙草にも変つた味を求め得るであらう。少くとも釣りに行く以上の効果はきつとある。

元日だせめて眼鏡を拭きましよう 路郎

## (七) 不平不満が緩和される

如何に不平のあるときでもじつと心を静め、一句をものして見ると今迄余りに興奮していたことに気付き、腹の固まりが解けてくる。不満が緩和されると言うより、悟りが開けてくると言つた方が当っているかも知れない。

初婚には限らぬと言う年になり 正光

## (八) ロマンチストになれる

句を作り、句を詠み且つ味ふことの楽しみ、快さに慣れるに従つて、川柳作家は知らず知らず文学の母胎であるところのロマンチストになつてくる。小説を読んで泣く女のように甘くはないにしても、句境と情緒に浸り、感

傷を汲むことが出来るであらう。

牡丹雪はらく旅にいる心

葎乃

## (九) 世間が広くなる

川柳作家には職業、年齢、素養、性格、経験、習性、趣味等々あらゆる種別の、そして広範囲の階級人を集めている。川柳の精神がまた集めようとしている。また川柳に詠まれる対象が社会百般の人事葛藤に重きをおかれているので、これに親しむことで常に接触している世間の表裏にも触れることが出来る。

葬式の人夫で食える道もあり 白蝶

## (十) 作品が残る

これは極めて当り前の言葉で、五銭で三銭切手を買えば二銭残る、と言うのと同じことのようにあるが、その相違を発見するのには川柳をやるに限る。釣銭は使えばすぐになくなるが、文字に残した作品は嫌が応でも後年に残るのである。しかもその作品が光つたものであればあるほど句の永遠性があるのだ。

そして川柳は他の文芸作品に比較して短い詩型であるから手軽に句を残すことが出来る。作品が残るところに文学の尊さがあり、これに携わるものの悦びがあるのである。黄金を以て替え難い心の富とも言えよう。

子を死なし学校に子の多いこと 路郎

# 水煙抄

## 河内天笑選

横浜市 山本 為佐子

いい姑を演じた後の肩の凝り  
颯爽と歩きたいから軽い靴  
パソコンに錆びた脳味噌笑われる  
コンサート歌手も私も年を取り  
癌騒ぎ優しい妻に変えてくれ

大阪市 三浦 千津子

ほのぼののときたり通り年が明け  
人生の隙間に趣味のありがたさ  
妥協して笑えるまでに後少し  
見栄はった一日何ときつい事  
価値観が同じの妻がいる至福

横浜市 長島 亜希子

原発は要るがそばには建てさせぬ  
結果から作戦ミスを指摘する  
十五夜はまた来る供え次にする  
娘に旅を誘われ夫機嫌よい  
搔いている音が聞こえて痒くなる

米子市 足立 由美子

一年の計は真面目にたてている  
熟睡ができる倅せだつてある  
信念は曲げずこのままいくつもり  
今年の絵すこし明るく描いておく  
窓全開今年の空気入れておく

東大阪市 今岡 貞人

カルチャーのはしごで脳の錆おとす  
花一輪百のドラマを抱いて生き  
心臓も傘寿の音で脈を打つ  
失礼をジッと見ているのは鏡  
返す当てない国債で景気策

大阪市 一本 勇太

激辛のカレー コンサートの余韻  
押して引く呼吸切っ先泳がせる  
笑っても泣いても酒は同じ色  
逃げ道を作って冴えてくる男  
アドリブが過ぎてかすんだ自己主張

八王子市 井上京一郎

物売りの声もテープの味気なさ

音声を消せば緊迫するゲーム

代表という肩書へ重いツケ

戦争を知らぬ若きにある甘え

仔牛にも似てる茶髪の鼻ピアス

倉吉市 牧野芳光

こおろぎの声が日に日に透きとおる

いいことは覚えていない二日酔

廃船になっても海に首向ける

念仏のように聞こえる母の歌

空っぽの頭に鳥の話し声

尼崎市 軸丸勝巳

単線のリズム線路の継ぎ目節

方言が乗るふる里はもう近い

廃屋の生家わたしの本籍地

過疎を出て街でお墓も若返り

この歳でわかりましたと墓の前

鳥取市 録沢風花

この町に住んで笑顔が多くなる

お隣に台風除けの家が建つ

月光の妖気を浴びて眠れない

風の子の声が聞こえてはつとする

お祝いの続いた頃が華だった

八尾市 中島春江

不景気や言いつつ家を建ててはる

ジベタリアンお尻冷とうないかしら

デパートの商売上手孫の日よ

テレビでのカニや松茸大きくて

あほやなとやさし目許でしかられる

堺市 和田つづや

たましいも包んでくれる片栗粉

風上に佇っているから狙われる

無人駅だから下車する気になった

昨日まで忙しかった差し向い

ラーメンという一鉢のフルコース

綾部市 藤田芳郎

耕せば四季ある国のありがたし

還暦へ迷路は二周目に入る

樹に足があったら街は死ぬだろう

半額の訳が値札に書いてない

一坪を詫びて青虫踏み潰す

奈良県 江波正純

すぐとなり核怪獣が住んでいた

核騒ぎ人のいのちが侮られ

秋の野にキャンパスを立て豊かなり

周遊券これでしばらく自由人

ビッグパン国に失業まき散らし

札幌市 三浦 強 一

リストラの切り取り線で仲間割れ

終電車疲れた影が降りてくる

竜宮の土産に貰う紙おむつ

メッセージなしと留守電そっけない

おでん屋の季節となった燗の酒

青森県 福 士 ト キ

過疎の村人待ち顔のカラス瓜

いい顔に育ってりんご旅に出る

旅に出るりんご羨む落ちりんご

朝の庭 岩木お山が額の如

台風がそれて安堵の津軽丸

新潟県 高 野 不 二

記念貨を貯めて小遣い不自由し

日の丸に訳も知らずに反対し

豊作で米が余って値を下げる

欠点は遺伝のせいにしてしま

趣味の会ではリーダーになっている

日立市 加 藤 権 悟

次世紀へ天まで届け呱呱の声

初生りのユズがいっぱい笑いだす

算盤をはじくと鬼に笑われる

のみたらぬ同士に早い手打ち式

金星の笑顔は腹の奥に秘め

千葉県 大 川 晚 翠

マニアルの脅し取り立て指示通り

鈍行の駅の看板まだ読める

コスモスの風に靡いて浮かれる気

残すためあなたもオーナー千枚田

神の国五穀豊饒秋祭り

横浜市 福 田 由 美 子

パソコンを打つスピードで知る世代

どちらにも比重をかけてながら族

自動改札 払いすぎには知らんぷり

遺影から見守られてるお葬式

顔出した糞虫に子のはしやぎぶり

横浜市 川 島 良 子

母を見る後悔だけはしたくない

資産家も現金ないとただの人

年回忌 寺から通知されて知り

老いてゆく母の姿を見ておこ

う 俣約とケチの境が分け難い

横浜市 田 中 笑 子

胸元に女は意地を光らせる

人の輪が砦に見えて入れない

すれちがう電車に景色ふさがれる

能書きを読んだら薬怖くなり

物探しだけでつぶれる小半日

横浜市 芦田鈴美

正座して蚊一匹と根比べ  
山頂の紅葉に足が軽くなる  
食欲の秋を堪能しています  
衣替え去年は何を着てたやら  
捨て犬が家族になって腹をみせ

静岡市 大村正雄

いい声も音痴もまじる虫しぐれ  
草虱みやげに帰るハイキング  
革命も核も無縁の丸い月  
いつまでも兎住んでる今日の月  
朱印帖の乾き待ってる秋日和

三重県 佐々木森哉

今日の傷舐めて明日を生きてやる  
転居した孫恋しいと泣くキリン  
ははの化身の雪が私の肩に降る  
僕の鬱癒してくれる秀句佳句  
春に芽生えて枯葉の如く恋は散る

京都市 高島啓子

おかず屋でおかずの見本みて帰る  
三世代同居で並ぶ和洋中  
すぐ出来るテレビ料理は助手がおり  
友達の友達までが来て食べる  
更地また買いはったのは歯医者さん

大阪市 中村叡子

二千年見ずに巨星が二人消え  
政治屋は巧言を吐き痛みなし  
リストラで斬捨て御免ゆるせない  
富有柿と次郎柿とを食べくらべ  
勘九郎 大石一年つとめ上げ

大阪市 伊藤博仁

天眼鏡紙面の裏は読み取れず  
落葉踏み祠に祈る旅の無事  
山間の雲搔き分けて日が昇る  
女房に土産は寺のポケ防止  
折り込みで肉か魚に決められる

大阪市 小泉ひさ乃

妥協せず真っ直ぐ生きた父の背な  
物干しがカラフルになる孫の世話  
AカップとEカップ並ぶ物干場  
不況風新居の夢を吹っ飛ばす  
了見の狭い頭を天日干し

大阪市 大川道子

この心土足禁止と書いておく  
欠伸して車窓の人と目が合った  
秋の陽が落ちるリズムで枯葉舞う  
一言が流れを変えてゆく怖さ  
算数に弱いが速い金勘定

大阪市 尾崎 黄 紅

介護法 介錯せよということだ

昨夜見た夢が怖くて干す枕

捨てる捨てないと老婆と諍う

爺ちゃんよりも長生きしてねお婆ちゃん

柿の木が裸になってはつとする

大阪市 辻 川 咲

栗御飯人の情けの味がする

寂しさと気楽さ同じ胸に住む

やきもちをやいて見たいが相手なく

ための気はないがストレス溜ります

冬の蚊が私の腕で命果て

大阪市 奥村 五月

名士でも煙とともに過去の人

勲章を母にあげたい文化の日

打たせ湯に真面目な顔で座る父

上げ底の土産つかんだ値切り癖

諍うた妻も呼びたい湯の香り

堺市 村上 玄也

病欠の床で気を揉む社の動き

辰年の妻が還暦迎えます

旅先の相席縁で賀状来る

満員のエレベーターにそつと乗る

はしゃいでる笑顔の奥に刺が見え

堺市 荻野 正雄

酒飲めば無口がマイク放さない

波風が立たないように黙ってる

缶ジュースあれから底を覗く癖

皆既日蝕お月様にもあった意地

初詣で人波分けて車椅子

堺市 田中 紫

歳わすれるんるんるんで川下り

フーと鍋をつついて仲直り

脳みその足りない分を子に借りる

和服着て歩いてみたい京の秋

セクハラがノック無用と騒ぎたて

堺市 斎藤 さくら

返答に困った時は笑ってる

派手な傘娘のお古使ってる

子供でも割って入れぬ夫婦仲

秋風に木洩れ日揺れる昼下がり

定年で温和な顔に戻ってる

大阪市 榎本 日の出

二〇〇〇年じわじわと迫りくる

親の夢みごとにこわし出発す

嘘だとは知っていますが許しましよ

散骨の話をしてる寒い夜

無駄だとは解っていてもする化粧

大阪市 亀井円女

交野市 森本益弘

幸せ過ぎる神の配分ミスなのか  
かわいくないねいくら呑んでも酔わん人  
婆ちゃんがロック聞いてる話せるね  
人の為下げた頭だ心地良し  
終る日は粹な別れをしたいもの

吹田市 須磨活恵

川柳で私をメツタ斬りにする  
一病をもつてせっせと夫写経  
不器用でいまだ一兎が追いきれず  
木守柿冬のエッセー醸してる  
真紅の薔薇からはじまった誤解

高槻市 江原秀夫

心から笑えぬままに世紀末  
金木犀地を染めつくし冬を呼ぶ  
頭からだんだん下りてくる疲れ  
妻旅行私は読書文化の日  
人間ドック帰りはいつもの縄のれん

高槻市 西谷治三郎

使用後はニッコリ笑うコマーションヤル  
チャンネル権ポリューム権もみな取られ  
古書展で買えない本を立見する  
診断で禁酒禁煙やけ薬  
長電話家でもテレカ使いたい

あの人がもう定年か挨拶状  
近頃は電話でだけの里帰り  
カーナビの指示がうるさい近回り  
大胆なミニが座って困った目  
亡き父と気ままに暮らす喜寿の母

枚方市 大昇隆広

親となる資格に審査無い悲劇  
鶏が飛べない翼見つめる目  
クセ字でも誠の一字捨てられぬ  
枕元灯火に僕が僕でいる  
人弱く人怠けものでも愛し

枚方市 二宮紫鳳

イヤリングかすかに揺れて返事待つ  
童謡を唄うと邪心消えていく  
節約と一石二鳥のダイエット  
酒の量増えて停年間近なり  
妻の手の上ではゴンタの僕になる

八尾市 山本宏

出来過ぎた義母の前では貝になる  
枕辺に無駄でなかった子が揃う  
重い腰あげて母さん旅立った  
正直に手ぶらで行って恥をかく  
顔見せるただそれだけでいい土産



八尾市 與田明

リストラの風が背広にしみる秋  
原子力バケツを使う臨界事故  
ため息が怒りに変わる介護保険  
日本もだんだん怖い国になる  
定年にローンの鎖まだ解けず

八尾市 田中トシエ

来る年へうぬばれ一つ書き加え  
お銚子を熱燗に替え除夜の鐘  
薬湯で温泉気分松の内  
孫からの旅行のみやげ高くつく  
吉日にこだわり見舞い行きそびれ

松原市 和氣慶一

血圧計に油断するなと叱られる  
寝たふりでオウムが牙を研いでいる  
ハイエナの群れ思わせるワイドショー  
五百羅漢お隣に似た顔に逢い  
美術展はしごしている古都の秋

羽曳野市 川口信子

正月の神は昼寝もしておれず  
きさらぎの空家の隅に梅一輪  
マージャンに根気がつくくおばあちゃん  
割箸でまだこぬ人を書いている  
義理欠いて夜空の星がまぶしくて

羽曳野市 川田晋

半分は諦めながら差した釘  
酒やめた姿みせたい七回忌  
生き残るためだと辞表書かされる  
家庭不和らしい課長の低気圧  
家事の皺亭主に寄せてボランティア

羽曳野市 山本たけし

秋刀魚焼き明日定年の深夜勤  
譲ってと大きな勇気バス座席  
喜びを分け合うベダル妻と踏む  
呆けた老母テレビに返事して哀れ  
ニッポンの行方気になる二〇〇〇年

羽曳野市 森田四三郎

使い捨てカイロのような社の人事  
正論を通して寂し一人酒  
へそ曲がりも素直になつた紙オムツ  
今朝は何食べたと主治医にやにやと  
ピーポーに若葉マークが狼狽える

羽曳野市 永田章司

仏壇に遺族の見栄を垣間見る  
ほんのりとバージンロード頬を染め  
妻に客つい遠慮してしのび足  
カタカナの辞典片手にニュース読む  
慰労金介護を知らぬ人が決め

富田林市 大橋鐘造

河内長野市 水谷正子

三回忌やっと動いた鳩時計  
目をつむり妥協する手を叩いてる  
ときざむ時計になんの罪もない  
まかせとけ叩いた胸が悔いている  
遮断機が上がれば元の千鳥足

富田林市 山原昭水

大福餅食べたなら怒ることやめた  
結石を流してくれるビール飲む  
拳銃をはずすと巡査碁の先生  
うまかった中華の店が売りにでる  
ぼけるなよ米寿が喜寿の肩たたく

富田林市 中井アキ

謎のない女で重宝されている  
ぬか床に残してあった亡母の味  
喜劇の始まりはぴったりの釣書  
表札の亡夫は守り神になる  
辛抱の妻が眩しくなってくる

河内長野市 印藤智子

四十度熱出し腰が抜けました  
テレビ見てみんなの体操三日する  
体形を隠すフアッションばかり買う  
腰骨が歪んで心まで歪む  
久し振り握り鯖食べ胃の薬

すくすくと育つ若木に新世紀  
てつマンも正月らしい音をたて  
坂道をのぼる姿に歳が見え  
記念品また時計かと仕舞われる  
若者がよけたティッシュをもらってくる

岸和田市 木村正剛

日を追って能面になる母の顔  
画けるまでお預けとなる栗ご飯  
おにぎりを急いでつくる菊日  
お互いに老いの行方を託す日々  
介護サービス十年先もあるのかな

岸和田市 不破仁緑

赤い羽根つけていそいそパチンコ屋  
あれ以来タンクローリー怖くなる  
蟹食べて極楽行きの話する  
金木犀の香を子供らが持ち帰る  
子供らが不審顔するビール掛け

和歌山市 上地登美代

リストラの風ふらんこを揺すってる  
耳たぶを揉んでのり切る更年期  
軋み出す体へ注ぐロゼワイン  
はめられて買ってしまった派手な服  
日本は豊か放置自転車五千台

和歌山市 福 重 美 子

介護する娘が喜寿で母白寿

姦しい女三人乗り過ごし

秋日和カメラにポーズ柿すだれ

百円シヨップ安い安いで高くつき

工事中人形が振る赤ランプ

和歌山市 木 村 親 路

こんなことして内乱のない不思議

受け皿の銀行と言うややこしき

酒煙草飲まずそれでもガンになり

子育てが終ると化粧したくなり

嫁さがし畑の広さ邪魔になる

和歌山市 吉 村 さち子

乗りやすい質でとことん踊らされ

雑談の中からひょいといひヒント

せわしなくペダルを漕いで断つ迷い

ああも言おうこうも言おうと目が冴える

二つ返事の友だち居るといふ強み

和歌山県 坂 東 和 代

脳内を浄化してから考える

使用後にアレは悪いと言われても

骨までも愛されたいが粗鬆症

恐ろしい顔が並んだクラス会

借景のうら山に秋まつしぐら

川西市 田 中 喜 俊

秋の陽にかしこまつてる蜘蛛がいる

陽当りの良い縁側で物忘れ

刻みねぎスーパードで売ってる驚きだ

画友だかもみじの下で喋るだけ

新築の音朝夕にひびきくる

姫路市 北 条 てる代

はんなりの笑顔の裏にある野心

飛行機雲くずれて消えた自我ひとつ

強がり言うて淋しさ倍になり

しなやかに見える柳に芯がある

お茶飲んだだけを噂が先走る

宝塚市 飯 西 ミサヲ

今日一日大事に生きる医者通い

四方八方赤信号の二日酔

口もとをコップに近づけおととつと

ふるりの鎮守の森に信号機

天気予報見たとてあの子外国船

尼崎市 清 水 久美子

寒がりで猫舌なのは遺伝かも

父ちゃんを炬燵がわりにして眠る

妻も子も遊んでくれずひとり囲碁

稼ぎ手の靴を磨いている至福

出任せに乗った私が悪かった

篠山市 谷田多美子

嘘のない日々の生活にいい寢息

痛みとれ口も達者になってくる

髪染めて弾んで作る派手な服

カタログを見るだけ夏も秋もゆき

金の成る木の鉢が割れている

兵庫県 広瀬房江

通販のおしゃれ同じ柄に会い

幸せだなあってビール偽証する

候補者の掌のやわらかき氣に掛かる

あきらめた恋の微熱で不眠症

男運悪い同士でウマが合い

兵庫県 山本泰子

へそ曲り右ばかり減る靴の底

下駄箱でもう出番なしハイヒール

どんなかと孫の厚底履いてみる

捨て切れず古本山と積んでいる

閑かです独身貴族一人部屋

鳥取市 有沢せつ子

敬老を手厚くされて満たされず

引き算が好きな給料明細書

戦争の傷でなびけぬ日章旗

太陽を包み布団が帰宅する

あいまいな空には派手な傘をさす

鳥取市 福永ひかり

味噌汁がなくて何だか抜けた朝

手の内を知ればハハンとうなずける

昔なら親に向かって言わなんだ

定年後仕事のように散歩する

有るもので食べれる老いの二人膳

鳥取市 中村金祥

パソコンに恨みつらみを打ちまくる

休刊日合わせています休肝日

痛い目にあつて絆が太くなる

極楽もセルフサービスかも知れぬ

新春へ一皮むけた顔になる

米子市 小塩智加恵

古里に書く近況は厚くなる

会う度に孫と背比べしてしまふ

なにげなく眼が確かめる喉ぼとけ

ダイエーが勝つても店が町に無い

皮膚眼科 老人性と軽く言う

鳥取市 高尾京

国境無き医師団ノーベル平和賞

数百万地雷を埋めたのも人間

リストラの上に成り立つ大企業

時代劇テレビをつけて亡き夫に

探し物かくれて私を待つて居た

鳥取県 山内芳江

倉敷市 家守政子

念願が叶うと信じ茶断ちする

念仏を欠かさぬ老母の背で育つ

外車などいらぬ立派な足がある

鼻唄も出て台所はしゃいである

ムードなど何もいらぬコップ酒

島根県 多々納 テル子

年金で真心包むお年玉

根菜をじっくり煮込み亡母の味

共白髪無理するなよと庇い合う

平凡なこの一年へ感謝する

捨てるもの拾うものあり大掃除

安来市 原 煩惱児

方寸の形に背くこぼれ水

ツーカーの舟がときどき座礁する

減反が解けたらしよう干拓論

四つの目 四つの耳で一人前

面倒は女房に任す社交術

岡山県 土居 ひでの

携帯のメモリーハートくすぐられ

手作りのお節持ち寄る祝い箸

穏やかに女の戦姑看取る

人生の節目を飾る晴れ姿

にこにこ笑顔豊かな嫁に惚れ

恙無く六回目なる竜迎え

不景気を横目に友はビザをとる

七人の孫が揃っておめでとう

正月と盆は私の出番です

まだ当てにされているようで喜ばう

愛媛県 黒田茂代

踊り疲れた干物が綱に絡みつく

十字路のどちら向いても暮れの色

レトロな街をレトロな路面電車行く

ただ今の代わりに外すイヤリング

気晴らしをただで帰さぬ百貨店

今治市 渡邊 伊津志

生活が信仰である遍路笠

本の海へ錨をおろす冬籠り

桜貝遊ばせているほどの波

海彦が海捨てる日の補償金

感覚が凝縮された初日の出

今治市 塩路 よしみ

末席が好きよ一番くつろげる

柿一つ残し夕焼け真っ赤っか

百態の思いが揺れる終電車

どの色にも染まりはしない菊の白

神の目に止まらぬ絵馬が草臥れる

今治市 野村清美

さびしさをまぎらす花を買って来る  
すがりつく豆づる天へ登る夢

おおらかな人にもあった悩みごと  
日だまりへ欲の無い顔寄って来る  
力にもなれずに愚痴を受け流す

香川県 清川玲子

日本に生まれよかった御興かき  
不況風だんだん猫背になっていく  
ひとり待つ病院行きのバスを待つ  
血圧の上がる話は耳に栓  
徘徊の姑も新米わかるらし

香川県 原賢

老いてなお角のとれない石を抱き  
正論がお茶で濁され先見えす  
職安に薬一本が落ちてない  
洗車場で一円玉を二個拾う  
泣きことは言わずにひとり胸に抱く

高知県 近森功

フィナーレを飾る桜の種を蒔き  
低金利箒筭預金にかびがはえ  
佗びしいな病棟で見る死亡欄  
単刀直入そんな凶器を持った妻  
私の命を連れて巡る四季

宇部市 高山清子

息が合うロマンスグレー姥桜  
雨降れど地は固まらぬ嫁姑  
深入りをしすぎ気まづくなつた友  
同窓会老いても女見栄を張り  
華やかに生きる傘寿のイヤリング

北九州市 岡田幸生

退院の妻を迎える花を選ぶ  
妻と子の笑顔にフアイト貰う朝  
リサイクル出来ると叱る収集車  
茶髪にも似合う禪秋祭り  
預貯金もそのうちきつと有料化

唐津市 岩崎實

がんばれよその一声はしまつとく  
神の国少し乱れを皆覚え  
化物のマンガ子供のをうばう  
看板を残して店は車庫となり  
ペンギンの額買わぬかと飛入られ

福岡県 岩崎和女

コスモスが時雨に濡れてお辞儀する  
世話にならぬと力んだ母が寝たつ切り  
歓声が溜息になるツアアウト  
何回も枕を回す眠れぬ夜  
器量よく生まれて恋のない豆腐

秋田県 湊 修 水

新札は千円亭主よろこばせ  
セクハラでころげ落ちるかノックさん  
カネでケリつけても世間ゆるさない  
人情を疑うことの不仕合わせ

東京都 井 上 つよし

御朱印帖をあけて聞き入る除夜の鐘  
鳶鷹の望みをかける子の寝顔  
絵手紙を催促されて恵比寿顔  
一筆箋洗濯物に副えてある

横浜市 山 梨 雅 子

頼まれた漬物を買う京の旅  
年とつてからも末っ子は末っ子  
良い嫁を演じた法事肩がこり  
母の歳 母の気持が分かりかけ

横浜市 三 村 八重子

紅葉は愛でて落葉は邪魔にされ  
ロッカーも七を選んで子の試合  
コーヒーが来たので噂ビタリ止む  
明日は明日 今日の力で積木積む

横浜市 近 藤 道 子

封をして書き足りないと思んでは  
突然にお鮎食べたい時があり  
パズル解く脳がずい分錆びている  
充分に役をこなして散る落葉

横浜市 平 達 也

気のきかぬ先客に泣く車椅子  
動けなくなつて悟つた人生賦  
紅葉狩り小春日和にめぐまれる  
寝た切りで妻の足音待ちわびる

横浜市 鈴 江 純 子

はしごして神を惑わす初詣で  
円高に海外の旅叶えられ  
童心にかえりワラビーと戯れる(ケアンズにて)  
コアラ抱きついでに子ワニ抱いてみる(ワイルドワールドにて)

横浜市 伊 藤 ふ み

菊一輪一人静かに秋を聞く  
自己破産命が一つ残される  
山茶花に急かされながら冬仕度  
旅の前週間予報気にかける

横浜市 保 田 絹 子

み仏に亡母を重ねて古寺巡り  
山里に京の文化はいきづいて  
五七五書きとめておく箸袋  
拗ねている耳が待つて甘い声

横浜市 荒 井 広 和

生湯葉にグルメの舌もところかされ  
応対へ心掛けてるニユーtral  
娘を奪う男外車でやって来る  
殺伐さないから好きな時代劇

横浜市 北沢街湖  
ライト浴びてから舞台が好きになり

氏素姓伏せて松茸御飯出す  
駄駄っ児の機嫌直したふかし芋  
優しさの嘘がとびかう久し振り

静岡市 増田扶美

裏通り今日も優しい風に会う  
本物の名品に酔い吐息つく  
二人目は女兒と望んだ母の笑み  
湯豆腐と酒一合で老いの宴

静岡市 中西雅

土瓶蒸し大和の香り胸に吸う  
約束の重い背中がうずき出す  
不思議の縁 遠いあの日の赤い糸  
ひこばえの親に負けぬと天仰ぐ

尾張旭市 三浦きぬ

ゆとりあり過ぎて学力低下の子  
長すぎる生命線を何としよう  
探そうよ腹の底から笑う術  
切り札は離婚と決めて半世紀

滋賀県 中宗明

美しい娘に育ち不安増す

認知され国旗世界に堂々と  
おかしい世四季の早さに追いつけぬ  
お守りをポッケに入れる親ごころ

京都府 前上英一

追いかける夢も小さくなる余生  
待つことに慣れた女の肌の荒れ  
道標を残しあつさり父が逝き  
定年へ妻は他人になると言う

京都市 勝山美千代

新世紀老人世帯軒並ぶ  
初春に幸を祈って紅うすく  
京野菜霜木枯らしで味が出る  
老いの幸コタツ代わりのひざの猫

奈良市 上村季世恵

都合よく法律変える永田町  
マネキンの腰のくびれが羨まし  
飽食にあきて芋粥なつかしい  
恋人の心かわりの夢を見る

生駒市 橋本洋子

息が合いすぎてジャンケン決まらない  
宮参り赤ちゃん知ったこっちゃない  
ニキビでも二十歳過ぎれば吹き出物  
守礼の門 絵柄楽しい二千元

高槻市 生田義一

開店日パン屋の前に鳩三羽  
三歳の孫が我が家をリードする  
合併の陰にリストラひそんでる  
田舎道渡るカマキリ悪なく



高槻市 執行 稲子

初めてのオベじわじわと来る恐怖  
一滴の雫下さい百済像

野菜か果物かで揉めているトマト  
母さんの謀反やんわり責めてくる

豊中市 みき わきみ

縦書の日記は棚の端の端  
事故車輛わき見運転して見てる  
気をつける地震雷火事コンクリ  
女房が念押す計報同じ年

大阪市 中澤 伽羅

吹っ切れて迷ったことがうそみたい  
ドライブで秘湯をみつければしごする  
握手した母の力に安堵する  
小柄だがくすり知らずの大工さん

大阪市 榎本 舞夢

ばあちゃんが一番張切る七五三  
外出が続いて衣装そこかしこ  
どの家も妻は留守です電話口  
脱皮した脱皮出来たと励まされ

大阪市 星 きらら

お葬式派手にするなど手術前（入院 2 旬）  
再生へ美味い空気を思いきり  
褒めことば聞こえてるのにきき返す  
別れなはれあつさり言えば娘は帰り

大阪市 熊代 美智子

赤い糸結びなおして秋がゆく  
検問とまた間違えた工事中  
泣かないでもう泣かないで明日がある  
モクモクと歩いていきますゴールまで

大阪市 平井 露芳

いがいががあるのに栗に虫がつき  
老人会こもしまなみ渡る旅  
カラオケに昼もスナック扉開け  
ころころと犬のふんある散歩道

堺市 矢倉 五月

リストラで思わぬ孝行Uターン  
半日を費やす程のお詫び状  
近道の石で転んでバカを見る  
コーヒーたっぷり髭そり終る人待つ

堺市 喜多 美波

野球よりバーゲン待った主婦の籠  
女高生車内メイクで蝶に化け  
寝た切りへよく効いている心付け  
枯れかけた脳に水やる一行詩

堺市 梶本 哲平

なんとまああれだけやってこんな刑  
これほどの音痴テープで思い知り  
ちよびつとの葦酒仁王に睨まれる  
かまきりがばくの話をしつと聞き

堺市 見本 ちや子

この椅子に座るといつも眠くなる  
和歌の浦青い渚が良く似合う  
般若心経 悟ってないが唱えてる  
酔うほどに君はまあ面白い話する

守口市 井上 桂

偏差値は嘘とも誠とも言えず  
いつまでも赤丸欲しい中二生  
生徒には隠れてそつと辞書をひき  
親よりも友が大事な現代っ子

寝屋川市 井上 すみれ

介護保険ころころ変わりわからない  
わがままを言える仲間と街を行く  
お話を中坊さんとしたは夢

寝屋川市 岡本 勲

定年で描いていた夢泡と消え  
辞書開けたとたんに引く字もう忘れ  
円満と言われて個性伸び悩み  
嬉しさも半ば六十路の誕生日

八尾市 平川 幸枝

秋晴れに雪やコシコン灯油売り  
取引きの相手笑いで攻めてくる  
評判のカツラで生れ変らせる  
あの街で月に一度の句を食べ

藤井寺市 岸本 寿代

一人でも大きな声でいただきます  
あちこちと美術の秋は忙しい  
當麻寺納骨すませ天仰ぐ  
初空へ腕をのばして深呼吸

和泉市 横山 捷也

娘の恋の行方気になる長電話  
定年のセダンで菜園通いする  
一ふりのジョウロで終わる狭い庭  
マンションもいろいろ墓が垣根越し

大阪狭山市 矢野 梓

また誤解されそう何もしやべれない  
さりげなく敬遠されている才女  
空腹が思考力まで鈍らせる  
家計簿に妻の小遣い見当らぬ

河内長野市 杉谷 カズエ

ご無沙汰を書くとおかしい年賀状  
全身の力ですがる米寿の手  
介護保険どうなることか骨と皮  
式近い孫がお薄で和ませる

河内長野市 木太久 正一

ショートケーキ土産に夫婦記念の日  
松山の朝は始めに城仰ぎ  
瀬戸大橋沈む夕陽を見て渡り  
旅三日わが家の枕恋しなり

河内長野市 柏本靖子

空き箱を上手に活かす母の知恵

鬼の面外せば優しい父の顔

グルメ旅見ながら盃かたむける

泳ぐのが下手底辺で生きている

泉佐野市 稲葉洋

赤信号続く本日要注意

青信号良の暗示と医者通い

古稀むかえ専守防衛旨とする

カンピューター少し劣化の古稀のキー

大阪府 澤田和重

鉄壁の守備が泣いてるホームラン

叱るにも言葉を選ぶ義理の仲

あのやんちゃ出世頭かクラス会

人事異動給湯室から洩れてくる

和歌山市 武本碧

味方減るたびに指切りしたくなる

北の窓だつて月降る星も降る

軍服の父が瞼の裏に住む

牙抜いて鬼も憩いの輪に入る

和歌山県 中村君枝

燃え盛る心よ何処へ消えたのか

結び目をたしかめ越えてきた節目

この顔で十年老いぬパスポート

よこしまな心は持っていない素顔

伊丹市 榎谷郁子

ヤッホーがとまどいながら山に溶け

湖底の村知る人も無く波静か

謎めいた言葉の裏にある野心

親と子の絆は哀し運命かな

神戸市 木村忠義

本屋さんわたしの好きな森である

飼う鳥も森林浴に行きたそう

わが家には日の丸の旗あるのかな

先を読むのはやめにして今日を生き

尼崎市 森安夢之助

枕辺に夢が仰山落ちている

縄のれんの隅っこ僕の指定席

初孫の馬になつて白い髭

ハイキングの土産に栗をひろてくる

尼崎市 尾宮弘治

青い瞳の孫に初めて会う動悸

金婚の夫より可愛い膝の猫

よく書けた辞表で破るのが惜しい

満ち足りて物足りなくて嗚呼夫婦

川西市 西内朋月

辛いこと日にち薬と労られ

謎解ける程縄文が近くなり

コルセットおだてにのつた後始末

スコッチのロックのちから借りて寝る

兵庫縣 西山 八重子

ほろ酔いの天狗も好きな秋祭り

野仏の微笑やさしい秋の風

消えかけた種火を起す風に逢う

眠られぬ夜へ一杯の梅酒など

兵庫縣 安達 厚

孫の絵にそんな遺伝子あつたのか

癖のもんですわと軽くごみ拾う

吊し柿昔の風が吹いてくる

やぶ蚊たち俺に殺させないでくれ

兵庫縣 徳平 毯子

かくれてた人目立ってる同級会

アルバムの母からもらう南風

体脂肪と体重減らしたいブルー

運動会家族ひとつにさせてくれ

倉敷市 撰 喜子

七五三アイスはしがる孫なだめ

一杯のつもりがいつか瓶かかえ

たたき売り景気いい声客を呼ぶ

七五三付き添う親が高くつき

岡山市 大森 純子

ペンシルはすくつと立つて阿らず(句文集ペンシルを読んで)

缶蹴りめんこ登校拒否はいなかった

楽しみの引出し今日はジャズにする

川柳とだんだん深い仲になる

鳥取市 夏目 健一

貧しさの中の笑顔に救われる

男らしさ女らしさが決め手です

偉くなると知らず知らず反ってくる

ただ働きでもいい仕事欲しい

鳥取市 谷岡 清子

うす明り障子ほのかに朝告げる

起きぬけの頭鏡はいやと言う

神仏に朝の挨拶無事を乞う

汁の湯気温もり今日の気が宿る

鳥取市 西尾 敬之介

湖走るヨット秋風全部うけ

試されて涙と汗が混って出

売らんかな大売り出しの赤幟

村芝居黒子に徹し盛り上げる

鳥取市 福島 庸二

新しい飛躍期待の二千年

渋滞を地の利を活かし潜り抜け

信頼を取り戻すのに遠い距離

無知知恵も頭三人捻り出す

倉吉市 大下 智子

小手先と口先だけで生きている

どんぐりを拾った森がニュータウン

留守番は嫌だと言って二人旅

喧嘩していつもの倍の飯を食う

米子市 森 脇 麗

秋冷や菊酒に酔うて妻の乱  
バスタイム私の羽を休ませる

道草を覚えた孫と遊んでる

道草の楽しみ増えた柳友が出来

鳥取県 澤 裕 子

驚きと感動くれる孫が居る

この家の喜怒哀楽を知る扉

除籍した亡夫に暮らし支えられ

どنگりの輪の中まるく生きている

鳥取県 平 井 栄 翁

寄りそってあなたの肩の老いを知る

美しい夕焼空は嘘言わぬ

賛否など気にせず国旗空泳ぐ

嫁が来て祭の客が倍になる

鳥取県 西 垣 美知子

我慢した足から先に老い進む

涙腺がもうなくなったか母の声

すずめ達稲穂のそばで大合唱

いざという時の味方はやはり母

鳥取県 藤 山 弘 子

花の名を覚えながらの散歩道

お互いにつかず離れず嫁姑

手作りの嫁入り道具そっと入れ

あだ名さえセクハラになることもある

鳥取県 山下 節 子

下駄ばきで行けるところに母がいる  
制服を脱いでナースも母になる

大学に籍おいてから八年目

植木にもストレスがあり花つけず

鳥取県 加 藤 公 子

感激の味を奥歯でかみしめる

過疎に住む猫の額は広すぎる

港から三里離れた里に嫁す

中傷を笑いとばして夢を追う

鳥取県 山 岡 久 枝

絹よりかもんぺが似合うばあちゃんに

やれやれと思う頃にはおばあさん

祭来てでかい献立考える

緊張がぶつとりとれた深呼吸

鳥取県 橋 谷 静 江

友情の温みに触れて暮す日々

離れても意気通じ合う友がいる

友達が駆けこみ寺ときめてくる

早起きの美德と山の峰を見る

鳥取県 鳥 羽 玲 子

クイズ欄全部埋まって食すすむ

暇そうな散髪屋さん見て入る

プライドを捨てて触れ合う手の温さ

頑固者同士夫婦を続けてる

出雲市 梅 ミツエ

お地蔵を眺める姿 亡母に似る

メガネかけハイカラ流で出かけた

青い海しぶきと岩の語り合い

嫁入りの着物をといてフアッ ション ショー

松江市 小川 注 湖

受話器からよそ行きの声妻の顔

自自公は安定よりももめている

休耕田案山子は忘れられていく

周り見てへアヌード誌を持ちあげる

松江市 松浦 登志子

ガイドさんあだ名つけるもまた楽し

鳥たちのつづいた柿を吟味する

隣席を逃れられないバスの旅

自画像にシワを三本付けました

島根県 毛利 幸

参道は露店が数珠の秋祭り

飴と鞭どちらも効かぬ現代っ子

満月の丸さに勝る彼の胸

散歩する朝の会話に熱が入り

島根県 福岡 博 利

イヤリングぶらぶら肩が凝るでしょう

とりあえず今日は原発事故はなし

日に三度書けば忘れぬ日記帳

靴の紐結ばず歩く奴もいる

島根県 武島 ちよえ

初詣で一年分を先ず祈る

がたのきたつつかい棒にまだ頼り

ジョークにはジョークで返す欠け茶碗

ひねくれた枝を選んで花鉢

益田市 岡田 たけを

まだ生きる欲が遺言ためらわす

命尽きるまでは薬ときれぬ縁

よく眠り食べて歩けと医師が言い

気紛れな秋が着せたり脱がしたり

鳴門市 八木 芳 水

お社の軒先三寸鬼気迫る

水鏡その日で違う貌がある

愛一途信じた時計とまらない

手折られて幸せならばバラの花

香川県 松村 輝 夫

初夢へ潮時を待つ宝船

すじ書の無い人生に挿絵する

古時計二世紀凌ぐ音がする

七福神二十一世紀へ揃い踏み

香川県 向山 治 延

年かなあよくつまずくよ散歩道

物忘れするが君が代忘れない

同姓の人にふと湧く親近感

戦争の話になると長くなり

高知県 百田 幸

門の戸はいつも開いてる家ばかり  
神様と仲良くなつて不しあわせ  
思ひ出を語りやすらぐ老い同士  
鳶が鳶生んだ幸せ老いて知り

高知県 桑名 孝雄

その話三回聞いた酔つてゐるな  
ガールフレンド俺より三步前を行く  
すらすらと三下り半が書けそゝだ  
安全牌だろかみんなが寄ってくる

松山市 山之内 八重美

四季とわず茶舗は香りで客招く  
肩の荷をやがて下ろせる時がくる  
エラーしたあの一球が悔まれる  
うっかりと孫の指切りほごにした

愛媛県 中居 善信

一切を忘れたことにして流す  
叶うなら息子よ農をついでくれ  
野に下りて鎌びかびかに研いでいる  
夕べ見た夢の続きに酔うている

愛媛県 安野 案山子

地球から見れば些細な恋の傷  
無菌では寂しい歳になる娘  
うっかりと本音が漏れた有頂天  
負け犬の無念を晴らすコップ酒

野田市 那賀島 雅子

老醜を消す口紅を淡く引き  
人生を巻きもどしたい古ビデオ  
口下手は胸の奥ではよく喋り

東京都 吉田 土風

一度だけ大穴取つて競馬狂  
スッピンのおたしに惚れてくれた人  
あの女の笑顔見度くて通つてゐる

横浜市 金森 徳三

誤作動の不安がつのる年の暮れ  
長生きが苦になりそうな介護論  
目の保養モデルホームの近代化

横浜市 秋元 和可

バスを待つ人それぞれに秋の彩  
秋深し読みたい本が読み切れず  
菜園の野菜子のよう孫のよう

横浜市 布山 嘉信

口惜しさをバネにとコーチまたしごき  
彼岸すぎもう夏の日を恋しがる  
リストラの記事の会社に子は勤め

横浜市 生坂 サト子

自払機夫に感謝でボタン押す  
ひねた問い脳の柔軟試される  
二〇〇〇年どんな偉人が出るのやら

横浜市 豊田羊子

新札に財布ペシャンコになったまま

君が代につい足揃う性悲し

今日もまたパーと明るい冷蔵庫

浜松市 岡本まち

白黒をつけたばかりに砂を咬む

不況風人間砂漠吹きぬける

予知された鯨の上に棲んでます

三重県 尾崎勤

リストラの席にパソコン来て座る

降りてからまだ読んでいる駅の椅子

割り勘で夫婦じゃないと知る二人

京都府 高村吉之助

若者に負けぬセンスを磨きます

句会には肩の力を抜いてゆく

新人は全没という壁に耐え

奈良市 田中賢治

賽銭の十円玉は遠く飛び

通帳も残高減ってすつと出る

文化都市クルマクルマの日曜日

橿原市 西本保夫

胃の検査寝ていて楽に出来るなら

酒タバコのまぬのになぜ胃の検査

胃の検査すべて医院の金もうけ

門真市 矢阪英雄

短命の母を追い越し六十路生き

白川の郷より濁り酒便り

どぶろくの祭が過ぎて山は紅

高槻市 乙倉武史

名案も出ない三時だお茶にしよ

警察に警察がいる世も末か

強運の奴が残った戦友会

吹田市 後藤志津香

ナイヤガラしつかり掴む虹の色

また会える人と涙で抱きあう

健康茶信じて今日も呑み続け

吹田市 穴吹尚士

月並みで幸せですと妻は言う

食い扶持は年金だけの身の軽さ

老い先は子にも国にも頼らない

大阪市 中井正秀

少子化へ猫はしつかり子を増やす

きりぎりす鳴き止むときはパツとやめ

分からないについてゆけない億単位

大阪市 筒島文枝

嫌な事忘れて余生朗らかに

死ぬまでは大事にしたい我が生家

彼岸花真紅に燃えて誰を待つ



堺市 丹後屋 肇

太極拳通りすがりが真似ている  
搗き立ての餅に入れ歯が思案する  
リストラでまた先輩の世話になる

羽曳野市 安芸田 泰子

出会いより別れの数が多くなる  
ゲーム機へ孫の誘いでめり込む  
落ちついて話が聞ける他人事

八尾市 鷺見 章

とどかぬと知れど手を出す秋の星  
その先に浄土ありそな茜雲  
秋冷えに毛布肩まで引きあげる

八尾市 高橋 明子

もう止めた仏壇買うも墓買うも  
一〇〇キロで走る恐怖の高速路  
古日記一駄五銭パン三銭

八尾市 井尻 民子

同居した時計がずれる三世代  
自然一パイ一度は住んで見たい街  
ハイハイと操られてる振りをする

河内長野市 大西 文次

贈収賄上も上なら下も下  
ペア切符買ったが相手見つからず  
止めるなら今の内だと言う家出

岸和田市 亀井 皎月

どの顔も善人顔の初詣で  
初春へ新たな夢と入れかえる  
静かなりこのやすらぎの冬景色

岸和田市 村垣 鹿太郎

老いたのか茶柱立てど弾まない  
眼を病んで想い出ばかり甦る  
瘦身を吹き抜く風もはや師走

岸和田市 宮野 みつ江

帰りたくないのだあれも待たぬ家  
温めた恋がそろそろ孵りそつ  
乱れ咲く菊を不貞と責められず

泉佐野市 備後 三代子

馬肥ゆる間食少しひかえねば  
当り前のようおだやかに夕焼ける  
精いっぱいがまん重ねて胃の手術

泉佐野市 大工 静子

卒寿でも歌いまするよ華の春  
一歳半曾孫の足に追いつけぬ  
月詣りしたあじさいのない時代

和歌山市 水田 秀男

景勝の海守らねば恥になる  
臨界事故国の責任誰がとる  
無重力議員増えてる永田町

和歌山市 土屋 起世子

すすきゆれ月見に野暮なバーベキュー

不機嫌な夫に孫から知恵かりる

家計簿に暗証記号つけておく

和歌山市 和田 美寿子

いにしえは耐えてきたけど今自由

不況風渡る世間は仕事なし

あいづちをうちつつ何も考えず

和歌山県 杉山 精子

会えばまたひとつ解かれるもつれ糸

日が経つとうまく書けないお札状

焦点をちよつとずらすと見えてくる

田辺市 大峠 可動

ドナーカードにも定年がある日本

自由主義茶髪に衣だらりんこ

風の海 風を背負うて雁が越す

尼崎市 内田 美也子

家の灯が見えて外したイヤリング

気楽にはなかなかね母の肩

平和への祈り新たな二〇〇〇年

尼崎市 河津 正治

袴を脱いだ気軽な父が好き

相談に乗ってもらえる鬼一人

割り切れと言った我が身が割り切れず

伊丹市 延寿庵 野鶴

だんじりの屋根でバランスうまくとり

財布の紐ゆるめて祝う七五三

ダム底の祭り囃子がいとoshii

姫路市 服部 一典

墓参り届けとばかり経を読む

終生を炊事洗濯する羽目に

飼主の残飯食べぬお犬様

篠山市 円増 純子

マイペースたもって心地いい暮し

やけくそで打ってまさかのホームラン

やけくそにならずにすんだ友がいて

岡山市 清水 金太郎

お祈りが少し変った快復期

いろいろと有ったが金婚式祝う

今日もまた何事も無く暮れた幸

岡山県 国米 きくゑ

訂正はきかぬビデオに喋られる

ぎりぎり迄ねばり最後は神だのみ

横に居て酒の肴にされている

鳥取市 岡田 信恵

孫たちに必要とされありがとう

ありがとう一言いえぬ嫁姑

ポーナスの胸算用を思いだす

鳥取市 山口 千代子  
年金で楽に暮せる亡夫の恩

太陽を背に受け歩く温い秋  
強がりと言える間はまだ元氣

鳥取市 河田 のり代  
青空に井戸端会議輪が太る

頼りないような人居て世は丸い  
和やかな日本に生きて国旗あげ

鳥取市 田村 邦昭  
クロネコで母の季節が着きました

仕事には見せない涙どこへゆく  
いい味に煮つまってから亡母思う

鳥取市 足立 正義  
テポドンを捕虫網持って構えてる

まだ燃える赤い襦袢の裾捌き  
自信持ち落選懲りず句を創る

鳥取市 近藤 秋星  
独り者の俺には酒が恋人だ

老人ホームなかなか入れてくれまへん  
高齢者の中の一人に俺もいる

鳥取市 山本 益子  
ぼたん鍋 顔を連想箸にぶる

黄色財布のパワーを贈る期待込め  
絵手紙はコタツとネコの冬景色

鳥取市 松本 つね子  
人並に暮す余裕の夢を追う

生きている幸せ朝の米を研ぐ  
仮面とりゆっくりお風呂外は雨

鳥取県 松川 行男  
満腹の声うめき声餅残る

風景を窓辺で売って客を呼び  
エンゼルも髭剃るような年となり

米子市 猪森 スミエ  
その時の都合でボケている頭

打つほどに釘の頭は効いている  
一オクターブ下げて内緒と念を押す

鳥取県 西沖 彰雄  
天翔ける準備と四股を踏んでいる

七草粥 草の名知らず腹に入れ  
龍虎住む我が家今年はなにかある

鳥取県 鳥羽 直市  
毎日が日曜日でも予定みる

老いの道声かけ合って生きてゆく  
慌てるな眠れぬ夜も朝が来る

鳥取県 竹森 富久江  
魔法瓶に母のこころを注ぎこむ

心配することないじよじよに馴れてくる  
何故だろう此の季に揺れてばかりいる

島根県 松本聖子

人の世は朝日もあるが夕日もある  
意地とおす訳があるので通します  
老いるのは誰も通る道強く生き

松江市 銭山昌枝

オホホよりアハハと笑う人が好き  
歳かなあ無性に赤が着たくなる  
網の目を潜る弁護士置く会社

松江市 山根邦代

返事ない金魚に声をかけている  
物よりも心豊かに暮らしたい  
小遣いはなくても楽しシヨッピン

出雲市 城多喜

寝ころんで空をわたしのものにする  
淋しくはないかと人形抱いて寝る  
みがき粉で磨いて私光らせる

出雲市 川島和歌子

両の手に重く戴く感謝状  
相談会お茶を呼ばれに行っただけ  
老いてまだ出掛ける度に迷う服

出雲市 佐藤治代

辿りつく先は見えないから生きる  
平凡な夫小さな宝です

夫病み一人寝る日の長い夜

島根県 菅田かつ子

命日へおはぎ供えて亡母恋し  
新聞のちらしが増える十二月  
説法へ足がしびれて動けない

宇部市 藤本一規

初めてのメール自分に送ります  
岩戸から飛び出して来た放射能  
海を埋め山を削りて国滅ぶ

宇部市 中田忠夫

いい声の間違い電話とは寂し  
こも巻いて松もそろそろ冬仕度  
嫁が来てからは良妻賢母脱ぎ

香川県 瀧井勝

熨斗袋すこし吐息も入れておく  
その裏を見たがる癖が直らない  
土作り頭の中は花の彩

今治市 中村好恵

優しさに会うと涙がついほろり  
玉垣の曾祖父の名を見せておく  
リストラの波音もなく寄せてくる

愛媛県 宮本末子

洗うことのみに徹した女の手  
リラックスすれば脳からくる眠気

医者嫌い薬嫌い頼る炎

子育てを終えて料理の本を買い  
 コンビニで夕飯を買う共稼ぎ  
 和歌山市 清原悦子

鬱の目を晴らしてくれる柿届く  
 送られた柿も横目の胃の異変  
 和歌山市 上地忍

もの忘れ何時から加速したのやら  
 落ち込めば妻が温みの言葉くれ  
 和歌山県 村中悦男

青い眼の飛入り祭を盛り立てる  
 出産の知らせまだかと待ち望む  
 兵庫県 黒崎美紗子

好景気不景気何ぞ古希を生き  
 恋文は亡夫がくれた遺言書  
 倉敷市 森本文子

旅の町知らない人と故里自慢  
 新世紀傘寿迎えて胸を張る  
 出雲市 加藤スズコ

恙なく明けたふたりの二千年  
 ウォーキング続けふたりで八年目  
 出雲市 岡あきら

「ひとこと」原稿募集  
 川柳塔社に対する御意見、柳論  
 柳論

身辺雑事などを本文三百字にまとめてお寄せください。

第20回ときせん賞作品募集

雑詠 2句（未発表句）

選者 大野風柳 橘高薫風 去来川巨城  
 森中恵美子 小松原爽介

投句締切 1月31日消印有効

発表 『時の川柳』4月号誌上

賞

ときせん賞1名・準ときせん賞2名  
 佳作7名

投句料

誌友 500円（定額小為替）  
 誌友外1000円（定額小為替・発表誌呈）

◎切手は拝辞

投句用紙

便箋大（B5サイズ）用紙に作品2  
 句と住所・氏名を明記のこと。

投句先

〒650-0026 神戸市中央区古湊通  
 2-1-21 土井喜久栄宛

選句方法

無記名清記の上、選句。  
 1句ごとにその合計点で順位を決  
 め上位10句を入賞とする。

◎今回は20回を記念して各選者の天位の句に  
 選者揮毫の色紙を贈呈します。

時の川柳社

## 川柳会梨花吟行会

とき 平成12年4月15日午前9時半開場

ところ 鳥取県県民文化会館第2会議室

鳥取駅から徒歩10分・バス5分

出句締切 午前11時 披講 午後1時から

兼題 （各題2句連記・欠席投句拝辞）

「紫」 橘高 薫風 尼 れいじ共選

「白」 川島 颯云児 板野 美子共選

「赤」 林 荒介 宮崎シマ子共選

「緑」 門脇かずお 肥後和香子共選

「黄」 新家 完司 木本 朱夏共選

「桃」 森山 盛桜 熱田圭詩朗共選

事前投句「黒」 野口 節子 最上 和枝共選

閉会午後3時半（予定） 会費4000円（昼食）

事前投句締切 3月31日 必着（出席者に限る）

連絡先〒680-0044 鳥取市御弓町40-3

坂田和歌子宛（0857-23-3248）

宿泊 かんぱの宿 因幡岩井温泉

〒681-0024 鳥取県岩美郡岩井351

（0857-73-0311）

宿泊費 10000円

—水煙抄

# 秀句鑑賞

—12月号から

藤田泰子

瞬きが多くなりそう新世紀

見本 ちゃ子

世紀末、来年に対する戸惑いを「瞬き」という言葉でうまく表現されました。

九ちゃんが何時もわたしの胸に生き

福士トキ

「上を向いて歩こう…」前向きの姿勢が窺えます。

秋が来てわたしの枯葉ふり落とす

城多喜

枯葉を落とした後にはもう新芽が顔を出しています。「振り落とす」に生き生きとした躍動感があります。

ブルースが聞きたく西の窓開ける

猪森 スミエ

ブルースの女王淡谷のり子さんの「窓を開ければ……」が西の空から聞こえて来そうです。

遠くから見ただけ星もあの人も

高島啓子

恋の美学をうまく表現されました。

反故にした方の手紙が忘れず

矢倉五月

忘れてしまおうと、思っただけ反故にしたけれど、心に残っている文面、ロマンがあります。

丁寧に電話受けてる下着にて

中島春江

想像をたくましくさせるユーモアが楽しませます。

話し中ばかり元気でいるらしい

吉村 さち子

長電話できるお友達がいるんだ、元気なんだ、母心が伝わってきます。

間違ったふりをしようずにしておこう

立蔵 信子

楽しい雰囲気壊さない、繊細な心遣いのあなたが覚えてくるようです。

おだいにナースが横をむいて言う

與田 明

白衣の天使、きつと忙しかったのでしよう。ナースの態度に世間の風を感じました。

迷惑をかける長生きしたくない

鳥羽直一

心の闇、裏側、胸底にズシンとききました。

けものにもなれる心がひとつある

佐々木 森哉

煩惱と理性、知名人のスキャンダル、この句も考えさせられる句でした。

加害者を吾子と思つて許そうか

保田 絹子

吾が子と加害者が重なつての戸惑い、母性愛が伝わってきます。

捨子花などと疎まれ曼珠沙華

井上 京一郎

バラも曼珠沙華も赤、どちらも精一杯咲いているのに、人間社会にも通じるものをうまく句にされました。

規格外の果実を一盛りでさばく

加藤 公子

規格外に本当の味があるのに一盛りにされて、エリート意識は果物にまで浸透しているのでしょうか。

絶対は無いのよ油断召されるな

稲葉 洋

絶対というのは生者必滅だけ、虹色の約束、甘い言葉、油断できないこの世です。

真直ぐでないきゅうり売る老農夫

村中 悦男

原田泰治さんの絵を見ているような気分にならせていただきました。

# 愛染帖

## 波多野五楽庵選

富田林市 池 森 子

掃き出しています名もなきわが鱗  
ワンチャンス逃がした接点から秋に  
コーヒーと酒で話が噛み合わず

堺市 桜 沢 千 世

水がめを満たしてから分かれ道  
あれはあれで良かった海は風いている

香川県 川 崎 ひかり

今日も又上司の無理を胃におとす  
酸欠の街で拾った国訛り

大和高田市 鍛 原 千 里

冬は嫌い女ひとり寒すぎる  
アドリブの風では飛ばぬ竹とんぼ

弘前市 斉 藤 島

ミリほどの段差をそっと押してやり  
そして静かに花束を抱く海よ

東京都 佐 藤 季 穎

陽がしずむ前に言いわけしておこう  
大根切るとこにでもある話だな

横浜市 菱 田 満 秋

ここからは海になります河口堰  
二千年問題もない腹時計

大阪府 一 本 勇 太

けつまずく自信過剰に気付かない  
中間色好きで話題の外にいる

鳥取県 田 村 きみ子

雪しきりとでも電話がしたくなる  
ハウスもつ春です無口ではおれぬ

三重県 佐々木 森 哉

自画像に絵の具が泣いた痕がある  
過去へ行く汽車に乗ります美酒提げて

鳴門市 八 木 芳 水

二枚目の舌は自己暗示がうまい  
淋しさを掴んだ一人芝居の手

和歌山市 木 本 朱 夏

日曜の落葉と拾う鳩の羽  
壁の向こうの声を聞いている膝小僧

和歌山市 古久保 和 子

禅問答のように落葉を掃いている  
唐三彩の馬と砂漠の落日へ

海田市 三 宅 保 州

それ以上掘るとあなたが出られない  
プランコは止まる子供に飽いたから

川崎市 和 泉 あかり

一方通行喋りつ放しの風の舌  
雪霏々と赤い帽子がよみがえる

弘前市 高 橋 岳 水

秋ふかく月も斬れ味するどくて

鳥取市 坂 田 和歌子

どの彩に塗っても老いにさからえず  
五線譜にのらぬ小さな幸といる

岡山県 矢 内 寿恵子

葬列の中で上手に泣いている

岡山県 山 本 玉 恵

夢ひとつあずけて秋は遠ざかり  
折々に言葉を置いて逝きました

鳥取県 西 川 和 子

燃え殻になってあの世で出直そう  
鬼灯を鳴らせないまま歳をとる

鳥取市 武 田 帆 雀

よそ行きの街へよそ行き顔で行き  
新年に誓うこともう何もなし

会吉市 牧 野 芳 光

いい皺を刻み私の履歴書に  
すぐ怒るきつと淋しい人だろう

豊中市 田 中 正 坊

傷口に塩をすり込む愛もある  
よけいな事するなとバラの棘が言う

吹田市 石 原 靖 巳

手拍子の方へ転んでいく味方  
君の絵の中で時どき立往生

堺市 宮 本 かりん

八尾市 高 橋 夕 花

和歌山市 武 本 碧

八尾市 高 橋 夕 花

八尾市 高 橋 夕 花

とんぼがえりしたことがあり風の原  
和歌山市 牛尾 緑良  
 ゆずれない位置で添削くり返す  
弘前市 相馬 銀波  
 これ以上望むと毬が弾まない  
和歌山市 吉村 さち子  
 糸の長さは無限と思つ奴唄  
尼崎市 春城 武庫坊  
 引き返し出来ない川でまだ迷つ  
和歌山市 福本 英子  
 冷蔵庫にレモン淋しくないように  
寝屋川市 籠島 恵子  
 夕焼けに恋した烏瓜の赤  
鳥取県 岩崎 みさ江  
 苦労して手にしたものも瘦せて秋  
枚方市 海老池 洋  
 秋桜に風があります影がゆれ  
今治市 越智 一水  
 シェーカーで出会いと別れ振り分ける  
弘前市 福士 慕情  
 そして愛涅槃像が描かれる  
京都府 稲葉 冬葉  
 耐えている靴だしっかり磨かねば  
日立市 加藤 権悟  
 柿熟れて視野の窓にもある美学  
出雲市 園山 多賀子  
 風よけとなった男のひとり酒  
羽曳野市 酒井 一壺  
 風だけが私の愚痴をきいてくれ  
岡山県 富坂 志重

夜店から茶の間の主になる金魚  
大阪市 川原 章久  
 風上へ風上へゆく梯子酒  
松原市 小池 しげお  
 百の目で見れば白にも百の色  
綾部市 藤田 芳郎  
 里帰りしばらく時を忘れよう  
泉佐野市 稲葉 洋  
 銀婚の記念樹柚子湯の出来る程  
三田市 北野 哲男  
 雪が降る過去の骸を埋めてゆく  
弘前市 一戸 ツネ  
 悔しさも噛めるでしうか総入れ歯  
岡山県 小林 妻子  
 颯爽と髪切りに行く秋の空  
藤井寺市 太田 扶美代  
 マネキンに似合い私に似合わない  
茨木市 藤井 正雄  
 しつかりと影を攜んではなさない  
富田林市 大橋 鐘造  
 地方紙の記事を切り抜く郷土愛  
大阪市 北 勝美  
 手をつなぐだけで歩幅が広くなり  
今治市 渡辺 伊津志  
 眼鏡と入歯ハイと返事がしてほしい  
寝屋川市 太田 とし子  
 六階のこんなところに縄梯子  
寝屋川市 平松 かすみ  
 大空を仰ぐ迷いがふつつ切れる  
大阪市 榎山 隆盛

蜘蛛の巣が同じ所で待ち伏せる  
鳥取市 美田 旋風  
 知恵つけているな電話の影の声  
大阪府 澤田 和重  
 カラスぐらいは鳴いてくれるか私の死  
鳥取県 新家 完司  
 昨年は差し引き七十五点なり  
唐津市 仁部 四郎  
 拍手して私を明日に送り出す  
唐津市 市丸 晴翠  
 ほかほかと一人楽しいのが誇り  
唐津市 田口 虹汀  
 銘水を濁して和紙を漉きあげる  
唐津市 久保 正剣  
 控え目に役立っているゴムバンド  
大阪市 神夏磯 典子  
 言い負けた言葉の端を噛んでみる  
大阪市 三浦 千津子  
 亡母に似た羅漢さんが見付からぬ  
大阪市 町田 達子  
 ビコグラム可愛い単位だが怖い  
鳥取市 夏目 健一  
 柿に映え妻にも映えて日が沈む  
和歌山県 村中 悦男  
 くれないのもみじがしのびこむ手紙  
香芝市 大内 朝子  
 叱られてみたくて亡父の日記よむ  
八尾市 吉村 一風  
 一生を決めた出会いはもうこない  
和歌山市 上地 忍



熊本県 高野 宵草

波乗りをひとつ越えてく納税書

奈良市 米田 恭昌

秋風に女の情がさめてくる

姫路市 服部 一典

インスタント珈琲ですむ今日の友

尼崎市 田辺 鹿太

言うて見る恥の上塗りだとしても

富田林市 片岡 智恵子

菊人形裾から枯れていく命

岡山市 大森 純子

グラビアで味わう依屋柵屋

京都市 都倉 求芽

決断を峠の風に試される

米子市 政岡 日枝子

無理を通すと針の耳まで傷つける

富田林市 中井 アキ

ひと呼吸すればびたりする手型

八尾市 井尻 民子

好きですと聞こえぬように言いました

横浜市 保田 絹子

寛容も鈍さも老いと見做される

鳥取県 さこさき やえ

五十肩恋のあやまちかも知れぬ

尼崎市 春城 年代

笑わない人と同席するコント

堺市 河内 月子

お隣に大阪弁の異人さん

大宮市 新井 朋子

沸点を知らぬまだまだ走らねば

吹田市 山本 希久子

やがて私の影は日暮れの薄闇へ

唐津市 相葉 あき

追う人と向い風にはさまれる

横浜市 豊田 羊子

親亀を背負って一年また一年

尼崎市 内田 美也子

コスモスが曲りくねって自己主張

八王子市 播本 充子

母だけが軽い辞令に従って行く

和歌山市 山田 高夫

勢いに乗ってブレイク踏み忘れ

愛媛県 中居 善信

身上不二子もきゅうりも歪だが

西宮市 牧渕 富喜子

菊花展わたしに菊は作れない

八尾市 村上 剛治

腕時計外して友と酌み交わす

大阪市 小林 周信

出離子が鳴ったら行こう黄泉の国

鳥取県 春木 圭一郎

旅半ば色即是空おぼろげに

富田林市 藤田 泰子

初詣で大仏さまに抱かれに

枚方市 前 たもつ

検診の列のトップで落ちつかず

横浜市 川島 良子

昼食に問題がある血糖値

米子市 光井 玲子

海は風ぐ底の慟哭知らぬまま

弘前市 蒔苗 果林

トイレットペーパー雑に切られてすすり泣き

今治市 野村 京子

真ん中にいても不安な砂の城

黒石市 相馬 一花

受付に毛筆のある恐怖心

竹原市 古谷 節夫

信号機愛は気ままに潜り抜け

堺市 小西 小雪

バグマンと出合い映画を恋人に

米子市 木村 富美子

美しくなりたい踵からみがく

横浜市 近藤 道子

神様を呼び善人になったがる

西宮市 門谷 たず子

不安だと言えは不安な渡し舟

八尾市 生嶋 ますみ

売り言葉笑って仕返しはしない

大阪市 渡部 さと美

晩秋の蚊が叩かれにまといつき

鳥取市 徳田 ひろこ

未来など私に見えぬ阿弥陀くじ

尼崎市 長浜 澄子

良く走るペンと詐りない話

札幌市 三浦 強一

欲言えば書齋が欲しいうさぎ小屋

松江市 川本 畔

わたくしの過去が流れている枕

大阪市 本間 満津子

肩書きを並べて門は閉めてある



## 杜的さん

どうしてそんなに急いで

都 倉 求 芽

十一月八日、「京都塔の会」の十月句報を製本している最中にルルー ルルー

「主人が昨夕亡くなりました…」

暫くは絶句、そして「ええーっ」とだけでした。芳子奥様のお話では七日、いつものように病院へ洗濯ものその他のご用で覗きに行かれたが特に変わった様子もなく、その足でお客様の入院先へ回って帰宅されたら、間なしに病院から「すぐ来てほしい」とるものもとりにあえず駆けつけたがもう脈拍も血圧も下がっていて意識もなかったとのこと。集中治療室での看護とはいえ、さっきまでしっかりしていたのに、なんで、なんで、という思いの中で息を引きとられたそうです。

今年の春ごろから、肺気腫で酸素ボンベの助けによりながらも、句会には元氣に出席しておられました。そして九月に入院、ひと月で退院。しかし、やはり調子が悪くて再度入院。以後集中治療室でも最期の日までしっか

りしておられたそうです。句会での書きにも全員にいちいちお返事をくださって、みんな恐縮したり安心したりで、またお目にかかれるものと、誰もが信じていたと思います。

杜的さん（本来なら先生とおよびすべきでしょうが親しくして頂いたあまりに）とは、もう四十年來のおつき合いになります。職場川柳の句会で初歩から教えて頂きました。そして昭和四十六年退職された翌年、京都にも句会を持つと思うので、手を貸してくれぬかと持ちかけられました。それが「京都塔の会」の生い立ちです。

退職記念句集『的』から

帆柱の先から港の夜が明け

行違いでよかった恋と今悟る

雨の夜は如何におわすか野の仏

これからが現実となる幕が下り

おしどり作家として、何処へ行くにも芳子

さまと一緒のまじめな句風には、お人柄そ

のまが表現されていて定評があります。

「京都塔の会」から

糸底の少うし欠けてからの愛

散りざわの一句今から考える

十日の告別式はこれ以上ないという小春日和で、薫風主幹をはじめ多数の柳友、ご親戚、尺八は師範、それに俳画という多趣味のお仲間に見送られて旅立られました。

繁誓杜林浄光禪定門位 享年八十五歳

今、私の脳裏には京都塔の会発足当時の杜的さん宅二階での句会が、走馬灯となって鮮やかに映ります。かくし吟二題吟、時には旅写真を題にした和やかな雰囲気、その後で８ミリ映画など。以来三百三十回。吟行も四十回をこえました。杜的さんが築かれたこの句会を、私たちは頑張って継いでゆきたいと思っています。どうぞやすらかに眠りください。

『川柳塔』から

水たまり五重の塔がまたげない

一人でも笑えるけいこしています

絵で書いた般若心経たのしくて

ちぎれ雲 八十年をありがと

この夫に草書のかすがちと欲しい（路郎實）

寂聴のテープ途中で切れたまま（遺句）

つつしんでご冥福をお祈りいたします。

銀色にかすれた雲や秋静か

求芽

## 苗香のむ

宮西弥生 選

蜘蛛の巣が多くて正義ひっかかる  
夢拾ひ続けて夢の裏切りよ

魔女ひとり棲むかもしれぬ壺を抱く

過去未来いまを見落しそうになる

嘘は下手本当のことは言にくい

再びの来ない時間をたべつくす

振り出しに戻ろ時間が少しある

自分史の句読点には髪を切る

私に何ができたか問う挫折

道探す戻れる道であるように

磨いても取れない鍋のこげと自我

進化した女が翔べる空がない

かんざしのように華やか針の家

身に合わぬ夢はそろそろ捨てようか

少しだけ虚構で埋める私小説

いい素材だから手抜きの料理です

波風が静まる父の咳払い

自称美人の鼻の高さを計る風

金箔のお茶で濁している話

富田林市 中井 アキ

倉敷市 小野 克枝

和歌山市 福井 桂香

鳥取市 録沢 風花

寝屋川市 岸野あやめ

岡山県 矢内寿恵子

藤井寺市 高田美代子

吹田市 山本希久子

寝屋川市 森 茜

松江市 川本 畔

熊本市 永田 俊子

和歌山県 杉山 精子

米子市 政岡日枝子

鳥取県 西原 艶子

松江市 銭山 昌枝

堺市 志田 千代

米子市 木村富美子

富田林市 池 森子

和歌山市 木本 朱夏

許容範囲女ごっこしています

通過した駅に座っていたあなた

過去ばかりにしがみついている父のペン

母の死へ打たねばならぬ句読点

太陽が善を積みよと顔を出す

だんだんと白から黒くなる噂

晩秋の川の流れに添うもみじ

焼きリンゴおんな独りのフルコース

母の字を抱いて豊かな冬葎

古里で止まったままの時があり

想い届ける鉛筆しきりに削る

縫上げをしたい身体のあちこちに

慣れなれて夫に敬語忘れてる

位置替えて見てもきこゆる冬の音

まだ欲があつて足腰よう動く

小さな辞書つれて小さな旅に出る

ホッチキス心の髪は止められず

ほうれん草ポパイのように瘦せられぬ

身を守る言葉がストレートには出ぬ

いいわけが通り淋しい心抱く

美しい空気と信じ深呼吸

進ませた針をゆっくり戻し秋

千本も困るが奥の手がほしい

私にも奥の手があるキャミソール

温水を噴き出す龍と初日の出

大和高田市 鍛原 千里

西宮市 奥田みつ子

西宮市 門谷たず子

藤井寺市 太田扶美代

今治市 塩路よしみ

羽曳野市 西村りつえ

西宮市 西口いわゑ

富田林市 藤田 泰子

和歌山市 川上 富湖

鳥取市 植田 一京

大阪市 神夏磯典子

寝屋川市 平松かすみ

八尾市 宮崎シマ子

岡山県 山本 玉恵

八尾市 高杉 千歩

鳥取県 さえきやえ

横浜市 清水 潮華

八尾市 高橋 夕花

鳥取県 土橋 睦子

大阪市 板東 倫子

芦屋市 黒田 能子

西宮市 牧瀬富喜子

和歌山県 坂東 和代

岡山県 土居ひでの

大阪市 津守 柳伸

約束したように月が満ちてくる  
パンの匂いに素通り出来ぬ客の足  
運命線に戦の跡が残っている

一人で生んで一人で消える獣たち  
ガラクタの中で昔の絵に出合う  
噂の波紋中心に鬼がいる

びったりと息合わなくなつて冬に  
目立たない人のちよんばを見てしまい  
歯が痛み顎なし地藏撫でに行く

向き合つと開く素直な自動ドア  
中途半端な幸せこっこ人生は  
遠回りばかりしている自己弁護

秋の宵ボンド一本使う趣味  
安心の型はすぐに崩れだす  
触れてはならぬ花に心がざわめいた

コンピューター背筋を伸ばす二千年  
仏滅を大安にした青畳  
ある時は嵐の中の鳩となる

祝い事無いがグラスにロゼの赤  
コンビニ育ち母のおにぎり知らず嫁く  
降板の訳を離婚にしたいくない

水滴のコップ見つめて待つ男  
パソコンに割りこまれてる秋の夜  
なんでこんなに忙しいのか鈍い手だ

プラス思考に視点が変わる夕茜

和歌山市 武本 碧

倉吉市 淡路ゆり子

米子市 鷺見 正子

鳥取県 岩崎みさ江

鳥取県 石谷美恵子

大阪府 米澤 俣子

八尾市 村上ミツ子

堺市 河内 月子

米子市 林 瑞枝

和歌山市 吉村さち子

和歌山市 桜井 千秀

出雲市 園山多賀子

鳥取市 坂田和歌子

寝屋川市 籠島 恵子

倉吉市 野口 節子

和歌山市 上地 忍

交野市 山川日出子

八尾市 井尻 民子

米子市 小塩智加恵

和歌山市 福本 英子

和歌山市 榎原 公子

横浜市 保田 絹子

横浜市 伊藤 ふみ

尼崎市 春城 年代

和歌山市 山口三千子

人形が働きすぎるくらいだおれ

鏡見るあしたの皺を失くすため

よろこびを育て余生にバラ咲かそ

甘えたら一気にくずれそうわたし

子には子の親には親の赤や青

スカートを穿いて五官を研いでいる

故郷にわたしの素顔置いてあり

老人の審判を待つ介護法

約束はいいの元気になつて欲し

腰痛の費用に消えたパート代

サクランボに触れて椅子まで揺れ出した

中井アキさんの句―滑りよい句。そして納得させてくれる句。

「蜘蛛の巣」は厄介な邪魔もので嫌なもの。何かを築こうとすれ

ば必ず敵が現れる。その阻むものを蜘蛛の巣に例えたとても妙味

に思える。克枝さんの句―生きてゆく限りの憧憬の一つが夢であ

る。その夢のために人々は頑張り、努力してたたかっている。ち

っぽげな夢でも叶うと嬉しいが叶えられない時は又、傷つくの

が人間。「夢の裏切りよ」しかし、それがまた次の飛躍へのチャ

ンスかも知れない。桂香さんの句―どんな壺かな、見てみたい。

「魔女ひとり」と「壺を抱く」で幻想の世界に仕立てたところが

興味津津。きつとちつちやくて、闇の中で七彩に光り、そしてし

やべり出す……。桂香さんにピッタリの雰囲気です。風花さんの

句―「過去、未来」云々の以前に作者はしんけんに「いま」を見

つめる姿勢をはつきりと表現している。これまでのこの汗を、こ

の涙を無駄にしてはなるものかとの前向きが現在に至っている。決して「いま」を見失つてはいない。作者の生きる情熱はこれか

晴

高野宵草選



冤罪がはれても青春もどらない  
人間の弱さを晴らす聖書読む  
七五三孫の晴着が踊ってる  
晴天に白く干してる妻の幸  
雲の上こんなな晴れていたのだね  
晴天に鬱の衣は乾しておく  
お互いに気晴らし出来た長電話  
一日一善晴れ晴れとして床につく  
ほめちぎり晴れがましく照れるお棺  
一陽来福曇り後晴疑わず  
日銭追う身に青空が味方する  
日本晴れ長持唄が湧えている  
憂さ晴らし醒めて鬱増す乱れ酒  
日本晴れベランダ見栄も混せて干す  
晴れ姿なのに涙が邪魔をする  
晴着の孫お客のような顔になり  
夜なべして晴着仕立てた母を恋う  
青空を貯金したいと児が願う  
晴れ男でてる坊主のことは伏せ  
現代っ子大工は休む日本晴れ  
笑い袋を一つ足したら晴れる胸  
晴れ舞台踏んでうれしい馬の足

凡々子 (鑑)よしみ  
美也子  
たす子  
ひかる  
アキ  
智加恵  
旋風  
彩子  
多賀子  
清芳  
重人  
克治  
英子  
大輪  
ますみ  
茂代  
尚士  
潮華  
保夫  
雄々  
狸村

子報晴 慈雨待つ農家忘れられ  
深みゆく空の青さとリンゴの朱  
晴れの日はみんな味方に見えてくる  
カープミラーの空まで晴れる里帰り  
許されてゆるして今日も日本晴れ  
うつぶんを晴らす酒にも税が追いつ  
孫嫁ぐ天気晴明水が洩る  
逢える日が晴れていようがいるまいが  
敵に塩贈ってからは心晴れ  
軍服が晴着に見えた少年期  
欲捨ててみればこんな青い空  
青い目の嫁に夜なべで晴れ着縫う  
晴れの日が少なくなった前頭葉  
さてどこへ行く快晴の連休日  
濡れ衣が晴れて腹ペコだと気づく  
佳  
盲目の友があしたは晴れと言う  
晴れ姿見ている父の瘦せた脛  
クモの巣が大きくなって晴つづく  
とげ一つ抜いて晴れやか嫁姑  
有為転変質屋で眠っている晴着  
人  
晴着の手晴着を曳いて七五三  
地  
絶景を褒め晴天も褒められる  
天  
円満解決奇妙な彩に溶けて晴れ  
軸  
日本晴れほととの声で児が駆ける

悦男  
岳水  
緑良  
寿恵子  
鉄治  
哲男  
民子  
睦子  
文時  
強一  
晴翠  
日枝子  
四郎  
清史  
保州  
恭昌  
しげお  
水笑  
俊子  
正剣  
満秋  
勇太

餅

川上富湖選



餅を掲ぐときは背筋が伸びる父  
母のもむ餅の丸さに近づけぬ  
兄嫁の文で今年も寒の餅  
それぞれの土地に染まった餅の顔  
伊勢帰る僕も赤福提げている  
東西を丸と四角で分ける餅  
わびさびの解らぬ餅を焼いている  
仲直りふくら餅が焼き上がる  
正月の餅眠ってる冷凍庫  
バック入りの餅は神様好きでない  
一升餅背負う頃かある試練  
餅の絵を描いては消している総理  
絵に描いた餅にもかびが生えてくる  
百万の餅代すこい永田町  
月ウサギ餅を掲ぐのは父と母  
雑煮餅妻のしきたりどおりする  
欲しい時欲しいだけ買う雑煮餅  
大山の麓が香る雑煮餅  
餅つきの采配役に祖母がいた  
ご先祖のよろこぶ餅をついている  
あの餅をいつ召し上られた仏さま  
ありがたい餅を神社で拾ってくる

保州  
玉恵  
正雄  
ちかし  
つづや  
晴翠  
典  
ますみ  
美子  
喜子  
ただし  
ミツ子  
水笑  
扶美代  
弘一  
高栄  
ひでの  
たもつ  
夕花  
俊路  
大輪

三方に乗せるとお餅ありがた  
 本当の草餅が出る里の春  
 草餅のみどりに今も母が棲む  
 スイッチオン餅をつきはる餅つき器  
 餅焼けば記憶の底の囲炉裏端  
 もう一度餅を掲きたい小屋の白  
 餅つきの杵うつ毎の走馬灯  
 それなりの幸せがある鏡餅  
 かがみ餅とんど祭りの火を背負う  
 津軽にはりこんどが似合う鏡餅  
 重ね餅仕上るまでの修羅があり  
 まっ白なままに生きたい鏡餅  
 鏡餅のまるさはプロに任せよう  
 あるがまま生きて悔いなし鏡餅  
 ペタンコの音は出せない餅搗器

佳

人

地

天

軸

ダンゴよりブライド高い丸い餅  
 正月に母を送って餅嫌い  
 だれの情けか餅をもらった地蔵尊  
 紅白の餅にドラマを言い聞かす  
 かき餅のすだれに亡祖母のかくれんぼ  
 懺悔録詰めた餅からふくれだす  
 餡餅の餡にだまされつづけてる  
 餅を掲ぐ音がしている頑固だな  
 肅然としきたりを積む鏡餅

善 信  
 満 秋  
 鉄 治  
 朝 子  
 活 恵  
 雅 城  
 隆 広  
 清 史  
 登 美

勝 視  
 みつこ  
 花匠  
 美代子  
 匠 匠  
 匠 匠  
 匠 匠  
 匠 匠  
 匠 匠

千 代  
 英 子  
 勇 太  
 雄 々  
 たす子  
 緑 良  
 日枝子  
 剛治

い っ ぱ い

篠原いつふみ選



二〇〇〇年不安いっぱいコンピュター  
 秋いっぱい枯葉舞う風御堂筋  
 インターネット知恵いっぱいをインプット  
 いっぱいの田舎を語って母ごころ  
 欲いっぱい入れる袋に底がない  
 リハビリーへ精いっぱいの汗流す  
 使わないものに囲まれ母の部屋  
 時間だけいっぱいあるが金がない  
 人車あふれて荒みゆく都会  
 不用品年々増えて悩まされ  
 風の子の声をいっぱいラップする  
 えんやこら力いっぱい夫婦坂  
 バーゲンにたんと買い過ぎタクシーで  
 精いっぱい誉めると月は丸くなる  
 初歩き母はいっぱい手を広げ  
 どの指も精いっぱいに生きたる手話  
 腹いっぱい食べる夢見る血糖値  
 溢れ出る愛は報いを求めない  
 いっぱいの花で埋まいった大往生  
 子供部屋なぜがいっぱい落ちている  
 いっばいやるか叱った部下を誘う五時  
 精いっばい生きた証の日記帳

勝 美  
 章 久  
 柳 弘  
 民 弘  
 時 弘  
 剛 治  
 あずま  
 一 壺  
 恭 昌  
 サト子  
 風 花  
 郁 子  
 ミツ子  
 大 輪  
 志 重  
 岳 水  
 宏  
 満 秋  
 隆 盛  
 セツ子  
 正 雄  
 保 州

饒舌に軽くいっぱい食われる  
 灰皿にいっぱい盛った下手な嘘  
 故郷の香が箱いっぱいの宅急便  
 バケツでいっぱいウランを溶いた低次元  
 欠点はいっぱいあるが丸い顔  
 生かされて薬いっぱい飲まされる  
 腹いっぱい食べると猿も芸はせぬ  
 精いっぱい動く胎児に生かされる  
 哀しい嘘いっぱい溜めて言う別れ  
 自由いっぱいあり過ぎ若きされてくる  
 目いっぱい値引きしたのにまだ値切る  
 手鏡に眉いっぱい本の心をつかめない  
 ジョークいっぱい本心をつかめない  
 診察券いっぱい持って元気です  
 欲はった夢がいっぱい風化する  
 金貸しにいっぱい食った保証人  
 したい事いっぱいあつて昼寝する  
 絵馬堂にいっぱい欲が吊ってある  
 窓いっぱい開けて誤解をとおく  
 画布いっぱい暖色にして明日描く  
 筋書きをいっぱい持っていて哀し  
 いっぱいになったらねんねする天使  
 あいにくがいっぱい詰めてある財布  
 お祝いをいっぱい貰いもう離婚

叔 子  
 シマ子  
 智加恵  
 正 剣  
 水 笑  
 ますみ  
 虹 汀  
 晴 翠  
 一 風  
 英 子  
 遠 野  
 銀 波  
 夕 花  
 たもつ  
 美代子

まさと  
 たす子  
 鉄 治  
 しげお  
 典 子  
 日枝子  
 朝 子

# 初歩教室

題 — 未来

吐田公一  
はくだきんいち

おめでとうございます。西暦二千年をお迎  
えになられていかがですか。我々のような熟  
年者にとっては、何を今更ということでは  
うか。

だが、人間には物事に感動するということ  
が大事なことだと思う。この感動という精神  
作用は人に若さをもたらしこれを保持する。  
人からこの感動という精神作用を除くと、残  
るのは冷めた人間つまり老化だけになる。  
川柳の創作に当たってもこの感動という精神  
作用の働きがあつてこそいい句が生れる。そ  
ういう意味からも来世紀へ夢を馳せるように  
ありたいもの。

添削句

○未来図を生きてる限り書き続け ひさ乃  
生きてる限りを強調するために前段へ持つ  
てくるといい。

▽生きてる限り未来図書き続け

○臍リング未来どこまで下がるのか  
現代川柳ではこのような卑猥に近い揶揄は  
好ましくない。

○七五三未来がいつばいつまってる 正純  
説明句といえる。

▽はち切れる未来が詰る千歳飴

○弥陀の掌に未来ゆだねて日本晴 郁子

下五は心が晴れた意とは分るがやや推敲不  
足の感あり。

▽弥陀の掌に未来ゆだねている写経

○初孫の未来を案じ耽ける夜 民子  
平凡な見付けで終っている。むしろ時事吟  
として

▽初孫の未来国債背負わされ

○地に落ちる未来を木の葉も知っていた トキ  
木の葉を擬人法で表わした力はいい。

▽地に還る未来を木の葉知っている

○あれこれと失いて来て未来像 幸枝  
真意のやや掴み難い句

▽未来像あれこれ画く齢も過ぎ

○今がよい若者未来考えず 春江  
少し組み変えてみると

▽未来より今が大事な若い人

○高齢で先の短い未来読み

未来読みの表現はいい。

▽もっと先はないが未来へまだ未練

○よき友と未来の国へ旅に行く 智加恵  
行くは現在形で句の内容と不一致  
▽願わくば未来へ友と旅したし トヨ子

○倦怠期未練が辛抱せよと言ふ 未練ではない未来です。題をよく読むこと。

▽倦怠期耐えて明日へ夢を抱く

○ランドセルに未来の夢を詰めこんで 四三郎  
には不要。このことによってランドセルの擬  
人法が消えて、句の味わいが乏しくなる。

○少しずつ夢が小さくなる未来 尚士  
この主役は誰かを詠み込むこと

▽明日がない老後へ夢がしばみ出し

○もう一度やってみようか陽が昇る 知華子  
上十二音字が冗漫

▽やり直したら希望の陽が昇り

①未来から不安の影が忍び寄る 靖雄

②未来像描けぬ政治に頼れない 靖雄

②は時事吟だから①と合作して 要子  
▽介護法不安のつてくる未来

○除夜の鐘未来永劫続く道 上五と下句の関連が分りかねる。

▽煩惱を消して未来へつなぐ鐘 五月

○明日変る政治に未来託してる 政治には本来夢を盛るべきであると思つが、  
現状は果してどうか。見解の相違だが

▽明日からは変るだろうか不況風

○四柱推命未来の運命問うてみる 志津香

占いの方が語呂(リズム)がいいのでは

▽古いに明日の運命を問うてみる

○未来子のたのもし笑顔七五三

トシエ

七五三 未来子で重複のきらいあり。

▽夢抱いた笑顔たのもし七五三

○国旗国歌盗聴法のある未来

正雄

国旗国歌は現状もある。やがてで未来を表現し、いつかの過去(治安維持法)を

▽盗聴法やがていつかの道に出る

○親も子も未来を語る術忘れ

勝久

親と子の未来の句は多数。ただ純子さんの句のように表現のしつかりした句がなかった。ご参考にしていただきたい。

◎未来図を描く親子のすれ違い 純子

○月旅行特典あるかフルムーン 章司

○月旅行目ざし積立で加速する

方子

着想は面白いが――

▽フルムーンが抱いてる夢は月旅行

○カミさんは未来志向の楽天家

宏

上五の表現がいま一つ

▽楽天家の妻虹色の夢を抱き

○これと云う未来が持てぬ政治劇

禮子

上五を具体的に。また下五の劇は不要。それより詠む人の感情を入れれば――

▽十年先読めぬ政治が情けない

○ロボットに介護されてる未来像てる代(幽雅)

今回は全く同じ句があった。これは同想没の運命で、着想も表現も申し分ないだけに全く惜しい。

○大臣と金を未来の的にする

栄翁

分らないこともないが、ひとりよがりの句

▽大臣の夢は国債ふくれ出す

○技術の進歩が未来築き上げ

晩翠

標語のような内容表現になっている。

▽クロノンの技術進歩が恐ろしい

○二千年未来を信じ今日を生き

よしこ

二千年と未来は同義語に近い。どちらかに絞り込むといい。

▽来世紀の幸せ信じ今日を生き

○茶髪の子明るい未来を継がせたい

舞夢

継がせたいの表現がひつかかる。

▽明るさで未来を拓く茶髪の子

○ウイスキー未来を語る人は逝き

賢治

未来を語るは現在形。逝きは過去形。一つの句の中で矛盾する。

▽ウイスキー未来語った人は逝き

佳句

子の未来親が勝手な夢をみる

美智子

ベビーカーが未来を乗せて初春の街

賢

子の寝顔先ざきの夢見せてくれ

サト子

少年の澄んだ眼にある未来

煩惱児

ピンコロで終焉の美飾りたい

未来像老人力も尽きました

未来からこぼれて地下の街に住み

政子

戦争のない世にしたい来世紀

トキ

未来派と言われた人も過去の人

尚士

新世紀夢託される二進法

純

子の未来譲るルールを光らせる

洋子

未来図を明るい色に塗っておく

君江

迷うのもいいさ未来に拓く路

梓

子が画く未来見守る母の膝

茂代

平凡な未来でいいと手を見せる

徳三

少子化に未来重たくのしかかる

美子

七曲り過ぎて未来がまだ読めぬ

彰雄

子の未来案じて無駄な苦勞する

芳江

初詣で未来に賭ける絵馬ずらり

一步

未来には夢がありそな玉手箱

邦昭

(ガンダロと母の母の像はない)

緑骨

橋架かり島の未来へ夢紡ぐ

純子

(紡ぐの表現は立派)

バラ色の未来夢見る花時計

つよし

(下五がいい)

ロボットを飼ってボタンを押すくらい

和可

(未来の核心を突く)

私の句

次世紀を見たい一心竹を踏む



# 本社十二月句会

十二月七日(火)午後五時半

アウイーナ大阪

暖冬の油断をついて、季節通りの寒波に見舞われた七日、百三名の参加を得て、本年度最終の本社句会は、定刻開催の運びとなった。はじめに十一月七日亡くなった参与松川杜氏の冥福を祈り一分間の黙祷を捧げる。

お話は編集長の奥田みつ子さん。

月刊誌川柳塔が出来上がるまでの概略、編集にまつわる裏話や苦労話、投句者からの問い合わせなどの日常体験を話す。

事務所で投句その他郵便物の受取りを克明に記録して下さっているのですい分助かっていると言つう。

校正は一応原句に忠実に行っているが、方言や言い回しの違いがあり、一々電話で疑問は確かめている。

翻車魚をマンボウと読み、咲わせるを、わらわせると読むなど、教えられることも多い。川柳塔誌をよりよくする為に、同人誌友の御協力と、気づかれたことの御指摘などを要

請してお話を締めくくる。

初出席に大阪市の安達はじめ氏を迎える。月間賞は宮西弥生さん(八尾市)に輝く。(司会―ダン吉)(記名―澄子・朝子)(受付―ルイ子・千歩)

## 席題「鐘」

岸野 あやめ 選

ふんわりと今年も生きた除夜の鐘  
コンピューターに惑わされまい除夜の鐘  
煩惱も悔いも捨てたい除夜の鐘  
アベックのあの日と同じ鐘の音  
掘ごたつ二人静かに除夜の鐘  
梵鐘の歴史たずねるスニーカー  
鐘の音心にしみる過去を持ち  
鐘は今ひとつの恋が終る音  
柿落ちて鐘の音も冬法隆寺  
みおつくし二人を永遠に結ぶ鐘  
青い瞳の坊さんが撞く除夜の鐘  
寺の鐘母極楽の音と聞く  
何度でも鐘鳴らしては拝む孫  
余命表一枚剥がし百八つ  
可も不可も無かった幸へ鐘をつく  
地球への警鐘だろうメタカ減る  
除夜の鐘聞くぞと今年も寝てしま  
新世紀へ期待ふくらむ鐘の音  
嬉しくて哀しくて打つ母の鐘  
高らかに川柳塔の鐘鳴らそ  
鐘の音にやおら鉄とめ手を合わせ  
晩鐘へ詫びて消したい嘘ひとつ

吐 来  
かりん  
夕 花  
かすみ  
靖 巳  
春  
梨 里  
森 子  
金 太  
一 歩  
大 輪  
シマ子  
伽 羅  
勇 太  
澄 子  
楓 楽  
利 昭  
ルイ子  
富 湖  
仁 清  
一 風

入相の鐘に孤高の木守り柿

ふるさととは鐘の音から夜が明ける  
ジングルベル今日一日はクリスマスチャ  
ン三つ鳴つてはにかむのど自慢  
時にわびし時にさわやか古都の鐘  
明日香路できく万葉の鐘のおと  
せめてもの鐘たからかに新世紀  
花束で貴女の胸の鐘打ちに  
私の早鐘打って消えたいひと  
半鐘がポツンと旧街道の村

佳

大和古寺鐘も法話も余韻もつ  
巢立つ子へやさしく鳴らすみおつくし  
飛鳥路の温もりもらう鐘の音  
鐘の余韻は弥陀の足音かもしれぬ  
大根焚き湯気の中から鐘の音

人

鐘三つ鳴らして狂うてきた娘  
入相の鐘盲導犬と聞いている  
胸の鐘君に打たれてから虜  
除夜の鐘鳴りおわるとき二〇〇〇年

天

兼題「ピエロ」

海老池

洋選

ふとある日仮面脱ぎたくなるピエロ  
マークアップ落して自分に会うピエロ  
更衣室ピエロの涙見てしまつ

洋  
紫 香  
泰 子  
利 武  
咲 女  
民 子  
つづや  
仁 清  
萬 的  
希 久子  
千 里  
弥 生  
武 庫坊  
金 太  
柳 宏子  
咲 二  
富 湖  
庸 佑  
満 津子  
充 子

取り立てに鬼の演技をするピエロ  
 基地移転知事がピエロに見えてくる  
 リストラの風はピエロの真正面  
 妻の掌でピエロ演じて半世紀  
 円満になるピエロなら甘んじる  
 楽園に老いたピエロが迷いこむ  
 ふり向けばいつもピエロの役回り  
 四面楚歌ピエロの仮面外せない  
 生きるためピエロ演じた父の靴  
 笑わせて心の裏で泣くピエロ  
 笑わせるピエロ舞台の陰で泣く  
 訃報には触れずピエロの厚化粧  
 みなさんと一緒に笑いたいピエロ  
 生きるためピエロの役も買うてでる  
 本名で呼ばれた事のないピエロ  
 吊り革に紺の背広のピエロたち  
 肩書が邪魔でピエロになり切れぬ  
 喝采の中でピエロの無表情  
 舞台裏みんなじめなピエロです  
 悲しい日もピエロはやはり笑わせる  
 可笑しくて哀しい道化師の瞳  
 笑わせて仮面の下で泣くピエロ  
 メーク落すピエロも明日に夢がある  
 企業戦士がピエロに見えることがある  
 ピエロの父を尊敬してるピエロの子  
 プライドを山ほど持っているピエロ  
 ピエロにはなれず世間を狭くする  
 ピエロだとなわしひとり空回り

隆盛  
 ダン吉  
 森子  
 三男  
 いわゑ  
 度  
 周信  
 愛論  
 たもつ  
 諷云児  
 はじめ  
 柳安子  
 しげお  
 一歩  
 大輪  
 隆盛  
 鹿太  
 柳弘  
 ますみ  
 昭子  
 金太  
 正坊  
 澄子  
 楓楽  
 弘一  
 アキ  
 賢子  
 寿美

佳  
 浮かれてもピエロは過去を語らない  
 舞台裏ピエロの素顔千してある  
 裏果ててピエロの涙みてしまふ  
 酔いまわりほんとに泣いているピエロ  
 家庭では尊敬されているピエロ  
 人  
 結局はピエロだったと悔いの酒  
 地  
 大声で叫んで見た日のピエロ  
 天  
 本当のピエロピエロと気がつかぬ  
 軸  
 棒グラフに追い回されてきたピエロ  
 兼題「ばら」 高田美代子選  
 バラ褒めてバラのいじめにあつて  
 冬薔薇真つ赤に雪に耐えている  
 幸せこつこの主役に似合う赤いばら  
 刺の無いばらをライバルから貰う  
 ばら一輪剪るときめきは癖になる  
 ばらの花浮かべて湯舟からおんな  
 冬薔薇 女ころろがまだ読めず  
 クリスマスボインセアを憎むばら  
 紙コップに挿してもバラは薔薇の貌  
 ばらの花大屋政子を死なさない  
 雨足を見上げるばら科の憂うつ  
 過去はもう問わずにおこつ冬薔薇  
 贈られたばら一本に寝つかれず  
 周信  
 諷云児  
 求芽  
 昭子  
 文  
 正雄  
 勇太  
 保子  
 とし子  
 螢  
 文秋  
 英子  
 冬葉  
 房子  
 正坊  
 度  
 みつ子  
 しげお  
 定男  
 たず子  
 典子

男殺しのばらはいつでも血に飢える  
 その棘で噂にされたばらの罪  
 色即是空鉢のばら赤くなる  
 ばら凍るやがてぐしゃつと潰される  
 ばらに刺 女は刺をひた隠し  
 四季ばらの色あざやかにぬくい冬  
 曖昧なあなたにあげる白いばら  
 孤独にはなりたいくはない朱い薔薇  
 とどめ刺すばらだ油断は出来ませぬ  
 白いばら活けて一日喪に服す  
 ばらの花ロングドレスが好きらしい  
 頑張った自分を飾る白いバラ  
 嬉しくて黄色いばらを買ひ占める  
 唇を噛んだ数だけ咲かすばら  
 つる薔薇をセコムがわりに絡ませる  
 バラとロゼ君が二十歳になる零時  
 バラは未だつばみで封印されている  
 蘭もばらも葉つばのフレイディから学ぶ  
 よく見るとばらにも冬の貌がある  
 佳  
 刺のないばらが潮時考える  
 エリートにされて悲しいばらの花  
 サスペンス不幸な役を背負うバラ  
 バラの棘憎い男がひとりいる  
 バラ贈る男臭さをつけ足して  
 人  
 しばらくは気高いばらとして香る  
 地  
 神様に考えがあるばらの棘  
 雅文  
 求芽  
 メ女  
 富湖  
 洋  
 笛生  
 信子  
 澄子  
 寿子  
 泰子  
 伽羅  
 アキ  
 扶美代  
 賢子  
 保子  
 つづや  
 森子  
 楓楽  
 寿子  
 久美子  
 靖巳  
 柳宏子  
 重人  
 愛論  
 扶美代  
 保州

天

軸

下さるなら野ばら下さい誕生日  
四季咲きのばらは何やらお人好し

泰子

兼題「憎い」

都倉求芽選

憎しみのパワで人が殺される

志千代

憎しみを溜めないように底を抜く

螢子

憎し理由A3ノート5枚分

正子

地雷を憎むコソボの児には春遠し

一風

法の華 白切のドン憎い顔

柳弘

戦争を憎み日の丸愛すべし

洋

時効になった罪が大手を振っている

咲二

灯を消した後から憎しみよみがえり

はじめ

待ち呆け噴水小僧も憎らしく

萬的

憎しみを捨てると月も丸くなる

周信

その昔憎んだ姑も星になり

典子

憎しみの一つは甘くみた他人

弥生

心の妻はあなただけで憎い人

度

憎むほど人を愛した事がない

つつや

憎しみを捨てたら軽くなるのに

ダン吉

憎い奴遠く去って冬のまま

義子

憎んだらあかん罪はわが頭上

森子

憎むのはよそつ心が寒くなる

千里

ええとせ隣は才色兼備です

仁清

ブラス志向へ憎しみ少しずつ消える

かりん

暗闇へ消えた男に石を投げ

シマ子

夜明けまで眠れないから憎まない

茜

憎いのでだんだん好きになれました

紫香

憎まれ口きくと元気になるわたし

義子

憎めない人に振り回されている

義

憎しみの形が変わる秋の空

扶美代

憎むとは悲しい夕日に手を合わす

高栄

憎まれてわたしは季節風になる

信子

憎しみを捨てよう冬の風浴びる

ダン吉

憎んでる間に虹は消えてゆく

アキ

憎らしい父にも温い背ながある

諷云児

憎いけどご飯はちゃんと炊いたげる

月子

佳

憎しみが消えてきれいな顔になる

典子

憎らしい奴だが娘くれてやる

諷云児

子に返る病が憎い母の老い

遠野

憎からぬ人の視線が気にかかる

みつ子

あいつの弔いを見てから死ぬつもり

咲二

人

人を指す指がいち番憎めない

冬葉

地

憎んだら明日へ橋が架からない

森子

天

愛憎のはての煙がまつすぐに

たず子

軸

杜的さん奪った霜月の憎い闇

西出楓楽選

兼題「憎しい」

惜しまれることなく孕寿おくられる

志千代

別れを惜しむつるべ落しの茜雲

満津子

その中の金持だけが出し惜しむ

弥生

惜しいなああれで酒さえ飲まなけりや

利昭

陶工の意地惜し気なく壺を割る

萬的

引退を惜しむ花束両の手に

利武

埋もれるには惜しい男の都落ち

諷云児

あと一日待てばバーゲンだったのに

アキ

屁理屈をたんと並べて負け惜しみ

かりん

カミソリの異名を惜しむペンも逝く

雅文

ああ惜しい一字違いのはずれ籤

笛生

拾てるには惜しい大志を抱いている

鹿太

骨惜しみせぬヘルバーさんの手をかりる

ますみ

粗大ゴミにするには惜しい長火鉢

泰子

いい腕を持つ棟梁の賭博好き

メ女

惜しむ間もない葬儀屋の手際よさ

千里

惜しまれて去りたし力あるうちに

金太

紅葉はらはら惜しむ人なく過疎に散る

典子

退職を募れば惜しい人混じる

一風

その知恵とやる気もつたいない詐欺師

保州

未亡人のこる若さを惜しまれる

鬼遊

惜しむらくは八つあんだ熊さん消えた路地

茜

技のデパート惜しまれ去った舞の海

慶一

気が付けば賞味期限は昨日まで

仁清

惜しまれて去るタイミングむずかしい

三男

銀メダル僅差で負けた汗ひかる

かりん

惜しむから身辺整理まだ出来ず

昭子

行く秋を惜しむが如く中座消え

慶一

握る手が別れ惜しんで離れない

賢子

哀惜の弔辞に仏こそはゆい

靖巳

名を惜しみ老いを見せない原節子

正坊

手折らねばあと幾日は咲いた花

あやめ

佳

惜しむ名も惜しむいのちもない暮し  
惜しめない敵の拍手に諭される

咲二  
久美子

カルテには惜しい人とは書いてない  
後のまつりを悔やんでも惜しんでも  
ほしがつて人があるから惜しくなる

瑠美子  
美代子  
義

言葉惜しんでまごころが宙に浮く

みつ子

惜しまれて柩の蓋がしまらない

しげお

好きだから何をあげても惜しくない

たもつ

軸  
実力出し切った惜敗 惜しまない

兼題「結ぶ」

橘高薫風選

新妻のいやに可愛いたて結び  
どの花と結ぼう赤い実がほしい  
結び目に妻の不満がよく溜まる  
善人と結んで退屈しています

とし子  
正子  
剛治  
いわゑ

結んで開いてみんぞ飛んで行った  
ペガサスと結ばれている回転木馬  
蝶結びの待つクリスマスがくる

重人  
度

従いて来いその一言で結ばれる  
結ばれてからは重たい鎖です  
結び目が出来て夫婦に味が出る  
父と子としっかり結ぶ腕相撲

昭子  
冬葉

人生の結びにドナーカード持つ  
花結び短い秋を愛される

保州  
希久子

ひとり住む祖母が結んでくれた髪  
故郷の香が男結びの荷で届き  
流水とならば結べる北の島  
大地震地球の裏と結ばせる

紫香  
遠野  
雅文

亡き人と心と結ぶルミナリエ  
法話聞くと弥陀と凡夫が結ばれる  
風船に結ぶ神様への手紙

孝美  
周信

或る時は馬鹿にもなつて手を結ぶ  
一筆箋に見えねば君だとすぐわかる  
結び目を起承転結など要らぬ  
男結びの堅さに女意地を出す

大輪  
信子  
シマ子

ヒレ酒が結ぶ小雪の舞うひと夜  
結ばれぬドラマが好きな昼下がり  
結び目に愛のジョークが覗いてる  
結び目をジャブで締め合う倦怠期

民子  
靖巳  
笛生

くしゃみしたぐらいて結び目がとける  
還暦を過ぎて敵とも手を結ぶ  
ネクタイを結んだ鬼が攻めてくる  
結び目をほどくと軽い飢えにあう

楓楽  
章久  
夕花

七五三わが家の柿も実を結び  
薬師寺の塔新旧の結ばれる  
蜜すこし垂らして結び目をほどく  
倦怠期ダンゴ結びになっている

保子  
咲二  
重人

結ばれるまでは標準語で話し  
結び目はほどけるのにまだ夫婦

文  
義

男結び解くと思わぬものが出る

楓楽

天  
結び目にくると男が居なくなり  
宮西 弥生

軸  
ほどける日思わぬでなし乾杯す  
(清記・希久子)

平成十一年度本社句会皆出席者(順不同)

橘高薫風 石森利昭 芳地狸村 和田つづや  
鶴田遠野 田辺鹿太 榎本吐来 安藤寿美子  
藤井正雄 大内朝子 海老池洋 川久保睦子  
小林周信 清水利武 川原章久 春城武庫坊  
河内月子 鍛原千里 山本義子 高田美代子  
前たもつ 宮口笛生 高杉鬼遊 平松かすみ  
高杉千歩 榎本露児 金井文秋 西口いわゑ  
西出楓楽 阿萬萬的 吉村雅文 神夏磯典子  
榎山隆盛 長浜澄子 一本勇太 岸野あやめ  
堀端三男 三宅保州 中澤伽羅 宮崎シマ子  
榎本舞夢 石原靖巳 吉川寿美 山本希久子  
玉置重人 森下愛論 江口 度 岩佐ダン吉  
小池しげお 川島諷云児 嵯峨根保子(54名)  
出口セツ子 竹内満寿蔵 奥田みつ子  
月間賞杯永久保持者は川上富湖さん  
月間賞は1月嵯峨根保子・2月川島諷云児  
3月原みさお、4月安藤寿美子、5月金井文  
秋、6月谷口義、7月川上富湖、8月和田つ  
づや、9月太田扶美代、10月米田恭昌 11月  
奥田みつ子、12月宮西弥生。天位3回は富湖  
扶美代、みつ子と並んだが12月に富湖さん天  
位受賞計4回となり、川上富湖さんに決定。

# 柳界展覧

## 吉本川柳

第8回「運」 選評 河内 天笑  
 投句先 5425 大阪市中央区難波千日前11-6  
 〒0075 吉本文芸館 (06-6664317799)  
 投句締切 1月11日 (便箋に3句以内・80円切手5枚同封)  
 没句評価 1月28日 (金) 午後6時 吉本文芸館

## 新同人紹介

和泉 あかり  
 薫風・天笑・満秋推薦

★平成11年度NHK学園全

国川柳大会は10月31日、国立市で開かれ、本社同人の福田登美さんが受賞した。

### ＜NHK賞＞

寺の鐘 田舎の時間やわらかし 福田 登美

なお、特選に西原艶子さんの「らくらくと消してみせます女の火」が入選。

★出雲総合芸術文化祭川柳大会は11月6日、出雲市民会館で開催、本社関係の秀句は次のとおり。

ちよんぼしをとても大事

にしています 川本 畔

私の宝は口がついている

岡 あきら

大猿雉子宝の分け前貰ったか

園山多賀子

宝物母から継いで母になあつた。

岸 桂子

天網恢恢お巡りさんが立っている

森 茂美

生きてゆく勇気枕から貰う

松本 文子

半分は笑って暮らす事に

城 多喜

半分はたしなめている寺の鐘

川本 畔

なお、城多喜さんが出雲市長賞、松本文子さん・川本畔さんが出雲市川柳連盟賞を受賞。

★和歌山県主催「紀州山の日記念作品コンクール」川柳の部「うばめがし賞（最優秀賞）」を同人の山根めぐみさんが受賞、11月7日にビッグホールで表彰式が

力瘤

田中 みね

★第20回川柳塔鹿野みか月

川柳大会は11月14日、鹿野町山紫苑に165名の参加を得て開かれた。本社同人の受賞は次のとおり。

＜鹿野町長杯＞

暖かい色で寂しい身を包む

新家 完司

＜鹿野郵便局長杯＞

声落とす森は深みを増してくる

黒川 紫香

＜川柳塔鹿野みか月賞＞

力にはなれぬがせてめて熱いお茶

吉川 寿美

なお、西川和子さんがジゲ起こし推奨知事訪問記念杯を受賞した。

その他の入賞句は次のとおり。

指切りをする為爪を切っている

尼 れいじ

海までの蛇はこの世の花筏

林 瑞枝

火の中で貴男の背なかだけを見ている

小谷美ツ千

まだ一文字も記されていない火のページ

上田宣子

仏さまとゆっくりお茶を飲んでる

小島蘭幸

そして終りは大事に包まれるいのち

松本文子

テレビ消す

新家完司

どの彩を溶いても母を画き切れぬ

奥谷 彩子

根っこまで見せて仲間にして貰う

川上 富湖

日常を大事につなぐ母の首

八木 千代

生きているかと長風呂を  
覗かれる 岸本 宏章  
桃のような初孫抱いて幸  
に酔う 永井三津子  
★西宮北口川柳会二十五周  
年・句報三〇〇号記念大会  
は11月23日、西宮市民会館  
で109名の参加を得て開  
かれ、本社同人の秀句は次

のとおり。  
すやすやと眠ったままの  
宮参り 黒田 能子  
宮大工 今日も柱を覗ん  
でる 岩佐ダン吉  
戒めがやさしく響く亡母  
の数珠 長浜 澄子  
二十年 釘一本も打たせ  
ない 富山ルイ子

大切な人に大事にされて  
いる 神原 文  
約束を果たしたようにば  
らが散る 西口いわゑ  
生涯を無料奉仕で飯を炊  
く 川島颯云児  
ふり返るから年寄りにな  
るのです 田辺 鹿太  
おやじの名知ってる人と

銭湯で 黒川 紫香  
名人の迷いに誰も気づか  
ない 石原 靖巳  
▽人事往来△  
■11月14日、川柳塔鹿野み  
か月第20回記念大会に薫風  
主幹・紫香相談役は同人多  
数と参加した。

いたしました。素晴らしい  
記念品として家宝にしたい  
と思います。  
▽住所変更△  
■中塚礎石氏(同人名簿P  
13)〒678-0005相  
生市大石町14-14電話番号  
は変更なし  
■鈴木政子さん〒649-  
2211和歌山県西牟婁郡  
白浜町1688-2はまゆ  
う荘梅2号室電話0739  
-42-2980

## 川柳塔碑合祀法要

その日は朝からあいにく  
の雨であった。秋晴れは長  
続きせず、11月12日、高野  
山奥の院へ着く頃は本降り  
となり、時々雨足は激しく

なったが、本年度物故者合  
祀法要は午後1時から、大  
霊園内川柳塔碑の前でおこ  
そかにとり行われた。

地に到着して、碑の周りの  
掃除をし、岳人副理事長は  
前日に参詣して色紙が供え  
られていた。

テントが張られての法要  
であったが、焼香の足元を  
濡らして吹き込むほどの雨  
足であった。法要が済み休  
憩している頃、雨は小止み  
となったので三々五々奥の  
院の御廟へと参詣をする。

訂正とお詫び▲  
■11月号P7(川柳塔)  
上段9行目空海展の盆の数  
珠→空海展の金の数珠  
■12月号P27(川柳塔)上  
段10行目臨界を→臨界も  
■P130(ひとこと)上  
段1行目世紀末の.新世紀  
世紀末と新世紀



新合祀者は柳葉鶴丸・内  
芝登志代・上田柳影・水田  
民平・吉岡美房・矢野佳雲  
本田恵二朗・一瀬福一・岩  
倉天彦の9名である。2遺  
族3名、五年間毎年弘前市  
からお参り頂く村田善保氏  
の御遺族はじめ18名の参列  
者があった。

天笑理事長は一足早く現  
事を終了した。

▽おたより△  
■原章峰氏「わざわざカセ  
ットテープを送って頂き恐  
縮しています。生れて初め  
て自分の肉声を聞き、出雲  
訛がいっぱい入っていて色  
々勉強になりました。

▼訃報▲  
■福元みのる氏(同人・藤  
井寺市)は11月6日、脳内  
出血のため死去。86歳。





毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

高槻川柳サークル卯の花 川島諷云児報

生きるとは小さな罪をくり返す  
罪意識なくなる階段のぼるたび  
大過なく責任果たし任終る

無口だが責任はとる葉つ葉服  
責任者出て来い地球はエルニーニョ  
重責を果たし男に箔がつく  
責任の汗は男の匂いする

一杯のコーヒーで秀句がひらめいた  
自分史のベンコーヒーと小休止  
コーヒー追加そばにも少し居たいから  
歩きつかれて自販機がす缶コーヒー  
カブチーノ無しでは両の眼が開かぬ  
モカの香にどうやら和解したらしい  
告白したコーヒー館がいまもある

母の知恵借りて渡った川の幅  
知恵借りて来た一本本提げている  
まだまだとシヤネルの五番ふり掛け  
師匠にはまだまだ遠い三昧の音  
父の背が大きく見える七光り

活 恵 求 芽 あきら  
杜 的 波留吉 治三郎 英一  
リイ子 スミ子 稲子 澄子 節子 庸佑 和歌子 白溪子 重人

老いの勘まだまだ捨てたものでなし  
まだまだと欲が器を溢れだす  
人間をテトラポットにする企業  
透明な空気がほしいスリガラス  
床の間に花を知らない壺がある  
やれば出来る錯覚杖にして老後  
愛妻家温みと帰る御座候  
FAXで僕の似顔が飛び出した  
枕もとに夢がたたんでおいてある  
今年こそ女の傘はもう捨てる  
いつか来るきつと来るひとりの飯茶碗

東大阪川柳同好会

森下

愛論報

美しい女ほんのり毒を匂わせる  
毒を持った花は蝶でも知っている  
星影のワルツ踊っている宇宙  
台所妻と言う名の小宇宙  
宇宙から覗かれている露天風呂  
白い杖ふれあい貫う地下の駅  
日の丸の白が何だか嘘くさい  
紫の恋白に近づくと白になる  
草に寝て宇宙のパワーひとりじめ  
自自公の名で公約が化けて行き  
僕の論吉すぐ漱石に化けたがり  
善人に化ける目じりを下げておく  
鉛筆の下書きのまま眠っている  
貧しくて淋しくて眠るしかない  
この眠りまだ男には託せない  
追伸の母のカナ文字秋を読む

義一 靖巳 高栄 とし子 秀女 一笛 紫香 泰雄 晴美 光穂 美弥子 晋吾 朝子 千里 猪太郎 鬼遊 みつ子 いわゑ 萬的 たもつ 湖風 東雲 シマ子 雅文 愛論

旗色を読み間違えた風見鶏  
アンコール女ひとりを演じます

川柳塔おっぱこ吟社

木村あきら報

介護保険解らぬままに幕が開き  
最後まで切札信じ賭けている  
夫の背が丸くなったとふと思う  
新米を送りつづけて過疎に老う  
鎖から解かれた思いの退社ベル  
ヒョットコの顔をするのも芸のうち  
二度の職また生き甲斐を取戻す  
角張った話を逸らす丸い顔  
宴会で先に取られた十八番  
いつからか初心忘れていた情性  
角砂糖お湯に入ると溶けてくる  
角付けた鬼は怖いと限らない  
どの神が聞こし召したか合格し  
自負はあるけど時代は変りすぎ  
義理の母孫の顔みて角取れる  
竹トンボ幼き夢を乗せて飛ぶ  
また一つ罪をつくって月に詫び  
誘われて元気を貰う遊歩道

川柳塔みぞくち

小西 雄々報

書道展作者の名前すら読めず  
同窓会渾名呼びあう好い出会い  
待合室名前呼ばれるまで長い  
誘われた鬼の名前が出てこない  
カタカナの花の名前はすぐ忘れ

恭昌 惠美子 貞月 まさる 文仙 マツエ 玲子 治延 いさむ かおり 放任 ひかり 吟笑 輝夫 坊太郎 勝 なみ子 よしみ はつ恵 チカエ 豊枝 鈴枝 静江 和代 正光

— 127 —



女房の声が變つた要注意

党名が選挙のたびに變ります

早變り黒衣の技と息びたり

變り身の早いおんなの泣きボクロ

氣まずさに負けず約束して帰る

昔喧嘩思い出せば氣まずいな

氣まずさをジョークで救う氣の配り

行く雲に氣まずさをせている小春

徳利から氣まずさこぼす繩のれん

氣まずい場孫の一言笑い声

氣まずさに時の氏神孫の声

りストラで氣まずくなつた飲み仲間

氣まずさにます二次会が別になり

落ちた彼とおつた俺も氣まずいな

適当な言葉なので一礼す

豊中もくせい川柳会

田中

正坊報

丘の上幸せそうな家が建つ

コスモスが咲く丘で聞きたい話

電氣メス今日も人命救うたか

恋人のようまといつく静電氣

介護用ロボット停電などするな

二十世紀電氣進歩と共に歩み

アバウトの予算が合つてホツとする

家の者知らぬ私の得意技

やりくりの得意な妻の返し針

得意技發揮 満場酔つている

ズキズキと尾てい骨に響くお世辞

県警が木の葉で隠す身内犯

正安

セツ子

勝

和歌子

敵子

吉太郎

祥風

桂子

よろう

善守

正三郎

雪子

実

千里志

喜美子

母達者 宅配便の荷が届く

無口でも温い灯があり父の部屋

誕生日もだんだん嫌になつてくる

子には子の思惑があり策を練る

齒車の噛み合わせぬ日も夫婦箸

許されて始めて知つた親の愛

おべんちゃら言われ財布の紐ゆるむ

お茶漬けで仕上げる老いのグルメ旅

母の味たつぷり見せて茄子の彩

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

まっすぐに歩け歩けと手をたたく

まっすぐに歩けぬ靴の片ちびり

痺れた手こすつてこすつてなんまいだ

げんこつのはきはやっぱり本物だ

本物にしたくて注意し叱られる

何よりもあの笑顔です若さです

目の高さかえると本物見えてくる

本物と信じて生きるネックスレス

がっかりとしたが毎日めしは食い

南大阪川柳会

吉川

寿美報

螺鈿の色も鮮やか正倉院御物

魯山人の名器は京の秋を盛る

親月宴名器出番の新能

眼も食べる名器に盛つた旬の味

輪島塗り母が持たせたお重箱

体型にとつてもこだわり持つ女神

一笛

慶子

諷云児

庸佑

きく子

柳宏子

知香子

周信

メ女

車から降りた女神は酔っていた

ちややとされて女神にある奢り

本當の汗を知らない名譽欲

名譽には無縁な老父の菊作り

地位名譽なく平凡に生きている

言い勝つて減法きつい坂になる

減法強い酒だが後が悪すぎる

名譽職いっぱい持つて飢えている

挫折した壁は減法厚かった

アメリカには減法弱い総理殿

痴呆の母女神のように穏やかに

妻の目とはとくに期待などしない

名人が睨むと駒が冴えてくる

信頼の目と目が話すボランテア

見ただけで息吹伝えてくる名器

目の付け処が違つさすがにベテランだ

膝折つて同じ目線で悟す妻

目いっぱい働いているおかみさん

きびしさが裏目になって子が背き

くつと女は強い他人の目

犬にでも分かるらしい温か味

五分五分へ勝利の女神まだ思案

母さんの五本の指は名器です

核発言党の名譽が首を切る

サークル檸檬

小林

一夫報

温もりが恋しと枯葉吹き溜まる

好きなどと言わず言われず続く恋

迷いから覚め一こまの恋終る

東雲

久峰

朝子

憲太郎

ひさ乃

楓楽

章久

道子

凡子

度

咲

幸子

太郎

千里

慶一

文秋

たもつ

直子

正博

なぎさ

文枝

庸佑

アキラ

とみを

澄子

みつ子

智恵子

疑心暗鬼さしの目盛も一瞬凝視  
糖衣錠ですっぱり包む恋ひとつ  
ほどほどの嘘で弾んでいる会話  
良心にときどき狸寝をさせる  
想う人いつも雪山向いていた  
下り坂になれば先頭きる自信  
明日へ出す為にかかえている手紙  
熱燭としばし浮世の外にいる  
群がりていのちの色の赤まんま

川柳塔まつえ吟社

恒松

町紅報

雅子 房子 靖巳 楓楽 義子 希久子 あずき いわゑ 薫

すぐ側の人が枯れても真似しない  
今年また生きて枯れ葉と対話する  
余生まだ枯れ木に花で紅を引く  
枯れやすい花をだんだん好きになる  
裏山の枯れ葉の匂い嗅ぎに行く  
松枯れて温い言葉が欲しくなる  
暗がりの魚荒々しく光る  
魚にも言い分がある覗んでる  
月並みな魚で恥じることばかり  
雑踏で無口になってゆく魚  
煮ても焼いても海を向いている魚  
鯛の目にもいわしの目にも天がある  
花道の役者の背なが泣いている  
尻に敷く妻が役者が上である  
搦め手はうちの母ちゃん役者だね  
笑わせるコツ心得ている役者  
おん花に笑顔こぼれる村芝居  
小宴は役者もおらず飲むばかり

哲雄 太泡 邦代 知恵子 和歌子 義良 登美子 日出子 主詩朗 久枝 桂子 彬 草丘 幸子 たけし 煩悩児 米子

香水をしみじみと嗅ぐひとりの日  
しみじみと二軍の妻の強き知り  
しみじみと小さくなった母のこと  
しみじみと古里思う野菊咲く  
一徹な丸い背しみじみ黄昏れる  
銘柄は問わぬしみじみ飲んでいる  
青空に掃かねばならぬ雲がある  
掃きだめに鶴がおりたと騒がしい  
落葉を掃こうと老人待ち構え  
掃いたのに落ち葉広げる今日の風  
落ち葉掃く朝あの人に逢いたくて  
掃いてある玄関晴れの荷が届く

川柳塔わかやま吟社

牛尾

緑良報

午朗 芳枝 秀子 静恵 多賀子 昌枝 すみこ 茂美 静江 ひふみ みえ 町紅

中心に自分を置くことと狂いだす  
土に生き土の息吹を貰う  
乗り越えることを喜ぶ父の壁  
お互いに背伸びを止めて歩が揃い  
一坪の土にも四季の花の彩  
一等米土の手柄を褒められる  
球根に來季の夢を託す土  
土瘦せて年々花も実も細る  
土捏ねて作る青磁は僕の壺  
突き当たる壁がシビアなサイン出す  
白壁の胸に落書きしたあな  
話半分聞いて尾鰭をつける壁  
仕切る壁除けばみんな地球人  
壁くずし通う心をつなぎ合う  
背伸びするたびに崩れる未来絵図

保州 精子 富湖 三男 稚代 豊太 泰子 英子 吞天 富美子 裕美 良一 高夫 寿子 佐代子

背伸びして生きても釈迦のなごころ  
背伸びしたままで終わった理想論  
わき腹をくすぐられ背伸びに気付く  
中心は優しいけれど皆他人  
輪の外に立つて中心見定める  
中心で陽気にしゃべり出すメロン  
中心をばかして話やわらう  
中心に置かれ器の貌になる  
傾けぬ宿命背負う心柱  
中心に据えて似合いの人は君  
明日が呼ぶまだ中心に燃えるもの  
ああ昭和父が中心だった頃  
中心に温いフォローの風送る  
心に壁もたず二世帯まるく住む  
壁の向こうで来るな来ると言っている

三幸川柳教室

三宅

保州報

ポイントが多くて迷路出られない  
ポイントになるかも知れぬ某挿す  
対角線引いてポイント解けてくる  
目覚めたらポイントを先ず切りかえる  
終章の旅でポイント合つてくる  
あの世へのポイント稼ぐ寺社参り  
ポイントを揺する女の鼻濁音  
ポイントと昔話のしたい貨車  
ポイントを稼ぐとライバルが増える  
ポイントを外れた釘が笑い出す  
ポイントを稼ぐにもってこいの月  
気の抜ける人と茶漬の旨いこと

千寿子 輝子 ヒサヲ 健三郎 紀美女 優子 勝 和子 正博 忠翁 良 克子 めぐみ 和重 太茂津 マリ子 正匍 三千子 和代 町子 栄之進 朱夏 光男 当代 章子 桂香 登美代

友の愚痴聞いたら抜けて行く自信  
迷路抜けコップの水に酔っている  
可愛い女ちよと抜けてるところがよい  
抜苦写楽にぎり合う手にある希望  
抜け道を知って草履が軽くなり  
ライバルが視野に入って抜き手切る  
手の内を見抜きとほけている策士  
抜け殻を晒して哀し蛇の思慕  
背伸びしているライバルは追い抜ける  
抜くチャンスなくて宝刀錆びたまま  
貧乏神せめてしばらく離れてよ  
しばらくの夢に溺れるシンデレラ  
しばらくのおあずけ尻尾振りながら  
久々に計報で踏んだ里の土  
言い勝ってしばらく胸にある凝り  
束の間の幸せでした薬指  
しばらくの休みください介護の手  
しばらくのご無沙汰詫びる花手桶

大原川柳社

矢内寿恵子報

健三郎 起世子 美智子 満洲子 初子 美子 鉄治 和子 保州 豊太郎 正一 みね 千秀 嘉平 さち子 百合子 公子 碧 地佳平 はじ芽 あすな るみ 絹子 静子 昭子 ひでの たづ子

酔うほどに愛想良くなる夫の酒  
いろいろと選った見合いが舞い戻る  
選っている積りはないがまだ独り  
七人の敵に愛想振り回す  
長し短し選るのじやないが嫁きおくれ  
器量良し愛想があればもつと良し  
愛想良し孫に財布もゆるみがち  
選る道は男度胸の決めどころ  
星ほどこの中で選んでくれた夫  
本当に選ってないのかすぐ離婚  
良い人を選んで来たとはめてやり  
線引きに洩れてあしたを見失う  
何かある無口な父が愛想する  
備わった愛想自然に出る温味  
反抗期親も言葉を選っている

川柳ささやま社

酒井

靖子報

みさえ 美佐子 南花 敏子 こふゆ 巴子 喜美子 悦子 辰江 妻子 あや子 玉恵 さちこ みづえ 寿恵子 恵美 純子 多美子 美智子 八重子 とみ子 つや子 かほる すず子 かつ子 君代 ヒサ子

子が巣立ち横目で通る運動会  
発表会園児の名札胸を張る  
虫干しのなつかし品に時過す  
腹の虫イクラ握りの寿しが好き  
胸三寸だまされてやる親心  
はちまきを結んで板前店の顔  
結び目の緩みを直す旅の宿  
無農薬虫が安心して食べる  
実を結ぶ花です風よそつと吹け

横浜あおば川柳会

菱田

満秋報

絨子 富美子 美紗子 美緒子 房江 泰郎 芳住 靖子 廣和 亜希子 絹子 早智 純峰 裕敏 サト子 ふみ 鈴美 道子 徳三 政勝 八重子 あかり 街湖 嘉信 省子

鳥つ子が都会の塵を塗りたくり  
見直しは迫る選挙にある誤算  
入院日迫り身辺整理終え  
検診日近く始める微調整  
人情が首筋なめる島の風  
島巡る医師に訴え溜めておく  
晴れの日の胸の造花が活きている

### かわはら川柳会

上田

俊路報

三代代親子の絆渡り初め  
米寿までなお子と思う母の胸  
たこの糸切つても切れぬ親子糸  
事あれば絆が強くものを言い  
世間体みえぬ絆に左右され  
豆のつる添え竹いっばい伸びてゆく  
背伸びして生きる姿が地に着かず  
この道ののびるむこうに住むあなた  
欲の手を一寸伸ばした荷が重い  
逆風にもまれ決断伸びる日日  
杉木立祖父が流した汗で伸び  
寿命のびこころの介護間に合わぬ

### うぶみ川柳会

上田

宣子報

石橋を叩く棍棒太くなる  
貸す耳の右と左で散る火花  
限られた暮しの中に虹がある  
追い風がいつも吹くとは限らない  
順調な出足ぐんぐん引き離す  
棒グラフ沈んだままで伸び悩む

句多留 和多可 雅子 かつ子 笑子 潮華 満秋 一薰 余吏子 静子 秀子 ふじ子 登生 聰 正子 寿子 泰良 悦子 俊路 雄人 ひろこ 良雄 静生 あづま 天雀

棒暗記したが台詞に味がない  
疲れたる寝るに限ると高軒  
限りある資源ひとつも減らぬこみ  
背が曲る棒を背すじに通そうか  
煩惱をぐんぐん伸ばす秋なかば  
ねばり腰の限界知つているお灸  
はめられたはずみ借金断れず  
限界を残していれば夢がある  
ぐんぐんと近寄つて来る向う岸  
この笑顔貸しますうまく使つてネ  
ぐんぐんとグラフを伸ばし将を射る  
棒針が脇目もふらず喜劇編む  
天狗の鼻ぐんぐん伸びて折れちゃった  
君が居る限り死ねない影法師

### 尼崎尾浜川柳会

田辺

鹿太報

お隣のおやじ顔みりや呑む話  
立案はなぜかいつもお母さん  
原発の事故偶発と言わせない  
コテージをまるごと秋の色で染め  
偶発のなだれに吞まれし普賢岳  
口下手で手帳いっばいぐちを吐く  
お祝いにバラの花束孫の案  
金木犀匂い二度目の職につく  
不意に来た父の痴呆愕然と  
休耕田にコスモス見事妻の案  
「ハイ」と答え気軽に動く孫が好き  
よく熟れた柿を見ながら冬仕度  
言い訳は聞いてないのによく喋り

孝男 ユリ子 天人 華子 螢 葉士人 也恵 健一 一枝 くに お 黙光 登美枝 雅女 宣子 哲嗣 和歌子 鹿太 イサミ モトコ 亀与子 まさ 六浦 勇次郎 弘治 夢之助 美智子 正治

### 川柳ねがわ

江口

カーナビに教えを乞った恋の道  
立案のロボット妻に味方する  
子と二人回り道する市場籠  
子の希望入れる立案からまとも  
邪魔にならんが二千円札出るらしい  
結び目をそつとゆるめて秋の天  
一番長く拍手送つてくれた母  
皆の無事確かめ母は箸をとる  
食卓を囲むことから和が生れ  
食卓の何時も決まった父の場所  
食卓の広さ佗しい独り酒  
塗りはげた丸チャブ台で老夫婦  
招かれた食卓あつたかい赴任  
目で合図知らず内幕喋り出す  
今晚のブロックサインは妻が出し  
子が合図送っているが気付かない  
携帯の合図が今日のデート決め  
腰重い客に妻から目で合図  
いつかきつとかなしい合図するだろう  
キズ物も試作も並ぶ陶器市  
会場におかれ作品光り出す  
作品にしたい案山子のニューモード  
作品が百年たつて評価され  
画用紙を足してキリンが画けました  
作品のセンスで分かるお人柄  
作れない人がきびしい批評する  
魂をこめて無口が土捏ねる

満寿蔵 十四郎 柳宏子 紫香 度報 小路 茜 光洋 文秋 利昭 順三 日出子 亜成 庸佑 博泉 たもつ 忠央 勇太郎 礫 あやめ 恵子 とし子 三郎 仁清 波留吉 弘一 修

幸せは我が作品で飲む抹茶  
議事堂の屋根だけ見てきたフルムーン  
国会のカメラ居眠り探してる  
国会を丸写しした牛歩劇  
国会の顔が小粒になってきた

### 倉吉川柳会

松本よしえ報

けんかでもするよな若さ買えんかな  
喧嘩していつもの倍の飯を食う  
窓たたく時雨も人が恋しいか  
江戸つ子は情にもろくて喧嘩好き  
原発を守る政府がにらみつけ  
好きだから貴男と喧嘩などしない  
ほうし蟬つくつくすと恋しくれ  
しぐれの風情濡れて知る年になる  
因果かな私ばかりに時雨降る  
しぐれても君をかばって濡らさない  
大根のやさしい味に食進む  
喧嘩してその後キュッと抱きしめる  
ダイコン役者何にも怖い物はない  
大根と鯨が煮えたら父帰る  
たつぷりと時雨に甘い辞書を繰る  
人生は喧嘩の出来るうちが花  
大根を煮ながら株を考える  
一期一会約束守る初句会  
冬も良し大根の味酒の味  
江戸城は天下を守る顔である  
子の喧嘩親の肩書きちらつかせ  
大根も器量よしから売れている

かすみ 一笑 一風 高栄 ルイ子 志郎 智子 よしえ 幸子 小生 美ツ千 悠子 天雀 節子 玲坊 ゆり子 一夫 和歌子 康子 ちよ子 季芳 水歌 完司 次男 喜美子 秋草

大根で命洗えるおでん鍋  
守備範囲ひろげて守り浅くなり  
武士の沽券守ってくれた高楊枝  
無人市決まって大根並んでる  
通り雨カバン頭に子が走る  
子を守る獣の目に隙が無い  
おしんから大根めしの味を知り  
九条が守れぬ時が近く来る

### 川柳塔唐津支部

松涛庵正剣報

孫達の通園通学我が家にも  
献血の血が病人を作ってる  
姑の介護偉いと大見出し  
苦吟して空を茜の雲にする  
死に急ぐ人数万の福祉国  
お土産は宅急便で先帰る  
英魂の渡り鳥たち故郷へ  
肩書ははずして湧いた生きる欲  
的確に小銭で払う衛生車  
木枯しや身軽になって行く銀杏  
病身の友が仲間の方立行司  
捕鯨碑が朽ちた港でイカを干す

### 竹原川柳会

時広

一路報

十三男 克枝 玲子 久枝 和枝 賀寿恵 かつみ 実 輝夫 勝視 水笑 タミ 幸夫 晴翠 高明 虹汀 四郎 正剣 孝枝 節生 蘭幸 高千 史子

神妙な顔で着ている七五三  
商人が仕掛けた服を着せられる  
試着室夫が大きな声で呼ぶ  
紫を着込むと秋が深くなる  
子が跳ねる青空つづくどこまでも  
野仏の眩しき野山晴れわたる  
いらいらが晴れて今日からお茶の会  
霧晴れて瀬戸の海には船ばかり  
天高し晴れ間に残る飛行雲  
曇りのち晴れの予報で出て濡れる  
秋晴れのニュース聞かれぬ昨日今日  
出合いから一人の傘が重くなる  
無重力で泳げる旅を待っている  
リストラの重みに耐えている影よ  
投書箱一枚ずつにある重み  
よろしくと書いた名刺が重くなる  
ゆっくりと体重計に乗っている  
鮎の目に重く流れる秋の川  
この坂を越えると軽くなるつづら  
土砂降りが続いて水が重くなる

### はびきの市民川柳会

徳山みつこ報

夏喜 笹舟 貞子 菁居 比呂子 栄恵 喜久恵 美佐雄 規代 力 喜美子 正宏 房枝 一風 静子 笑子 不朽 節夫 一路 美喜 昇 たいし 泰子 かつみ みよ子

スタッフも来果てたとエゴサッチー  
好評は裏方さんの力添え

四三郎 武

スタッフが事の成否の鍵握る  
スタッフの若さで挑む新世紀

章司 絢子

スタッフに一言居士がいの重み  
母さんがにやにやしてはれたかな

澗庵 満寿蔵

にやにやを仮面に替へて押すチャイム  
にやにやもほどほどですよ婦人科医

敦子 昭平

思惑がずばりと当りほくそ笑む  
思い出は真つ赤に錆びた肥後守

俊男 志洋

身から出た錆とあつさり諦める  
リストラで安易に企業錆おとす

潮華 庸佑

肝心なところで曲がる錆びた釘  
錆ついた頭ひたすら孫を待つ

吐来 利武

代議士になったが心錆びている  
錆付いた鍵と同じの私です

一壺 敏

錆落しするため秋の旅に出る  
核という錆で果てるか地球号

みつこ 専平

錆止めを塗ってるような厚化粧  
声を時々かけて下さい錆びぬよう

美代子 重人

錆びるのが厭でしつかり飯を食う

川柳大坂 坊農

柳弘報

しあわせが風と一緒にやって来る  
かまへんと嫁さん内緒手をつなぐ

高2 主 信醉

母さんの限界ケーキ8個迄  
限界を悟りやさしく生きて行く

まゆ子 芳香

限界と悟ってからは運がつき  
性格が守らせている休肝日

照月 隆司

性

甘えたき夜はワインでVサイン  
目で甘え言葉で甘えさすがプロ

楽子 かよこ

世の動きジツと見ている風見鶏  
イヤリング嘘と甘えを聞き分けて

咲笑 多香

かまへんと許す状況がいます  
医者に脈取って貰えはる風邪

美花 河南子

限界だ握り拳がふるえる  
外国に甘い政治が気に入らぬ

青道 川童

この勇気背を押す風に支えられ  
追い風を待ちくたびれた蛙の子

柳昌 朝子

注入の金で献金するバンク  
学歴に甘えておれぬ職探し

本蔭棒 鉄心

台風さんたまに休めよ疲れるわ  
限界に挑む男にない妥協

喜楽 雅果

影法師我が道を行く友として  
小さな嘘連れ去る様に母の風

洛醉 一風

限界のはるか手前で妥協する  
かまへんと大見得を切る空財布

まつお 比呂志

渡り鳥逆風に乗り遠く飛ぶ  
風船が飛んだ町から嫁が来る

希久志 金太

風止んで雲間の月の美しき  
どたん場でやつと人間らしくなる

笑風 重人

数え唄風もやさしいフルムーン  
飽食に甘える妻の好き嫌い

柳弘 柳弘

川柳塔みちのく(前月分) 小寺

花叢報

俺の宿何処にもあるとホームレス  
逆転のカードに残る手の脂

龍人 隆樹

泥酔でベンチに泊まり風邪をひく

力誠

ふるさとに泊まる安堵が酒という  
鍋底の傷がまだまだ疼き出す

きよし 島

秋過ぎてハインゲが冬に來て泊まる  
旅の宿菩薩の顔で湯につかる

花峯 岳水

赤い嘘吐く唇をふさがれる  
Uターン丸いポストに逢いたくて

和香子 黙人

しあわせはまだあるよとのひらに  
かあちゃんに逆転されて平和くる

ツネ 雅城

親馬鹿でまだまだ抜けぬ仕付け糸  
自画像に少し濃い目の赤を引く

花匠 ふさふ

再会を果たした赤いハインネック  
赤い実を食べた小鳥がよく喋る

墓情 順風

打つ手なく赤い反旗はもう振れぬ  
逆転はもう望めない錆びた釘

紅雨 北歩

シグナルの赤を無視した日を悔いる  
しげる

ヒサ子 しげる

川柳塔なら 坊農

柳弘報

若い二人菊の季節に燃えましたが  
若者に負けじと若い愚あがき

美和子 李世恵

自画像をちよつと若く描いて  
六十路坂これから赤い服着よう

幸代 さと美

もう若くないでと胃粘膜ばやく  
かげに咲く菊の匂いはうすくとも

巨牛 孝子

見残した夢を余生でふくらます  
左遷地で芽吹く若木に励まされ

夕花 たかし

若さとは一直線にもの申す  
父親が敬語を使う世と変わリ

あやめ 天狗

法を守るやさしいことが難しい

章久

かけ違いボタン直した均等法

また一羽タカが孵化した立法府

若僧と言った人の世話になる

冒険心まだ燃えているループタイ

新品の命保育器蹴っている

法犯すスリルに若い血が揺れる

菊一輪秋の帽子が弾み出す

若さっていい両手に光る風

若いんだ冒険の夢食べちゃった

鎮守の森の奥に秘密基地がある

ダンス服着こなす妻が若く見え

ゼロ戦と若い命をのんだ海

自画像がぐーんと若く描きあがる

濡れ衣を着て再審の遠い道

菊香り心静かに茶を点てる

それからの話だんだん若返る

法医学どこまで許す人のエゴ

若いっていいなよく食べよく笑う

冒険をしたくてタコが糸を切る

### 京都塔の会

都倉

求芽報

少子化の波に年金さらされる

年金の許す歩幅で生きている

未練まだあるが去る者追わぬ主義

去り際の言葉が波紋呼んでいる

夏が去り秋が去りして皺の数

兄弟喧嘩去んでしまつてそれつきり

若者が去って棚田の土が裂け

職去つて土に親しむことに決め

庸佑

去る人へ見せてはならぬ泪顔  
去る人の影が尾を曳く秋の道  
去つた後組織変らず動いている  
この場限りの酒が二人を熱くする  
母の目の中で遊んでいる砂場  
場違いの人が来てから喋れない  
正座からあくぐらになつて座が和む  
いつもの人がいつもの席に居る安堵  
その場になり狼狽えている七光り  
見せ場ない父のドラマの幕おりの  
すかたんですませてならぬ臨界事故  
すかたんをしても笑いのある手品  
明るくてスカタンな子見限れず  
故郷の泳ぎ覚えた川も荒れ  
怖い夢三月目は退院させられる  
もつたないもつたないといひで食べ  
長生きを心の隅ですすみません  
心から善女の顔で彼岸寺  
散らけつぱなし誰も来ぬとは限らない  
鯨雲見ると旅に出たくなる  
消灯のこれから夢と遊ぶとき  
病床へ庭の菊です 香をとどけ

チサ子

谷底の景気紅葉まつ盛り  
それからは無職と書いた軽いペン  
熱愛が国籍の棚乗り越える  
やつとこき定年という解き放ち  
笑い続けるモノリオな風と行く  
熱愛はシナリオのいい風と行く  
定年後のしい電話待ってます  
せめてどこらいつも狂わぬ妻の勘  
人生に定年という折り返し  
底無しの沼で景気の浮き沈み  
不景気な顔は見せないウインドー  
景気よく初日上昇れ二〇〇〇年  
不景気も普通の暮しでつづがなし  
定年の節目夫婦が脱皮する  
景気良い話の裏で焼くサンマ  
省みて喜怒哀楽のながい道  
余つ程のことか娘の口答え  
景気とは無縁コツコツかたつむり  
定年の夫と一日長すぎで  
葉を落しあすの力を貯めている  
敵ですか味方ですかと聞く愚か  
食欲の秋を待つてはる市場籠  
定年体内時計未だ馴れず  
井の中で比べるもののない奢り  
次世紀の扉を開く子供の手

喜美子  
欣史子

— 134 —

茂雄

真理子

とし子

富子

高栄

眞生夫

道子

洋子

春蘭

桜竜

秋泉

直子

まつ子

良一

水魚

千歩

和夫

秋雄

寿美

去る人へ見せてはならぬ泪顔  
去る人の影が尾を曳く秋の道  
去つた後組織変らず動いている  
この場限りの酒が二人を熱くする  
母の目の中で遊んでいる砂場  
場違いの人が来てから喋れない  
正座からあくぐらになつて座が和む  
いつもの人がいつもの席に居る安堵  
その場になり狼狽えている七光り  
見せ場ない父のドラマの幕おりの  
すかたんですませてならぬ臨界事故  
すかたんをしても笑いのある手品  
明るくてスカタンな子見限れず  
故郷の泳ぎ覚えた川も荒れ  
怖い夢三月目は退院させられる  
もつたないもつたないといひで食べ  
長生きを心の隅ですすみません  
心から善女の顔で彼岸寺  
散らけつぱなし誰も来ぬとは限らない  
鯨雲見ると旅に出たくなる  
消灯のこれから夢と遊ぶとき  
病床へ庭の菊です 香をとどけ

磯

紫香

葉子

とし子

飛鳥

典子

吉之助

波留吉

正坊

満子

百合子

宏子

春蘭

てる

しげお

高栄

達子

年代

武庫坊

故杜

美的

美穂

### 城北川柳会

神夏機典子報

定年後どんぐり仲間と跳ねている  
きらいな豆泣いて食べてる小さな孫  
アジアから責められている戦後処理  
地球儀に景気良いのはどのあたり  
こんな字も忘れていたり秋の風

静枝  
登美子  
政子  
寿美子  
チサ子

### 川柳若葉の会

宮崎シマ子報

用意した言葉失う通夜の席  
天国へ行けるシナリオ用意する

喜美子  
欣史子

トヨ子  
とし子  
はじめ  
史風  
達子  
ただし  
あやめ  
求芽  
一枝  
白峰  
典子  
倫子  
みえ  
高栄  
睦子  
久留美  
小路  
朝子  
あい子  
千里  
昭子  
千歩  
順三  
柳宏子  
公一



用意ドシわたし一人が出遅れる  
まだ用意せぬまま老いのど真ん中  
風化したまさかへ用意忘れがち  
募金箱赤い羽根から秋がくる  
省略されたページに残る秋の風  
人形はおもちや箱から嫁に行く  
蓋開けて乙女にもどるオルゴール

# 岩美川柳会

## 石谷美恵子報

本籍はタムの湖底に沈んでる  
不景気の帳簿紅葉に似るあわれ  
葬儀屋がはりきっていたある予算  
数え唄天神さんの紅葉です  
男ざかり女ざかりも過去のこと  
青空へ心の扉開け放つ

入籍が済めば遠慮のない欠伸  
友達のを去をほじくる嫌な女  
はりきって登った樹から降りられぬ  
お互いに過去にはふれぬ方がいい  
母になり過去の履歴書ぬぎすて  
ある別れ紅葉も散って急かされる  
大船に乗って扉の中に住む  
愛ひとつ胸の扉を開けて待つ  
入籍は未定同棲十五年  
苦労した過去があるから強く生き  
自分史に消したい過去も少しある  
この家の喜怒哀楽を知る扉  
こじ開けた扉から夢飛んで逃げ  
頼られてはりきる傘が開かない

能子 香住 シマ子 慶子 弘直 清芳 あずき  
單車 大漁 忠良 蟹郎 蟹 孝男 静生 一夫 季芳 圭一郎 和歌子 一京 きみ子 睦子 公乃 芳江 節子 裕子 たぬ 美恵子

## 尼崎いくしま川柳会 春城 年代報

ぬけぬけと立ち読みをして客帰る  
ぬけぬけとおのろけ言える年になり  
ぬけぬけと嘘吐く人と今判り  
ぬけぬけといばついても底がない  
ぬけぬけと時計止まって居たなんて  
ぬけぬけと私の小骨抜いてゆく  
木の実落つ谷は自然の彫刻師  
魂のぼろぼろ欠ける都会の谷間  
毒舌の谷間に本音落ちていた  
渓谷の風は突如と冬になる  
紙ヒコキいていねいに折る風の谷  
トラブルの谷間で留守にしない耳  
スヌーピー抱いて寝た子が嫁に行く  
無になりし姉に返す紙人形  
着せかえは思いのたけの紙人形  
人形の目線の先にある空虚  
雨粒より小さい野の花晩秋に  
早口にうっかり乗ってすぐ返事  
懐かしい友も老けたり菊贈  
消防車わたしの胸も火事である  
デジタルで聞くとあなたの声は虫  
ひとり居の部屋暖房費が嵩む  
構図からはなれた馬の逞しさ  
秋の風無人の駅を通り抜け  
ミイラ展出て考える 芋かぼちゃ  
コスモスの道でふたりの肩が触れ  
病より介護保険が苦しさう

あり余る自由の中で飢えている  
台風一過素焼きの鉢を二つ買う  
川柳クラブわたの花 吉村 一風報  
父の肩子の踏み台にかしてやる  
飾り合う秋の山山せわしない  
日の丸がほんとに晴れて陽の目みる  
おはようがチャンスになった仲直り  
飾らない言葉の温い河内弁  
お見合いの飾る言葉ににじむ汗  
飾り棚並ぶ人形目でさわる  
巻頭を飾る句を読み吐息つく  
ビタミンがたっふり入る母の味  
出雲の神も赤糸もつれ苦勞する  
手ぶらでとんでも言われ迷ってる  
着飾った妻は他人の顔になり  
もうとうに限界来てる夫婦仲  
巻き尺の人が野菊を踏みにじり  
ひとは人亀の甲羅にある誇り  
着飾って妻嬉しそうクラス会  
飾るほど作り話がうまくなる  
びったりの服に合わせてダイエツト  
世界一涙で飾る金メダル  
手抜きした料理光らすサクランボ  
好きだから嫌いと言っているのです  
飾らない心の友がいてくれる  
飾らない人に本音が出てしまふ  
雷が恋のチャンスをもたらした  
飾ること無縁な母のたすき掛け

静 昭三 信子 奈良司 友甫 朝子 一風報 道子 隆盛 幸枝 隆盛



無駄のないめりはりのある話しぶり  
亀の子に心安らぐ昼さがり  
イヤリングまさか牛でもあるまいが

### 翠洋会

児玉

新しい道にあちこち犬の糞  
窓の外賑やかにゆく七五三  
地道行く小石とハミングしてる足  
あと少しもうせかせかと歩くまい  
男には妻に言えない道がある  
畔道に想い出残る野の仏  
窓ふく手師走の風が追いかける  
寄り道をした人だから面白い  
寄席はよし黙ってみんなよく笑う  
人の道はすれ冷たい風に遭う  
就職難一步踏み出す道がない  
懐かしい桜並木をツカファン  
白寿の手黙って握る里帰り  
沈黙の臓器を泣かす飲んだくれ  
白い粉制服道を踏み外す  
蛙の子は蛙期待が重すぎる  
真っ直ぐな道を歩かす親の背な  
ゆずり合う道はひとすじ老夫婦  
生き残る道をひたすら走るだけ  
期待され操縦桿が重くなる  
一浪も無駄でなかった回り道  
台所父黙々と母の風邪  
寄り道でうちわ話を聞かされる  
沈黙の絵画が語り継ぐ戦記

寿代  
美千子  
鬼遊

蛙報

舞夢  
日の出  
伽羅

叡子

志華子

真砂

蕉子

義春

蛙

さと美

会美

喜美子

靖巳

久峰

澄子

照子

絹子

宣司

東雲

周信

正雄

恭昌

正坊

### 川柳塔きやらばく

政岡日枝子報

文明の利器扱えず後ずさり  
病名がまた一つ増え冬の風  
固い頭切り替えてから同居する  
逝く雲も私も忘れ上手なり  
ふところを動かぬ駅が一つある  
鬼のような声で日めくり追っている  
子が果立ちやがて私の振り出しに  
一握りのプライドに賭け笑顔する  
獣も私も生きる為の業  
休火山の種火触発まっている  
来た道を修正しつつ繋ぐ夢  
目が覚めて目覚し時計鳴るを待つ  
早回りで立ち止まる冬の暦  
これからの道は一人で風を切る  
出生届窓口広く開けてある  
今日もまた計の便りあり散る木の葉  
秋冷の菊酒に酔う妻の乱  
偶然に画面が映す遠い姉  
ボンと押し一声かけてくれた彼  
灯を消して明日こそ鳥になるつもり  
珈琲を挽いて時雨をやり過ごす  
川柳塔おとり  
原みさを報

初枝

寿々子

玲子

ゆき

千春

日枝子

晶子

春枝

蘭

なみ

てい子

天雀

田鶴

富美子

スミエ

恵子

麗

瑞枝

八重子

千代

荒介

羅奈

伝住

愛恵

半畳

川柳の小径かっぱに迎えられ  
句碑祝う一行の輪があたたかい  
おだやかな台地で句碑が鼓動する  
振り出しに戻りてなす句碑の丘  
紅葉が心もてなす句碑の丘  
祝い事続いて財布やせてくる  
二度目から祝儀袋が軽くなる  
誕生日小さな鯛を二匹買う  
祝酒よくぞ上戸に生まれけり  
祝砲の嵐の中で醒める夢  
大臣賞祝う電話が鳴りやまぬ  
ビデオでは祝辞はいつも早送り  
遠慮して旗日に旗が立っている  
履きなれぬ下駄が足引く紐落し  
赤飯を背なにヨチヨチ赤い靴  
農を継ぐ子の祝言を待ちわびる  
晩婚を祝儀はずんでよりあげる  
留袖を着てお祝いに花添える  
お祝いを嫌がる程の年となり  
てんこ盛り愛もそろそろ底をつく  
これも愛ワイシャツ白く白く干す  
愛されるより愛することの大切さ  
手作りおやつ一杯愛がある  
夫婦二世別れて知った亡夫の愛  
同情が過ぎて愛だと誤解され  
同居して嫁の愛情めだたない  
川柳塔みちのく  
小寺花肇報

せつ子  
登美子  
和子  
紀子  
孝子  
芳之  
由多香  
水楊  
庸二  
野草  
憧子  
宏章  
栄翁  
ユリ子  
義弘  
夕子  
照昭  
邦昭  
艶花  
艶子  
ゆきの  
清子  
富貴子  
泰子  
仁子

龍人

オリンピック笑うドラマに泣くドラマ

逃げられぬ義理の重さに軋む骨

引き受けた役の重さに空仰ぐ

脇役を演じて夫の蛇を取る

友喪中重い話をじっとときく

階段の降りる姿で年わかり

すぎ去った戦のドラマまざりと

無重力を翔んだメダカに憧れる

激震のトルコに神の掌が欲しい

一枚のドナーカードの重いこと

しがらみの重さに耐えず置手紙

激流にもまれて石は美しい

ベルリンの壁がこわれる偏頭痛

波風を立ててドラマは次週へと

糞虫のドラマは終わる冬ごもり

厚底で階段降りる死の恐怖

主役の座降りて屏風がよく見える

憎しみの重さで石を握りしめ

川柳塔打吹

米田 幸子報

裏口へ仕掛けた罠にはまり込み

裏口が愛しい人の隠れ蓑

裏口に勧進帳が置いてある

蛇の道は蛇裏口を知っており

裏芸がいつの間にかやら表芸

ちよこちよこつま食いして太ってる

父さんは裏口覗く癖がある

裏口は安否確認決めている

子のしつけ姑ちよこちよこ口はさむ

龍 貴 楨 玲 博 久 十三男 久芽代

力 誠 きよし 敏 人 紅 雨 ヒサ子 てる 隼 人 順 風 銀 波 ふさゑ 花 匠 雅 城 ツ ね 隆 樹 花 峯 一 花 島 五 葉 庵 幸 子 報

運動会カメラちよこちよこ邪魔をする

豊作の田を名月が見て回る

家を建て月賦のおわりに託す

ちよこちよこ独り善がりの種をまく

表は休業奥では大騒ぎ

明智殿裏から抜けて生きのびる

夢のは笑顔裏口から貰う

表では笑顔振りまく鬼店長

裏口が通用門で事たりる

単身赴任ちよこちよこ切れる赤糸

抱きしめられて表舞台を下りました

べつたりは飽きられるのでちよこちよこ

裏口でおもしろいおもちゃ売っている

裏口は29時まで開いている

ちよこちよこ来ては波風立てて去る

哀しみはみな裏口が知っている

お隣の修羅をちよこちよこ聞かされる

花野から花野と蝶の渡るなり

お前きれいと云って下さいお月様

あり明けの月が咎める朝帰り

堺 川 柳 会 河 内 月 子 報

あいまいな半日でしたもう寝ます

くさい仲みじんも見せぬ食わせ者

体力は戻らないから若づくり

つんとしたモデルの胸に瑠璃光る

つかい棒も欲しがらぬルーキーだ

アルバムと半日遊ぶ秋の雨

善 江 芳 光 勝 見 一 夫 和 歌 子 玲 子 順 子 瑞 枝 よしえ 美 千 完 司 かつみ 石 花 菜 富 枝 螢 雄 々 荒 介 節 子 幸 子

半日をボーッとしたい時もある

好きなこととして遊んでる小半日

つまずいても一度赤いルーージュ塗る

現実に戻る大きな溜息だ

どんくさい奴ちや自分に言うている

貴賓席のにおいがわたしには合わない

中途半端な半日だった腕時計

佃煮を持ってきたのに留守でした

疲れたら戻つてきたくて待つ地酒

戻れないきのうがごとく美しい

古臭い服にいつぱいある思い

時々臭い芝居もして暮らし

自転車で半日ほどの家出する

切り替えに半日かかる石頭

半日の逢瀬に命かけている

半日を待てば思いが遂げられる

バタ〜くさいお顔で和服似合てはる

みんな戻つたみんなが年を取っていた

澄ます澄ます半日丸くなり

半日もすれば許せる程のこと

待ちぼうけ惚れた弱身の小半日

辛い日々も忘れようルミナリエ

日本で一番くさいノック知事

蹟いてもう幾年か流転の世

川 柳 高 知 川 竹 松 風 報

鬼の面外すと外は温い風

姿見に鬼の形相映し見る

庭掃除鬼門のところ念を入れ

愛 宏 英 夫 正 五 郎

紫 紀 美 女 五 月 かりん 哲 平 扶 美 代 美 代 子 みつこ りつえ 泰 子 ちや子 梓 千 代 冬 虹 半 銭 舞 夢 伽 羅 美 子 楓 ア キ 勇 太 つづや 錦 玄 也

気の毒で貸したばかりに鬼にされ

角かくしいつしか鬼になる証

祭り笛次第に枯れて行く田舎

看板と屋台ばかりの文化祭

しとやかな娘が咲可切る祭り

ガス灯の臭いが消えた夏祭り

汗かいて納涼祭と言うまつり

親も子も孫も祭りの棒踊り

これからのローンを思う地鎮祭

三味線も田舎歌舞伎と共に生き

三味線一筋に生きた女の裏話

三味の音に踊る阿呆の血が騒ぐ

その昔吹雪に耐えた津軽三味

あの窓を開けたら私翔べるかも

窓越しに四季の移ろい知るベッド

里帰り車窓の柿が熟れている

## 富柳会

池

森子報

強情なぶどうに種が二つある

小指噛み遠いメモリー呼びもどす

無力なり喜劇の中心で生きる知恵

メモリーを手繰り寄せてる上野駅

選ぶのはわたし断るのもわたし

夢は未だしっかり刻を食べていく

たこ焼きと新婚乗せた飛行雲

神裁く女被告の風の詩

舌つづみとつてもうまい嘘の味

乱れ萩散るべく風に逆らえる

まぼろしや風を集めて白昼夢

栄珍

熊男

かす子

圭二

孝雄

快風

功幸

圭風

典雄

佳風

てるみ

松風

美々

和江

良雄

幹夫

宏

三和子

あかり

たかし

ひろこ

東雲

信博

勇太

春蘭

夕花

残されたページへ選ぶ絵の具いろ

怠惰を選んだあの日からの微罪

人を指す時の人さし指は嫌

それからは握手の指が伸びきらぬ

点滴の音に入れ替え虫の声

選ばれた命それぞれ花の種

一冊を選んでぶらり一人旅

暖簾酒出れば諭吉と泣き別れ

塩昆布が薬のように膳にある

そよ風にほほをなでられ老いをみる

メモリーに過去の足音だぶらせる

選んだのはあんたで私バカでした

秋はらはら泣くのはひとりいる時に

メモリーはバラと涙につつまれて

日の丸が簾笥の奥で眼を覚まし

青雲の日から昭和の鎮魂歌

神様のような彼女でものたりぬ

厳選のあとに残ったのはあんた

多数決で選ぶと彩が褪せてくる

川柳藤井寺

高田美代子報

大ジョッキ美人が二杯空けている

幸せをつかみ損ねた大きな手

大空が好きで南方へ散った兄

土壇場で大好きな人あらわれる

大物と言われ続けて平のまま

大物は浮世の風に流されず

大まかな男で丸い輪が出来る

心ない手抜き大きなウラン事故

信子

アキ

潤子

夕子

一夫

一慧

和子

浩二

昭水

光子

義清

晴美

美代子

けい子

勇

紅紫朗

花梢

欣之

森子

栄一

よしえ

みよ子

敦子

志洋

悦子

和樹

史郎

大事件オーム・カレーと世紀末

大海に飛び出して行くある孤独

実印にためた手のひらがすこしある

ためたためた手のひらで汗ばんでいる

二つ三つためた道にはずむむ

ためらわず進んだ道にはずむむ

ためらいを一気に払うコップ酒

二の足を踏んだ道にも赤い花

ためらった分足跡が曲がってる

父の胸にためた傷が一つある

とんとんと進むためたためたから

薬玉が割れるためたためたをよそに

ためらいの一步へ母の手が伸びる

直角に生きて元気のいい男

直角に伸びる影はまだ元気

直角の枠を飛ばないあかんたれ

ストレスが直角になる影法師

意地を通した影が直角に曲がる

直角に曲がるジグザグ笑う靴

直角を丸く囲んでいる家族

父の徹直角のまま落ちてくる

爪切りの音をとばして秋の夜

恒雄

修六

重人

瑠璃子

鐘造

昌子

昭子

絹歌

六点

夕花

正一

和子

扶美代

利武

桂子

喜代子

花梢

美代子

婦美枝

かつみ

アキ

春蘭

## 大阪川柳の会

とき 2月2日(水) 17時開場 ところ 22号室  
サンケイビル本館3階322号室  
選者 叩く・藤原一志・天根夢草  
予報 高田美代子△大きい・磯野いさむ  
各題2句 席題なし 会費800円  
時締切 各題秀句に産経新聞社賞



## 福元みのるさんを偲ぶ

辻川慶子

十月十日、川柳塔まつりにみのるさんの姿はありませんでした。みのるさんは律義な方で大会には必ず出席されていたのに……

二、三日後、お宅へ電話すると九月十九日、脳内出血で羽曳野市城山病院に入院、すぐ手術されて経過は良いと聞いてひとまず安心。

その後しばらくしてお尋ねしたところ、十一月六日に亡くなられ、七日に密葬を済ませましたとのこと、あまりの突然に言葉もありません。先ず薫風先生にお知らせしました。

奥様のおっしゃるには、少しよくなられ歩くりハビリをしようと言っていた矢先に、風邪を引かれ呼吸困難になられたそうです。

たしか九月の教室も出席されていました。思えば、あの日お顔を見たのが最後になりました。

みのるさんは髪は黒ぐろ、顔はつやつや、とても若くて元気な方でした。NHK教室、産経教室と長いお付き合いでした。

NHK学園では、川柳と同じく書道もずっと続けておられました。書道の展示会の作品などは夜中の三時頃まで書いておられたそうです。奥様は「主人は夜行性で困ったものです」とおっしゃっていました。作品展が高麗橋の美術倶楽部であり、産経教室のグループと見に行ったこともありました。NHK会長賞を貰ったと喜んでおられたのも、昨日のことのように思い出します。

その他、健康食品のお仕事もされていて、体の事、くすりの事に詳しく、あちらこちら講演に行かれていました。

コーヒー店で一緒にいる時は、はじめは雑談をしても何時の間にか、くすりの話になり話が長くなってくるのです。こと、くすりの話になると熱が入るようでした。私たちも体調の悪い時、相談したり、教えをいただいた事もありました。

今思えば、今年になって時々、教室を休ま

れることがあり、用心をして休まれている位に思っていました。まさか亡くなるなんて、思いもよらぬことでした。人の命は分からないものだつくづく思いました。

みのるさんは教室の前の席に座っておられました。今はポツンと空いて本当に淋しい限りです。

みのるさんの句（平成十年）

仲良しはジュース飲むにも同じもの  
半世紀雪の思い出遠くなり

薬もつ減らしましように元氣出る  
何よりも恩師の説教いいくすり  
日々ニュース サスペンスより度肝抜く

（平成十一年の句）

この頃から少し気が弱くなられた様子。

長生きもこの辺という歳になり  
病む身には師の計の知らせ突き刺さる  
老いて子に従うわけを分かち

戒名 釋 稔豊 八十六歳

ご冥福を心からお祈り申し上げます 合掌

天国で講義しているみのるさん 慶子

明けましておめでとうございます  
ことしもよろしくお願い致します

米子 川柳塔きゃらぼく

|   |    |   |   |   |     |     |     |     |     |   |
|---|----|---|---|---|-----|-----|-----|-----|-----|---|
| 木 | 神  | 門 | 鹿 | 大 | 猪   | 石   | 石   | 池   | 足   | 青 |
| 村 | 崎  | 脇 | 島 | 塚 | 森   | 中   | 垣   | 尾   | 立   | 戸 |
| 富 | あい | 晶 |   | 恵 | スミエ | 時   | 花   | 保   | 由美子 | 田 |
| 美 | こ  | 子 | 繭 | 子 |     | 子   | 子   | 子   |     | 鶴 |
| 子 |    |   |   |   |     |     |     |     |     |   |
| 野 | 中  | 中 | 田 | 鷺 | 白   | 塩   | 澤   | さえき | 小   | 木 |
| 坂 | 野  | 井 | 中 | 見 | 根   | 谷   | 田   | やえ  | 村   | 村 |
| な | 弘  | ゆ | 亜 | 正 | ふ   | 八重子 | 千春  |     | てい子 | 春 |
| み | 子  | き | 弥 | 子 | み   |     |     |     |     | 枝 |
|   |    |   |   |   |     |     |     |     |     |   |
| 吉 | 矢  | 八 | 森 | 茂 | 三   | 光   | 政   | 二   | 福   | 林 |
| 岡 | 野  | 木 | 脇 | 理 | 好   | 井   | 岡   | 岡   | 代   | 林 |
| 文 | 満  | 千 |   | 高 | 寿々子 | 玲   | 日枝子 | 初   | 天   | 荒 |
| 葉 | 子  | 代 | 麗 | 代 |     | 子   | 枝   | 枝   | 雀   | 介 |

# 謹賀新年

大阪川柳人クラブ

会長 磯野 いさむ  
副会長 橘 高 薫 風  
幹事長 西 田 柳宏子

金金梶片海乙岡大尾小榎植上稲板磯井安秋阿  
内井川岡堀倉崎坂谷野本松田葉尾野村藤山萬  
寿文雄湖醉武麻形清楠信美冬岳い俊寿晃萬  
子秋郎風月史子水風眩治子仁葉人む二美朗的  
(五十音順)

関柴塩清坂阪里佐佐後小小小桑黒橘吉北河河川  
口田谷水本上 藤伯藤西西池田川高川 内内島  
き蘭幸斗晴秀小誠英正安幹し砂紫薫寿勝天月諷  
よえ女子升美子路一夫一夫斉お守香風美美笑子児  
云

藤藤深濱早波西西西中中友塚津竹高高田田田惣  
村岡日田野部出田川野尾田本田森田田中中頭川  
垂花白良 白楓柳景恵飛茶清一雀美博新正良笑  
成梢光子知賢洋樂宏子空鳥の子江舎子泉一坊子路  
子

和米吉吉山山山楊森森森村宮三松前堀古藤  
田澤田川本本本井中下 山前好本 江川村  
維俊大晋翠三久二恵愛イ勇秀聖章たとし義  
久夫輔吾公郎美南美論ク太郎子水子もしを清女  
子

献 壽 平成12年

あけましておめでとうございます

## 川柳塔鹿野みか月

第20回記念大会のご支援ありがとうございました。お陰様で盛会になりました。会員一同こころより御礼を申し上げます。

ことし第21回大会は、成人の一步としての開催予定になります。皆様のお力添えを祈念して何卒に、よろしくお願い申し上げます。

|       |       |       |       |      |       |       |       |       |       |        |      |     |       |      |
|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-----|-------|------|
| 顧問    | 小倉利男  | 相談役   | 土橋 螢  | 会長   | 森山盛桜  | 副会長   | 中原 諷人 | 会計    | 中原みさ子 | 事務局    | 徳岡本丸 | 監査役 | 土橋はるお | 山根 茂 |
| 石尾かつ乃 | 乾 喜与志 | 乾 隆風  | 岩崎みさ江 | 大角幸代 | 太田幸枝  | 黒田くに子 | 田村きみ子 | 津村八重子 | 土橋睦子  | 中原汲香   |      |     |       |      |
| 西川和子  | 国森武子  | 吉田孔美子 | 加藤公子  | 高原初子 | 竹森富久江 | 田中きみゑ | 吉田弘子  | 谷口百合子 |       | ほか会員一同 |      |     |       |      |

事務所 〒689-0405 鳥取県・鹿野町鹿野1279 中原 諷人 方

Fax & Tel (0857) 84-2100

川柳塔わかやま吟社

|    |       |    |        |    |       |        |       |       |       |       |       |        |
|----|-------|----|--------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|
| 主幹 | 牛尾 緑良 | 顧問 | 野村 太茂津 | 同人 | 小倉 アサ | 柿花 紀美女 | 川上 大輪 | 川上 富湖 | 桑原 道夫 | 小山 太一 | 坂口 公子 | 坂部 紀久子 |
|----|-------|----|--------|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|

|      |       |      |      |      |      |      |       |      |       |      |      |       |      |
|------|-------|------|------|------|------|------|-------|------|-------|------|------|-------|------|
| 澤田和重 | 塩谷佐代子 | 芝あつむ | 杉山精子 | 田中輝子 | 谷口信子 | 玉井豊太 | 垂井千寿子 | 寺田裕美 | 天満三千代 | 富山光代 | 堂上泰子 | 中井栄美子 | 中後清史 |
|------|-------|------|------|------|------|------|-------|------|-------|------|------|-------|------|

|      |      |      |      |      |      |      |      |      |       |      |      |
|------|------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|
| 中島正博 | 中田誠子 | 中村君枝 | 福田和子 | 福田英子 | 細川稚代 | 堀端三男 | 松原寿子 | 宮口克子 | 宮園射月芳 | 山田高夫 | 横垣忠翁 |
|------|------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|

TEL 073—446—2855



あけましておめでとうございます

# 西宮北口川柳会

例会 毎月第2月曜日午後1時 西宮市立中央公民館

(阪急電鉄神戸線西宮北口下車南西5分)

事務局および投句先

〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本 義子

創立25周年・「きたぐち」300号記念川柳大会は

お蔭様で盛会裡に終了いたしました。

ありがとうございました。

黒正秋浅阿井井上奥奥小小門川亀神菊木

川本元野萬上上田田山熊倉谷見岡原池村

紫香客る子煙松信佳み美江たず絹哲ト貴  
代子エ文子子子藍美子子秋子煙的の子る客香

久黒小小住富長西西長春春藤牧山山吉

保田池林山谷山浜口田川谷長林城城城  
本崎淵村城城川田口浜山山谷林池田保

まさお能上げし周石ル澄い柳春は年武メ富君義笑  
女子お子お信舟子子子子子子子子子子子子子子子

謹賀新年

## 横浜あおば川柳会

|       |        |       |
|-------|--------|-------|
| 菱田満秋  | 菊地政勝   | 布山嘉信  |
| 青柳おぐり | 北沢街湖   | 松土十三子 |
| 秋元和可  | 日下部美柳士 | 三村八重子 |
| 芦田鈴美  | 後藤早智   | 宮村ちよ路 |
| 荒井広和  | 近藤道子   | 保田絹子  |
| 生坂サト子 | 清水潮華   | 八田 敏  |
| 石川ただお | 鈴江純子   | 山下省子  |
| 石原三郎  | 平 達也   | 山中信子  |
| 和泉あかり | 平 のぶ子  | 山梨雅子  |
| 伊藤ふみ  | 田中笑子   | 山廣あらた |
| 巖田かず枝 | 長島亜希子  | 山本為佐子 |
| 小野句多留 | 播本充子   | 山脇智恵子 |
| 金森徳三  | 福島かづ子  | 吉田土風  |
| 川島良子  | 福田由美子  | 吉田裕峰  |

明けましてお芽出度う御座います

本年もよろしく

香川県大川郡白鳥町

## 川柳塔おっぱこ吟社

|     |       |       |
|-----|-------|-------|
| 会長  | 木村あきら | 工藤吟笑  |
| 副会長 | 成重放任  | 植田チカエ |
| 会計  | 川崎ひかり | 池内かおり |
|     | 角尾いさむ | 辻上よしみ |
|     | 甚古正雪  | 田中なみ子 |
|     | 山地マツエ | 堤 くに子 |
|     | 岩倉文仙  | 向山治延  |
|     | 山崎はつ恵 | 神保坊太郎 |
|     | 松村輝夫  | 赤沢貞月  |
|     | 中塚寿々女 | 原 まさる |
|     | 滝井 勝  | 清川 玲子 |
|     | 西岡抱楽  |       |

# 南大阪川柳会

会 員 一 同

謹んで新年のご祝詞を申しあげます

## 高槻川柳サークル卯の花一同

例会 毎月第三木曜日 正午 高槻現代劇場306号室

# もくせい川柳会

宮満松栴藤西辻玉玉田滝住小小岸木岡江安黒橘  
田仲本本村田川置置中北谷林池田村本口藤川高  
禄きただ路ゝ柳慶英重正博石周し知一吉太明寿紫薫  
骨子し児女子子人坊史舟信お子笛郎光子香風

例会は毎月第3月曜日に開いています。お気軽にどうぞ。

新年おめでとうございます

## 東大阪市川柳同好会

会 長 片岡湖風      副会長 吉川晋吾  
句会部 澤村猪太郎      会 計 森下愛論

## 川柳若葉の会

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 吉 | 山 | 宮 | 宮 | 宮 | 古 | 中 | 辻 | 椎 | 黒 | 橘 |
| 田 | 内 | 崎 | 崎 | 本 | 川 | 島 | 川 | 江 | 田 | 高 |
| あ | 香 | シ | 弘 | 欣 | 喜 | 田 | 慶 | 清 | 能 | 薫 |
| ず | 住 | マ | 直 | 史 | 美 | 実 | 子 | 芳 | 子 | 風 |
| き |   | 子 |   | 子 | 子 | 子 |   |   |   |   |

新年おめでとうございます

あけましておめでとうございます

## 川 柳 塔 な ら

|   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|
|   | 吉 | 大 | 坊 | 米 | 中 | 宮 |
|   | 川 | 内 | 農 | 田 | 原 | 口 |
| 会 | 寿 | 朝 | 柳 | 恭 | 比 | 笛 |
| 員 | 美 | 子 | 弘 | 昌 | 呂 | 生 |
| 同 |   |   |   |   | 志 |   |

あけましておめでとうございます

## 八尾市民川柳会

会員一同

あけましておめでとうございます

## 三幸川柳教室一同

事務局 〒640-0112 和歌山市西ノ庄239-23

桜井千秀

あけまして

おめでとうございます

## 京都塔の会

|   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 山 | 三 | 榊 | 本 | 山 | 山 | 山 | 都 |
| 本 | 宅 | 本 | 莊 | 田 | 口 | 海 | 倉 |
| 輝 | 満 | 宏 | 福 | 葉 | 美 | 友 | 求 |
| 美 | 子 | 子 | 子 | 子 | 穂 | 熙 | 芽 |

あけましておめでとうございます

## 川柳ささやま社一同

代表 遠山可住

あけましておめでとうございます

|       |      |       |      |      |      |     |      |      |      |       |     |
|-------|------|-------|------|------|------|-----|------|------|------|-------|-----|
| 高田美代子 | 中島志洋 | 福元みゐる | 川端六点 | 高津三郎 | 赤木和子 | 楠昭子 | 武部敦子 | 福田悦子 | 高田治子 | 太田扶美代 | 他一同 |
|-------|------|-------|------|------|------|-----|------|------|------|-------|-----|

## 川柳藤井寺

謹賀新年

### 岸和田川柳会

|       |       |      |       |      |       |      |       |       |       |       |
|-------|-------|------|-------|------|-------|------|-------|-------|-------|-------|
| 岩佐ダン吉 | 島崎富志子 | 田中文時 | 井伊東吉  | 井齋一齋 | 長谷川呂万 | 堂免路子 | 原苑子   | 古妻敏光  | 柿花昭二  | 高須賀金太 |
| 原さよ子  | 古野ひで  | 寺田甚一 | 村垣鹿太郎 | 内田一弥 | 善野盛之  | 加藤基  | 宮野美津江 | 藪野ケイ子 | 徳庄美智子 | 芳地狸村  |

謹 賀 新 年

# 川柳塔まつえ吟社

同 人 一 同

〒690-0056 松江市雑賀町1686 恒松町紅方

電話 0852-24-5450

あけましておめでとうございます

## サークル 檸檬

|     |    |     |     |    |     |    |    |    |    |    |    |     |     |    |    |    |
|-----|----|-----|-----|----|-----|----|----|----|----|----|----|-----|-----|----|----|----|
| 吉田  | 山本 | 山本  | 古川  | 西出 | 西口  | 長浜 | 友碇 | 鶴田 | 田中 | 田中 | 小林 | 片岡  | 奥田  | 石原 | 浅野 | 橘高 |
| あずき | 義子 | 希久子 | 喜美子 | 楓楽 | いわゑ | 澄子 | 雅子 | 遠野 | 正坊 | 薫夫 | 一  | 智恵子 | みつ子 | 靖巳 | 房子 | 薫風 |

あけましておめでとうございます

## 西宮ローズ川柳会

|    |    |    |     |    |     |     |    |     |     |     |     |    |    |     |     |     |    |    |
|----|----|----|-----|----|-----|-----|----|-----|-----|-----|-----|----|----|-----|-----|-----|----|----|
| 吉田 | 山本 | 山崎 | 林   | 春城 | 春城  | 西口  | 長浜 | 那賀島 | 久保  | 木村  | 菊池  | 亀岡 | 小倉 | 奥田  | 岩倉  | 飯西  | 秋元 | 橘高 |
| 笑女 | 義子 | 君子 | はっ絵 | 年代 | 武庫坊 | いわゑ | 澄子 | 雅子  | まさお | 貴代子 | トミエ | 哲子 | 藍子 | みつ子 | キク子 | ミサヲ | てる | 薫風 |



明けましておめでとうございます

平成12年 元旦

川柳の絆も強くなり五年

## 川柳塔おおとり

会 長 小 林 由多香 他会員一同

産経新聞社  
後 援

## 大阪川柳の会

句 会—毎偶数月上旬・サンケイビル本館3階 322号室  
事務局 〒583-0026 藤井寺市春日丘2-11-12 後藤正一 方

TEL 0729 (53) 5 5 5 2

|   |   |     |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|-----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 竹 | 西 | 大   | 米 | 吉 | 安 | 本 | 濱 | 津 | 砂 | 坂 | 後 | 河 | 岡 | 足 | 世 | 磯 | 代 |
| 森 | 田 | 阪   | 澤 | 村 | 井 | 田 | 田 | 田 | 木 | 本 | 藤 | 合 | 立 | 立 | 話 | 野 | 表 |
| 雀 | 柳 | 川   | 俊 | 雅 | 英 | 智 | 良 | 一 | 啓 | 和 | 正 | 時 | 良 | 淑 | 人 | い |   |
| 舎 | 宏 | 柳   | 夫 | 文 | 華 | 彦 | 知 | 江 | 三 | 樹 | 一 | 弘 | 三 | 子 | む | さ |   |
|   | 子 | クラブ |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |

あけましておめでとうございます

## ほたる川柳同好会

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 出 | 板 | 栗 | 池 | 松 | 田 | 藤 | 嵯 | 古 | 前 | 岡 | 富 | 滝 | 江 | 月 | 湯 | 北 | 高 | 田 | 井 | 橘 |
| 口 | 山 | 田 | 田 | 本 | 中 | 原 | 峨 | 川 | 田 | 本 | 永 | 北 | 口 | 原 | 浅 | 村 | 嶋 | 辺 | 上 | 高 |
| ま | ま | 久 | 善 | た | 蛭 | 桂 | 保 | 喜 | 昭 | 吉 | 敞 | 博 | 明 | 方 | 馬 | 正 | 正 | 直 | 薫 |   |
| セ | ツ | 子 | 守 | し | 柳 | 子 | 子 | 美 | 子 | 郎 | 子 | 史 | 光 | 郎 | 洗 | 安 | 勝 | 三 | 次 | 風 |
| 同 | 子 | 子 |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |

定例会句会・毎月第2火曜日午後・豊中市蛭池公民館



謹賀新年

# 熊本川柳会

高野 宵 草

永田 俊 子

岩 切 康 子

あけましておめでとうございます 平成十二年 元旦

正本 水 客

黒川 紫 香

西田 柳宏子

阿 萬 萬 的

小池 しげお

川 島 諷云児

都 倉 求 芽

藤 村 め 女

竹 内 花代子

奥 山 美智子

富 山 ルイ子

謹賀新年

尾崎川柳協会加盟

尾崎 いくしま川柳会

例会 毎月第一金曜日午後1時

サンシビック尾崎三階  
(阪神尾崎駅西南三分)

尾崎 尾浜川柳会

例会 毎月第二火曜日午後1時半

尾崎市尾浜二丁目五十一八  
尾浜公民館

(阪急武庫之荘北側③乗り場  
市バス④8、尾浜二丁目下車)

両句会共各地句会案内に

掲載しています

迎春 2000年

目指す川柳 愛・生・住

- 今年も
- ・昨日を省み
  - ・明日を希い
  - ・今日を記録する川柳を……

—川柳ねやがわ 会員一同—

会 長 山 本 三 郎

事務局 高 田 博 泉

あけまして

おめでどうございます

はびきの市民川柳会

塩清酒榎吉山森三西徳立川河芦安芸田  
満水井本原本田好村山蔵田井田  
利一吐辰たけ四専りみ信庸絢泰  
敏武壺来子し郎平えこ子晋佑子子

あけまして

おめでどうございます

川柳クラブ

わたの花

神原まさと 村上ミツ子 村上剛治 大内朝子 吉村一風 生嶋ますみ 粂山隆盛 二瓶道子 田中トシエ 松葉君江 平川幸枝 服部春子 川崎友甫 高杉鬼遊  
山本 宏 中島春江 八倉知佐子 乾 美代子 篠原いつふみ 井尻民子 砂田八寿子 與田 明 川口信子 岸本寿代 坂本奈良司 藤本一道 太田恭一 山本美千子

謹んで新年のご祝詞を申しあげます

## うみなり川柳会

〒680-0805

鳥取市相生町3丁目204

電話 (0857) 23-4672

謹賀新年

わかあゆ川柳会

島根県大原郡木次町四六一

小石松福藤鶴河細森庄松菅武渡渡渡  
砂田本間原原原木山司本田島部部部  
白江清泉はるみ利江子美子栄子治子  
子子子子子子子子子子子子子子子子

川 柳 会      梨      花

あけましておめでとうございます

青木夏生 杉森あき子 山本弥生 山脇美佐子 田渕未来 福本佐嘉恵 中村延代 坂本真由美 前田一枝 岩田輪多朗 浅井春生 宮木一夫 石上悦子 坂田和歌子

あけましておめでとうございます

# いずも川柳会

会長 尼 れいじ

会 員 一 同

事務局 〒693-0052 出雲市松寄下町 2 8 4

吉 岡 きみえ 方

TEL0853-22-1068

あけましておめでとうございます

あなたの名句を

記念に残しませんか・・・

句入りタオル、手拭い、の御用命は川柳塔本社まで

タオル・タオル製品 製造卸

株式会社 二 幸

〒558-0041 大阪市住吉区南住吉 1 - 2 - 25

TEL (06) 6606-3625(代)

謹 賀 新 年

# 鳥取県川柳作家連盟

事務局 武 田 帆 雀

謹 賀 新 年

（ご支援をお願い致します）

## 第八回紙上投句川柳大会

締切日 平成十二年二月二十九日（当日消印有効）  
兼 題 各題未発表のもの二句出句

〔獲〕 池 森子 共選

〔拈〕 小島 盛桜 共選

〔角〕 白根 蘭幸 共選

〔川上〕 大輪 共選

自由吟 一句のみ  
自由料 一、〇〇〇円発表誌呈

投句用紙 自由・住所・氏名・所属柳会名記入

投句先 〒六〇一九四 鳥取市湖山町北四丁目八一六

上田宣子（電話〇八五七一一八—〇七六六）

賞 鳥取市長賞他・日本海新聞紙上に掲載

主 催 うぶみ川柳会

後 援 鳥取市・新日本海新聞社

鳥取県川柳作家協会・湖山西地区公民館

あけましておめでとうございます

# 竹原川柳会

〒725-0022 広島県竹原市本町1丁目14-3

小 島 蘭 幸 方

会 監 会

計 査 長

|                            |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|----------------------------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
|                            | 山 | 三 | 古 | 藤 | 古 | 石 | 岡 | 森 | 岩 | 時 | 小 |
| ほ<br>か<br>会<br>員<br>一<br>同 | 内 | 宅 | 田 | 解 | 谷 | 原 | 本 | 井 | 本 | 広 | 島 |
|                            | 房 | 不 | 太 | 静 | 節 | 淑 | 清 | 菁 | 笑 | 一 | 蘭 |
|                            | 子 | 朽 | 虚 | 風 | 夫 | 子 | 水 | 居 | 子 | 路 | 幸 |

明けましておめでとうございます

# 城北川柳会

会長 吐田 公一

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 川 | 川 | 神 | 叶 | 鍛 | 籠 | 太 | 大 | 大 | 宇 | 上 | 石 | 池 | 井 | 安 |
| 端 | 久 | 夏 | 岡 | 原 | 島 | 田 | 川 | 内 | 野 | 田 | 塚 | 田 | 上 | 達 |
| 一 | 睦 | 典 | 史 | 千 | 恵 | と | 道 | 朝 | 義 | 登 | 順 | 寿 | 白 | は |
| 歩 | 子 | 子 | 風 | 里 | 子 | し | 子 | 子 | 江 | 美 | 三 | 美 | 峰 | じ |

|   |   |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 野 | 延 | 中  | 津 | 高 | 高 | 鈴 | 鈴 | 渋 | 坂 | 小 | 小 | 栗 | 喜 | 岸 |
| 村 | 山 | 田  | 村 | 橋 | 杉 | 木 | 木 | 江 | 上 | 糸 | 泉 | 山 | 多 | 野 |
| 美 | み | あい | 志 | 一 | 千 | 政 | ト | 博 | 高 | 昭 | ひ | チ | 佐 | あ |
| 代 | え | 子  | 華 | 枝 | 歩 | 子 | ヨ | 遊 | 栄 | 子 | さ | サ | 津 | や |
| 子 |   |    | 子 |   |   |   | 子 |   |   |   | 乃 | 子 | 乃 | め |

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 森 | 宮 | 三 | 丸 | 真 | 松 | 松 | 松 | 町 | 本 | 板 | 吐 | 長 | 橋 | 野 |
| 杉 | 井 | 浦 | 岡 | 鍋 | 本 | 岡 | 岡 | 田 | 間 | 東 | 田 | 谷 | 村 | 呂 |
| 秀 | あ | 久 | 静 | 藤 | た | 千 | 久 | 達 | 満 | 倫 | 純 | 春 | 容 | 右 |
| 夫 | き | 美 | 枝 | 子 | だ | 恵 | 留 | 子 | 津 | 子 | 子 | 蘭 | 子 | 近 |



頌春  
堺川柳会

山矢宮藤藤福長中寺高小神河河以荒  
本倉本<sub>り</sub>田井田川川井田西原内内倉川  
半五か泰一満東星小月天菜磯  
錢月ん子二三州彰楓雲子雪文子笑々子

堺川柳会カルチャー教室

# エイシスの会

あけましておめでとうございます

和矢安村見樋西中中中田津斉源喜梶海大榎榎河  
田野永上本口内野澤崎中守藤田多本上橋本本内  
つ　　玄ち冬朋健伽深　　なさ八美哲は　　舞日天  
づ　　や　　ぎく千　　る　　の  
や梓春也子虹月吾羅雪紫さら代波平か錦夢出笑

謹賀新年

川柳塔東大阪カルチャー教室

|      |     |     |     |
|------|-----|-----|-----|
| 河内   | 天笑  | 小池  | 政吉  |
| 天野   | 宮子  | 古手川 | 市太郎 |
| 生島   | ますみ | 佐羽  | 三代  |
| 池田   | 南風  | 飛永  | 範子  |
| 石森   | 利昭  | 中岡  | 妙子  |
| 井尻   | 民子  | 西川  | 節子  |
| 伊藤   | 博仁  | 西村  | 哲夫  |
| 井上   | 美智子 | 服部  | 春子  |
| 今中   | 孝子  | 羽森  | 千恵子 |
| 大内   | 朝子  | 早瀬  | 照子  |
| 笠井   | 欣子  | 星野  | きらら |
| かわさき | さよこ | 松岡  | 久留美 |
| 神原   | まさこ | 安永  | 春   |
| 北村   | 賢子  | 山本  | 至   |
| 吉川   | 寿美  | 吉村  | 一風  |
| 國見   | 美和子 |     |     |
| 熊代   | 美智子 |     |     |



川 柳 塔 社

## 川柳塔社常任理事会

| 句 会 名                 | 日 時 と 題                                   | 会 場 と 投 句 先                                                     |
|-----------------------|-------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------|
| 川 柳 会<br>梨 花          | 15日(土)午後1時から<br>決める・楽・お願い・雑詠              | 鳥取勤労者総合福祉センター 1F会議室<br>(鳥取駅南)<br>〒680-0044 鳥取市御弓町40-3 宮木方 坂田和歌子 |
| 岸 和 田<br>川 柳 会        | 15日(土)午後1時半から<br>偶然・景気・恋・再会               | 市立福祉総合センター 2F<br>南海線岸和田駅東歩3分<br>〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村    |
| 川 柳 塔<br>みぞくち         | 16日(日)午前10時半から<br>正月・花回廊・雑詠               | 溝口五区集会所<br>〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3<br>小西雄々                   |
| 川 柳<br>ねやがわ           | 16日(日)午前11時から<br>報道・老化・約束                 | 寝屋川市民会館<br>京阪寝屋川市駅東口からバス市民会館前下車<br>〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉    |
| 岬川柳会                  | 16日(日)午後1時半から<br>ストレス・穏やか・特別              | 岬町淡輪公民館<br>〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592<br>八十田洞庵                    |
| もくせい<br>川 柳 会         | 17日(月)午後1時から<br>ヒット・胸・世間・自由吟              | 豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分<br>〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊          |
| 高槻川柳<br>サークル<br>卯 の 花 | 20日(木)正午から(席題なし)<br>宝・誓う・誕生日<br>それっきり・自由吟 | 高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分<br>〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児            |
| 東大阪市<br>川 柳<br>同 好 会  | 22日(土)午後6時から<br>招く・手紙・トップ・髪               | 東大阪市立社会教育センター 2F<br>近鉄布施駅北長堂小学校隣<br>〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風 |
| 川 柳<br>ふうもん<br>社      | 23日(日)午後1時から<br>どん底・バランス・ぐったり             | JR鳥取駅構内 シャミネホール<br>〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京                 |
| はびきの<br>市 民<br>川 柳 会  | 23日(日)午後1時から<br>音楽・驚く・シャッター<br>「捨てる」      | 羽曳野市立陵南の森公民館<br>近鉄高鷲駅北東歩10分<br>〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏     |
| 京 都<br>塔 の 会          | 24日(月)午後1時から<br>吉・ゼロ・無事                   | ハートピア京都<br>地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ<br>〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽     |
| 南 大 阪<br>川 柳 会        | 27日(木)午後6時から<br>礼拝・利口・類別・レター              | 玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分<br>〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲        |
| 川柳クラブ<br>わたの花         | 28日(金)午前10時から<br>叱る・足・集金                  | 八尾市生涯学習センター<br>〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風                    |

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6629-6914）へご連絡ください。

# 1 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

| 句 会 名                | 日 時 と 題                                    | 会 場 と 投 句 先                                                                         |
|----------------------|--------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| 川 柳 塔<br>な ら         | 6 日(木)午後 1 時より<br>家族・面・まかす                 | 船橋フロムワン (船橋商店街内)<br>近鉄奈良駅西北へ 7 分・JR 奈良駅北歩 5 分<br>〒636-0144 奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西2-4-23 中原比呂志 |
| 尼 崎<br>いくしま          | 7 日(金)午後 1 時から<br>鍋・顔・雑詠(A・B)              | サンシビック尼崎 3 F 阪神尼崎駅南西徒歩 5 分<br>〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代                         |
| 富 柳 会                | 8 日(土)正 午 から<br>天・鮮やか・自由吟                  | 新春句会のため場所変更<br>問合わせは下記まで<br>〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子                           |
| 川 柳 塔<br>打 吹         | 8 日(土)午後 1 時から<br>きらきら・資産・昇る               | 倉吉市上灘町上灘公民館<br>〒682-0805 倉吉市南昭和町21 野口節子                                             |
| 川 柳 塔<br>ま つ え       | 8 日(土)午後 1 時半から<br>結ぶ・求める・カメラ              | 松江市雑賀町 雑賀公民館<br>〒690-0859 松江市国屋町381 竹内すみこ                                           |
| 川 柳 塔<br>みちのく        | 8 日(土)午後 4 時から<br>当たる・天才・ひそひそ              | 弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぱ二階「川柳道場」<br>〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵                            |
| 川 柳 塔<br>わかやま        | 9 日(日)午後 1 時から<br>福袋・こんぶ・ペットボトル<br>折句「あそび」 | 近鉄カルチャーセンター 2 F JR 和歌山駅前<br>〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良                            |
| 川 柳 塔<br>唐津支部        | 9 日(日)午後 1 時半から<br>ふだん・紺・カード・雑詠            | 唐津市栄町公民館<br>〒847-0082 唐津市和多田天満町1-2-13 仁部四郎                                          |
| 西宮北口<br>川 柳 会        | 10 日(月)午後 1 時から<br>出発・動く・いよいよ・自由吟          | 西宮市立中央公民館<br>阪急西宮北口駅南出口徒歩 5 分<br>〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子                      |
| 尼 崎<br>尾 浜<br>川 柳 会  | 11 日(火)午後 1 時半から<br>始め・敏感・自由吟              | 尼崎市立立花公民館 尾浜分館<br>阪急武庫之荘北口から市バス④番尾浜 2 丁目下車<br>〒661-0976 尼崎市潮江 5-2-47 田辺鹿太           |
| ほ たる<br>川 柳<br>同 好 会 | 11 日(火)午後 1 時から<br>天・読む・やはり                | 豊中市立養池公民館<br>阪急・モノレール養池駅西へ150米<br>〒561-0864 豊中市夕日丘1-7-5 田辺正三郎                       |
| 堺川柳会                 | 13 日(木)午後 1 時から<br>(折句)わさび・(共選)鈍い・先頭       | 堺市総合福祉会館<br>南海高野線堺東駅市役所西入<br>〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑                            |
| 八尾市民<br>川 柳 会        | 13 日(木)午後 6 時から<br>ぼちぼち・貯める・頭・始発           | 八尾市文化会館 4 F 近鉄八尾駅東へすぐ<br>〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子                               |
| 城 北<br>川 柳 会         | 15 日(土)午後 1 時から<br>ときめき・笑う・プライド<br>自由吟     | 中宮老人憩いの家<br>地下鉄千林大宮駅 2 号出口徒歩 8 分<br>〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子                   |



# 編集後記

★あけましておめでとうございます。二〇〇〇年という節目の年が穏やかな充実した一年になりますよう、心から祈念いたします。

★或る平日の真昼の郊外電車での出来事。車内は閑散として十人ほどが点々と座っていた。一人の立派な五十歳代とおぼしき紳士が、突然「どうしてだノどうなっているのだノ」と声高に言って、窓枠に頭を打ちつけている。見ればボロボロと泣いているではないか。あとは聞きとれないが独り言を言いつつ、髪の毛を掻きむしっている。あまりのことに私も目を逸らし、周りの人々も見えないようにしていた。そして、次の駅で降りて何事もなかったように歩き去った。

★何があったのか想像するしかないが、真つ昼間、人品卑しからぬ人物が公衆の中で泣くからには余程のことなのだろう。また考えてみると、その男性にとつては、たとえ短時間でも心置きなく泣ける場所が他になかったのかも知れない。

★人は皆、言うに言えない哀しみ、痛みを持っている。その閉ざされた哀しみ、痛みは閉ざされているがために二倍にも三倍にも大きくなる。大声で泣く、人に聞いてもらうことで少しは楽になる時もある。

★他人の痛み、哀しみを分かる柔らかい心、また、自分の仮面をかぶらない正直な心を大切にしたい。川柳をすることによって心が少しでも柔らかくなれば……。

★年の初めに誓うことは多いが、竜頭蛇尾にならぬように心したいものだ。(み)

## ひとこと

川柳と私

子供達が巣立ちの為に羽ばたき始めた頃、友達に誘われ川柳を始めました。はじめは一句作るのも一日がかり。ああでもないこうでもない、と、あつちを直しこつちを弄っているうちに、最初の意図とはまるつきり違う句になり、戸惑つたりもしました。が、自分の思いを十七文字で表現出来た時、何とも言えない爽快感を感じ、今

日まで続いています。

多い時は月百句、少ない時は四十句ほど作りますが、「これ」と言えるのは年に一句か二句、少ない時は二年に一句位です。でも出来た句はみんな我が子、私の分身です。

還暦を迎えたら、一冊の句集を作り、私の会葬御礼に配ってもらいたいと、計画を立てています。

(驚見 正子)

○あけましておめでとうございます。今年も川柳の楽しさにハマって下さるお仲間が、沢山迎えられることを期待しています。

○昨年の秋のある日、うれしいうちで、折から、前日川協理事長で、医師の山田良行氏から「あの団体はいかがわしいから、あんな事書いてもらっては困る」と人伝に聞いた。心配が現実となり、募金してくれた孫の善意を

踏みにじったのがつらく、家族には黙っておいた。そしてひとり、人間不信と自己嫌悪に陥っていた。

○昨年秋のある日、うれしいうちで、折から、前日川協理事長で、医師の山田良行氏から「あの団体はいかがわしいから、あんな事書いてもらっては困る」と人伝に聞いた。心配が現実となり、募金してくれた孫の善意を

踏みにじったのがつらく、家族には黙っておいた。そしてひとり、人間不信と自己嫌悪に陥っていた。

○そんな気持ちをずっと重く引きずっていたので、この受賞のニュースがわがことのようにうれしく、現金なもので心がパツと晴れた。

# 川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」発表（3月号）

地名

雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。



## 作品募集

3月号発表(1月15日締切)

川柳塔(8句) 橋高薫風選  
水煙抄(8句) 河内天笑選  
愛染帖(3句) 波多野五楽庵選  
茴香の花(3句) 宮西弥生選  
課題吟「ふだん」 木村春枝選  
(3句) 「紺」 高杉千歩選  
「カ」 丹下美津子選  
「下」 吐田公一担当  
初歩教室「本」(3句)

4月号  
課題吟「キッチン」「鈴」  
「のびる」  
初歩教室「はい」

## 本社1月句会

とき 1月7日(金) 午後5時半  
ところ アウィーナ大阪 4階  
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441  
地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分

兼題 「コント」 川上富湖選  
「盛る」 三宅保州選  
「蓋」 安藤寿美子選  
「抜ける」 河内天笑選  
「世界」 橋高薫風選  
席題 1題 当日発表(各題2句以内)  
会費 1000円 投句料 500円

## 本社2月句会 7日(月) 予定

兼題 「ゼロ」「毒」「背く」  
「舞う」「火」

## 夜市川柳募集

第8回「月」 板野美子選  
ハガキに3句 1月末締切  
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3  
河内天笑方 堺川柳会

## 「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
  - (2) 愛染帖・茴香の花欄・一路集(課題吟) および初歩教室への投句は、同人・誌友に限り、川柳塔柳箋を使用してください。ただし茴香の花欄は女性だけ。
  - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
  - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 六百元(送料92円)

半年分 四千円(送料共)

一年分 七千九百円(同)

「二〇〇〇年(平成十二年)一月一日発行

編集兼 発行人 橋高薫

印刷所 美研アート

〒545-0005 大阪府阿倍野区三軒町一〇一六  
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(06)261-1691 四番  
振替 〇〇九八〇一五 三三六八番

わかりにくいキャストで贈るわかりやすい浪花人情劇!

特別プロデュース

# 王将

特別演出 ● 松尾スズキ  
作 ● 北條秀司



近鉄小劇場提携公演

2000年 2月25日(金) 19:00開演(18:30開場)  
26日(土) 14:00開演(13:30開場)

会場 ● 近鉄小劇場

前売開始日

12月5日

入場料(全席指定・税込) / 前売 4,500円 当日 5,000円

電話予約・お問い合わせ ● 近鉄小劇場 06-6771-1009(AM10:00~PM6:00)

<電話予約後の送金先> 〒 543-0001 大阪市天王寺区上本町 6-5-28 近鉄小劇場「王将」係

チケット取扱い ● チケットびあ 06-6363-9999 / ローソンチケット 06-6387-1900